川上音二郎貞奴漫遊記

187
190

074805-000-2

187-190

川上音二郎貞奴漫遊記

金尾 種次郎／編

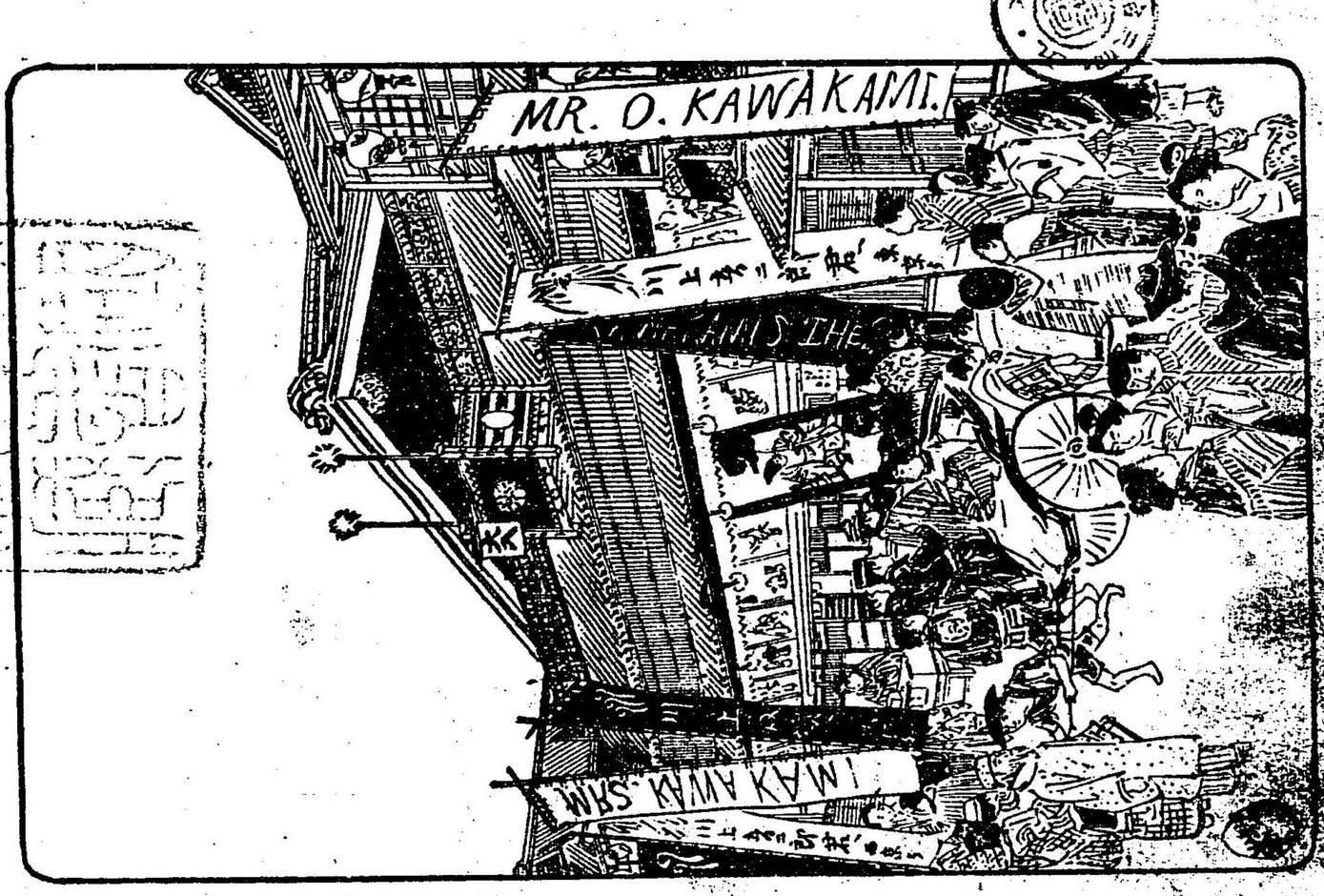
M34

CEK-0123

川上音二郎自叙漫遊記全

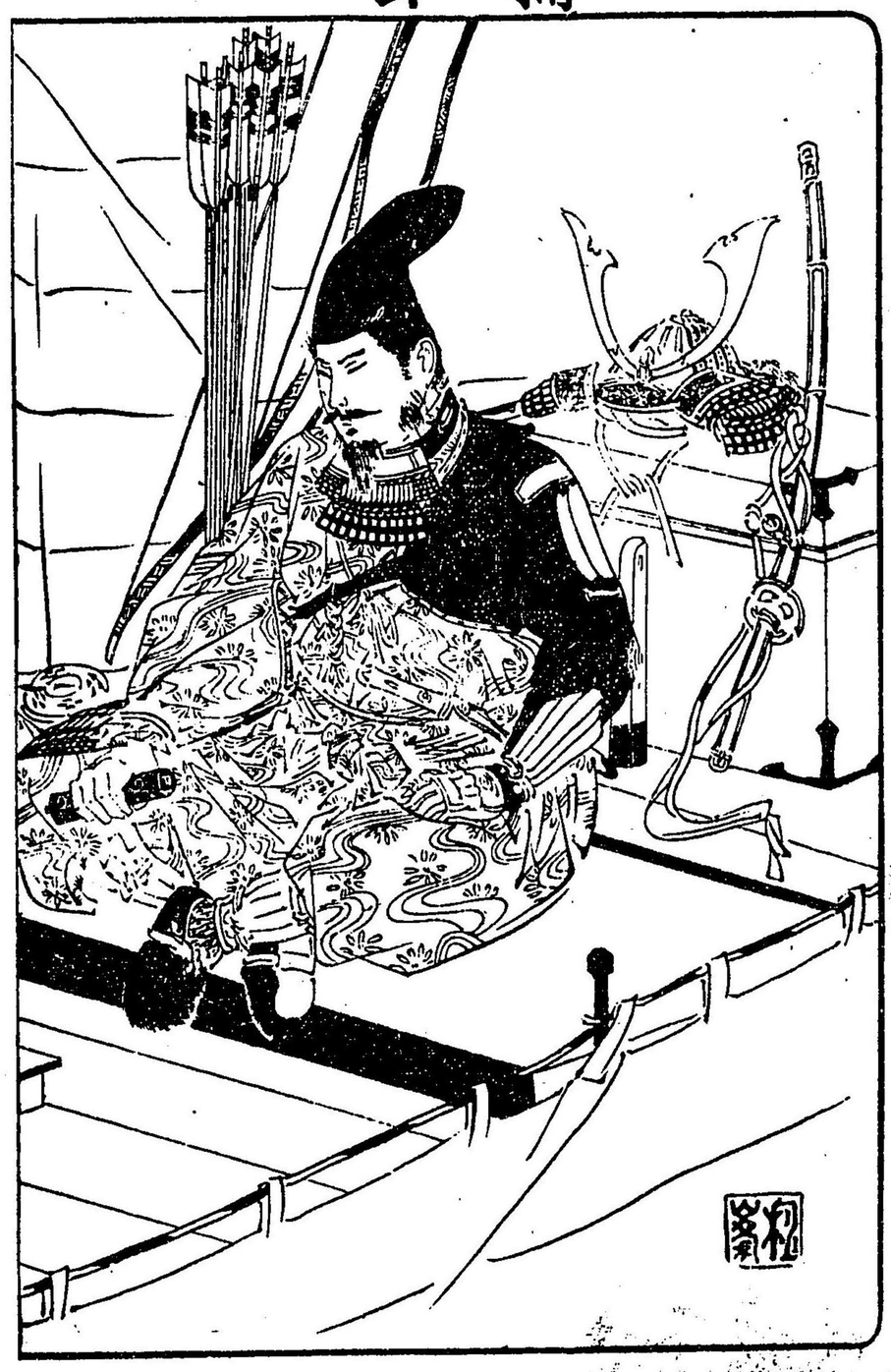
157
190

Kawakami
Sada Yacco


MR. O. KAWAKAMI.
MRS. KAWAKAMI

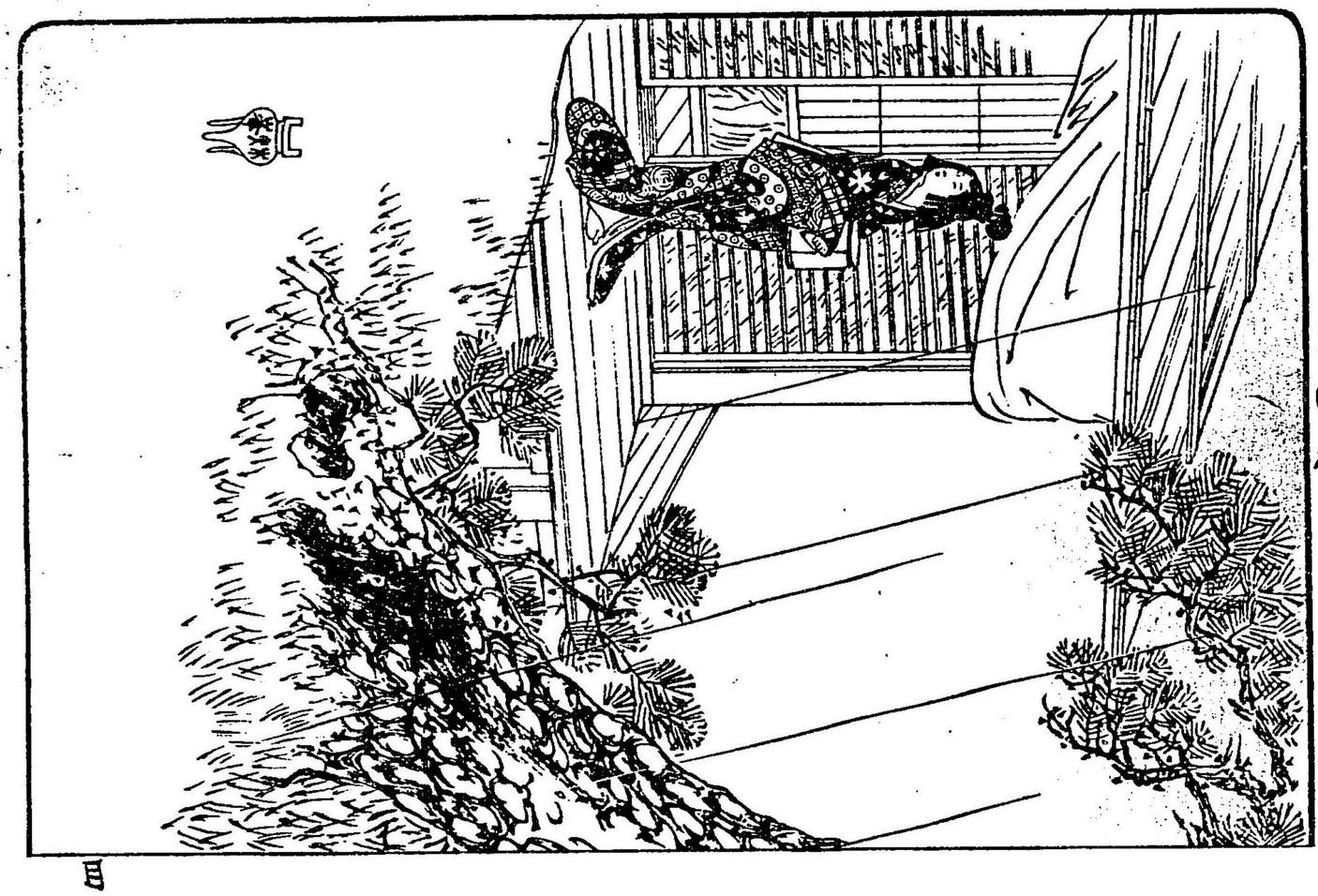
NANKŌ

楠公

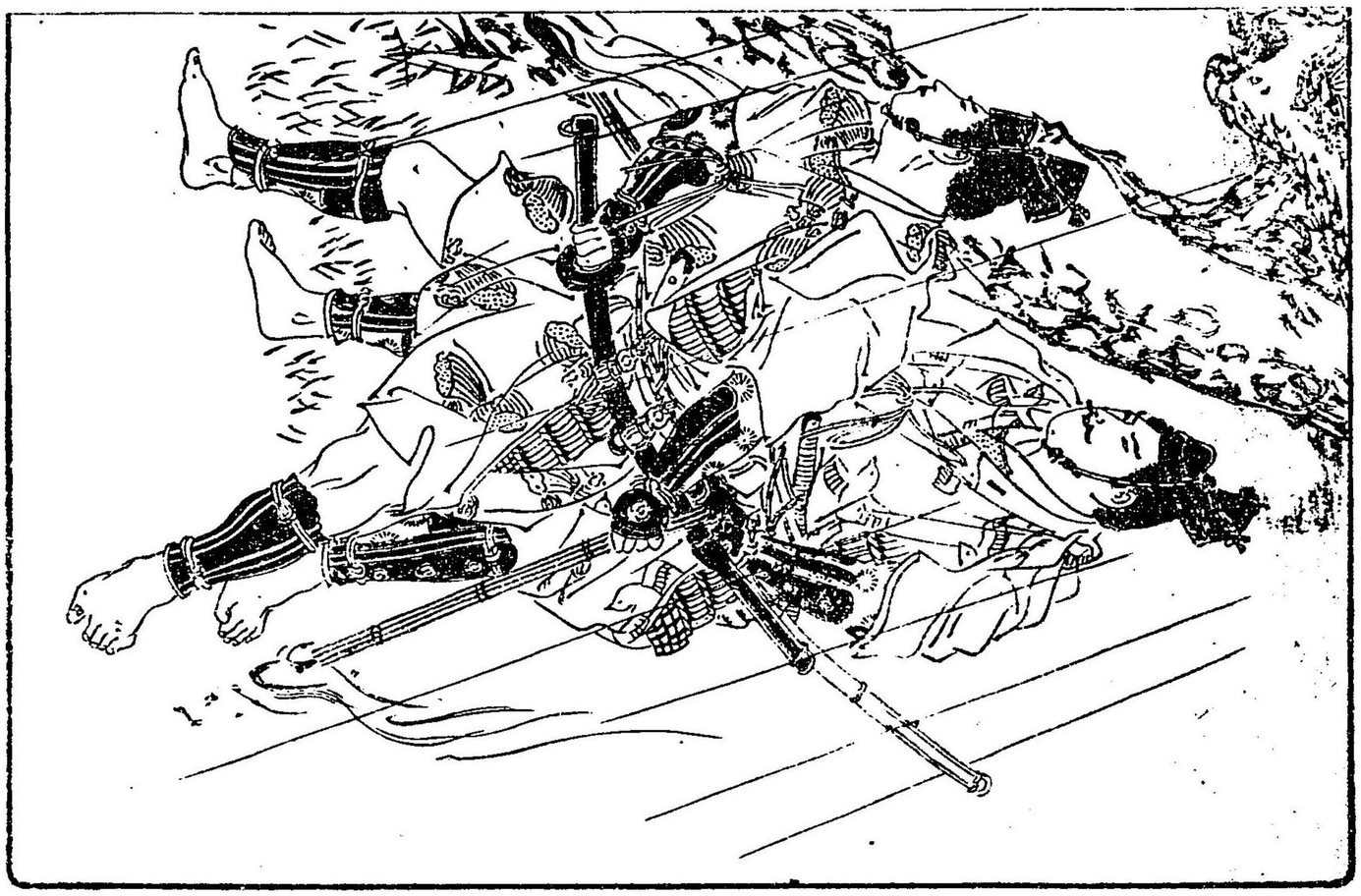


KOJIMA TAKANORI

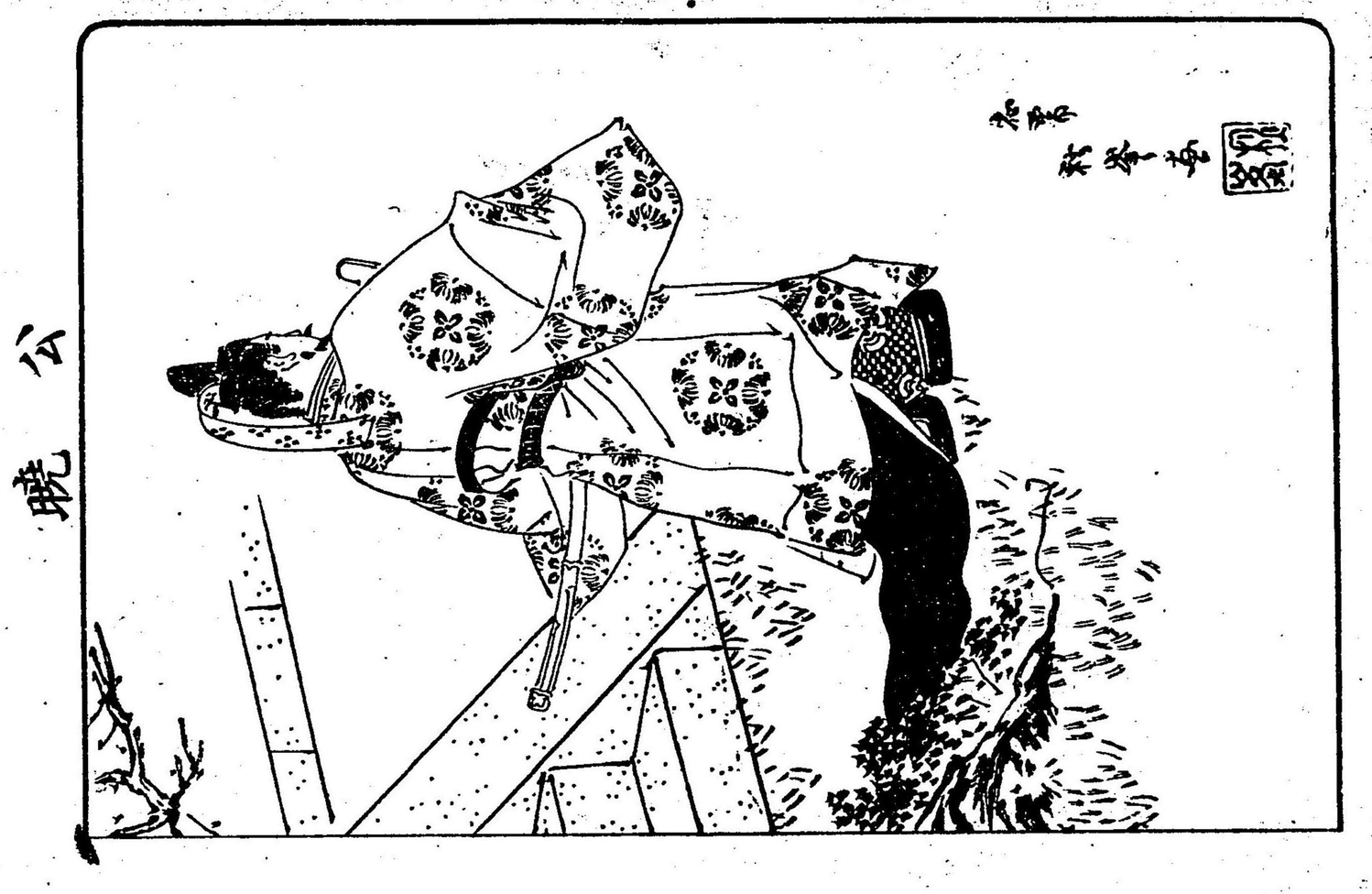
徳高島兒



三



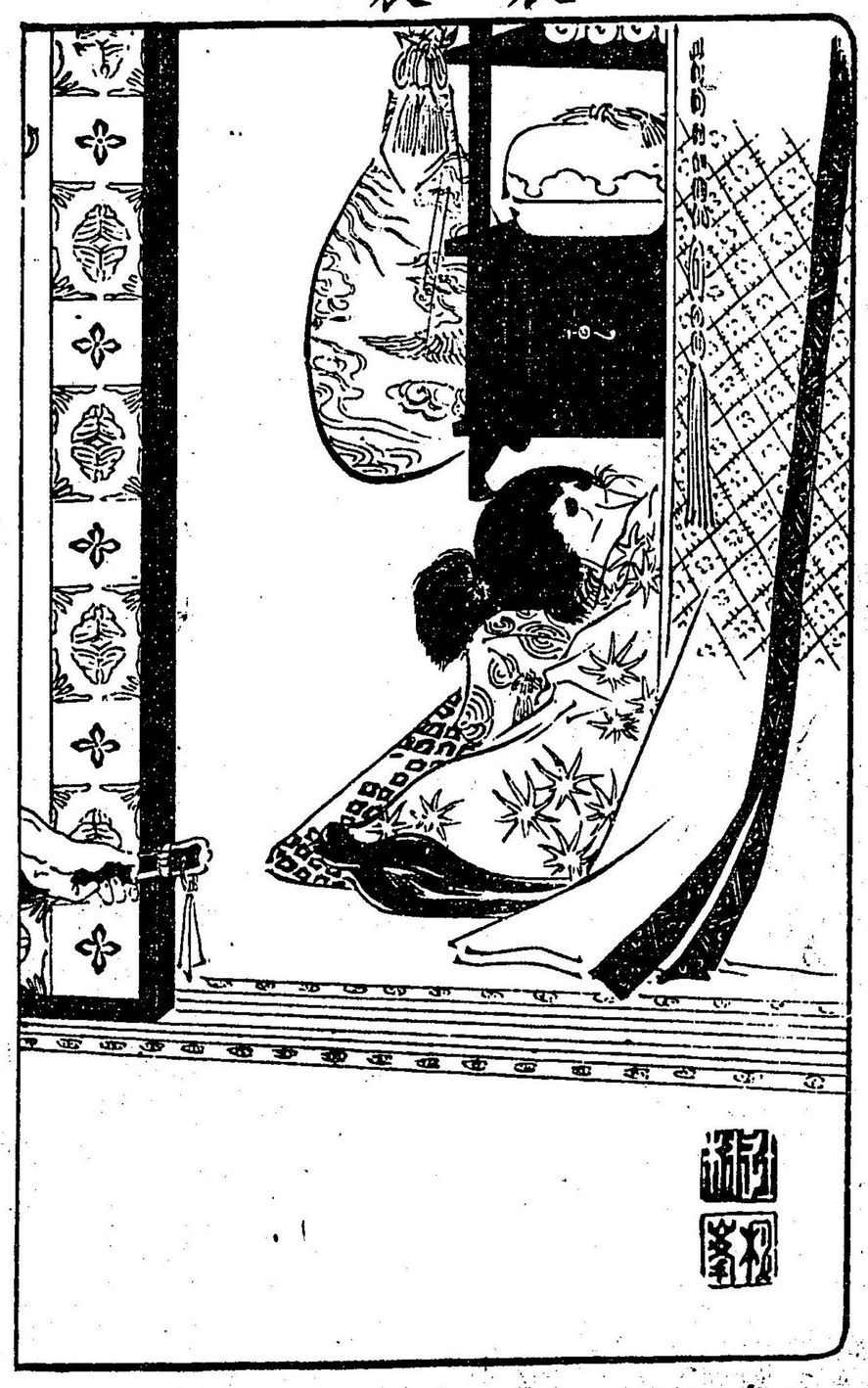
我唱



暁公

KUGYŌ

袈裟



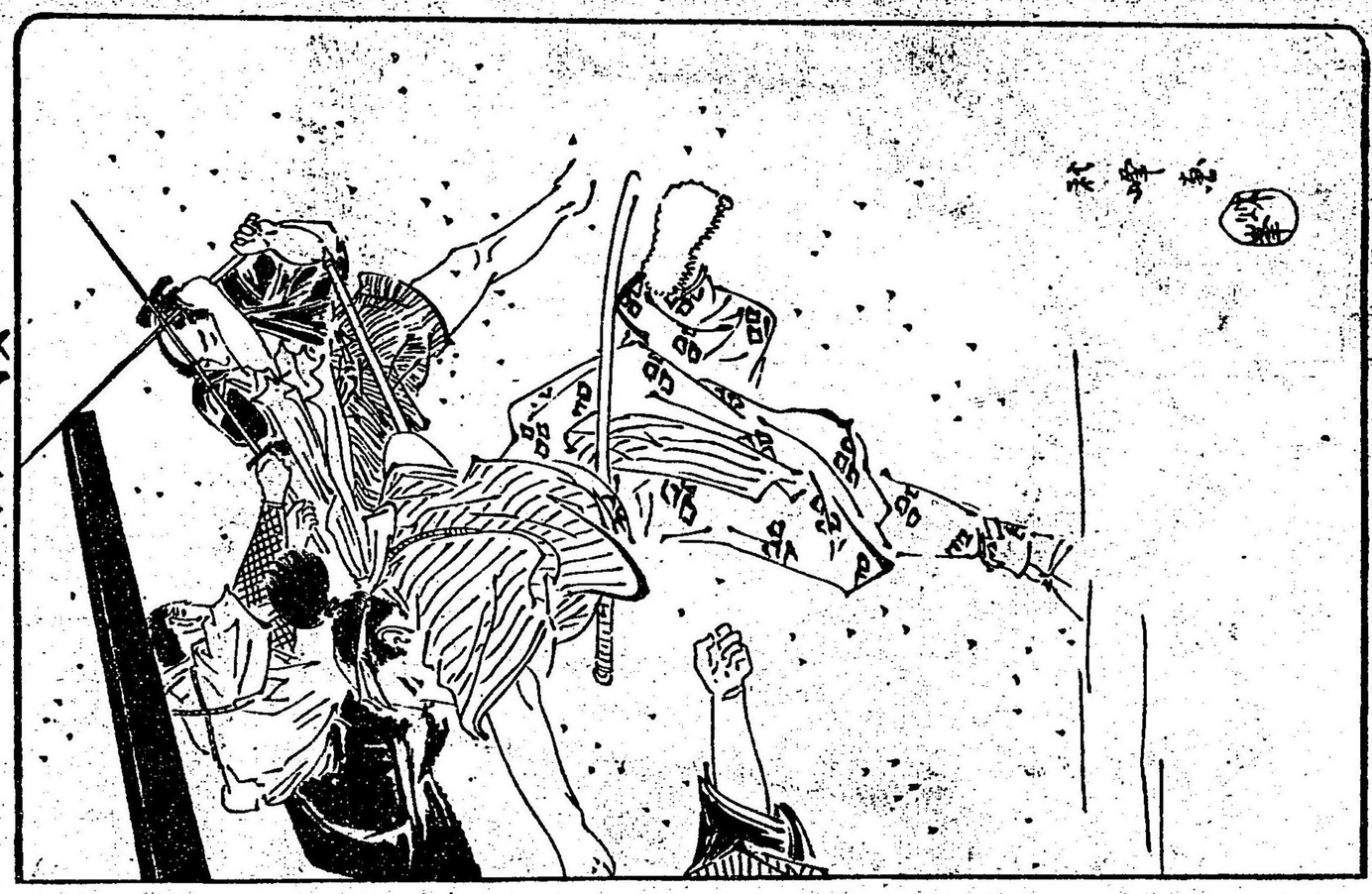
KESA

腹切

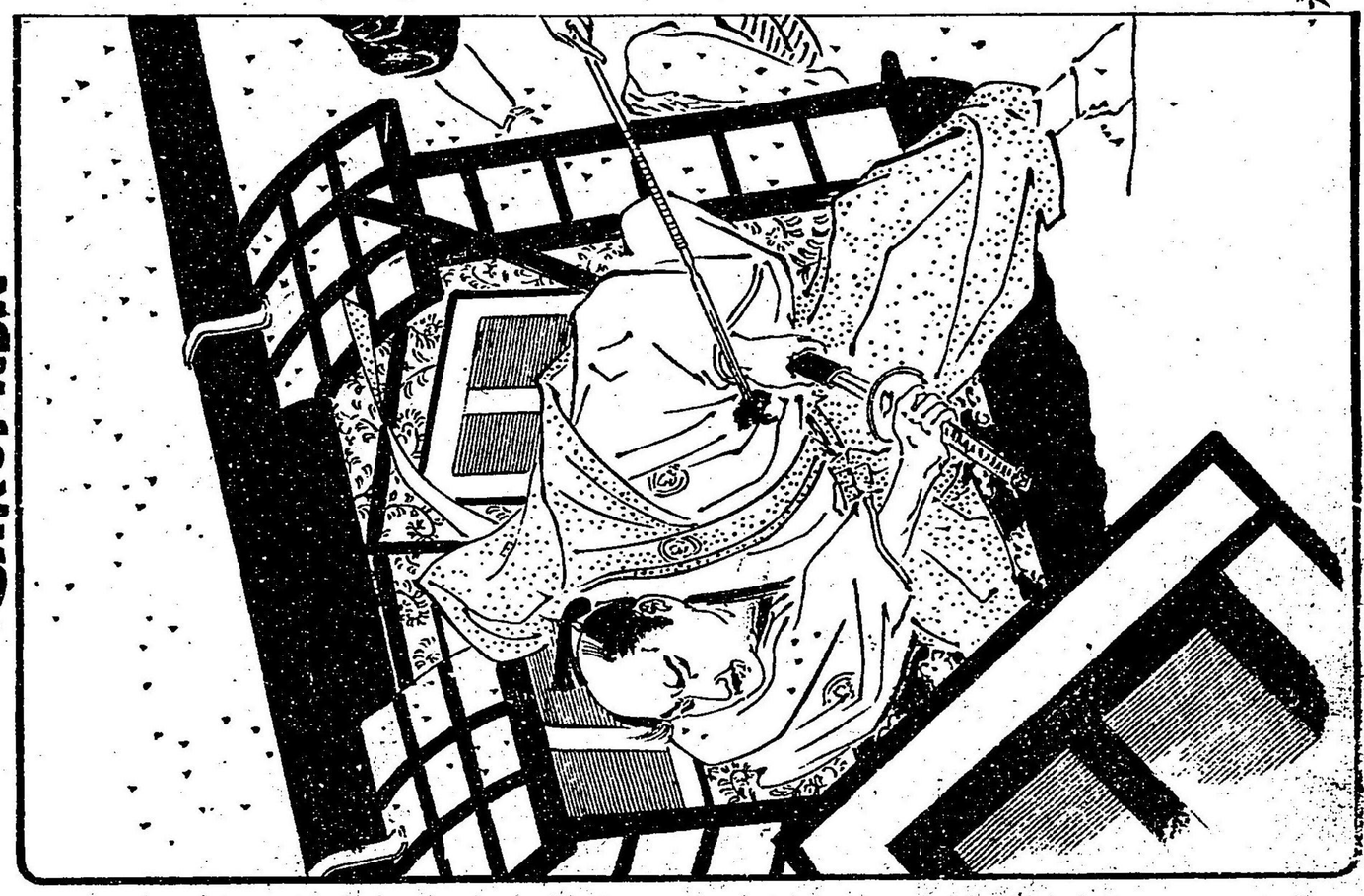
HARAKIRI

KOREMORI

盛維



田櫻



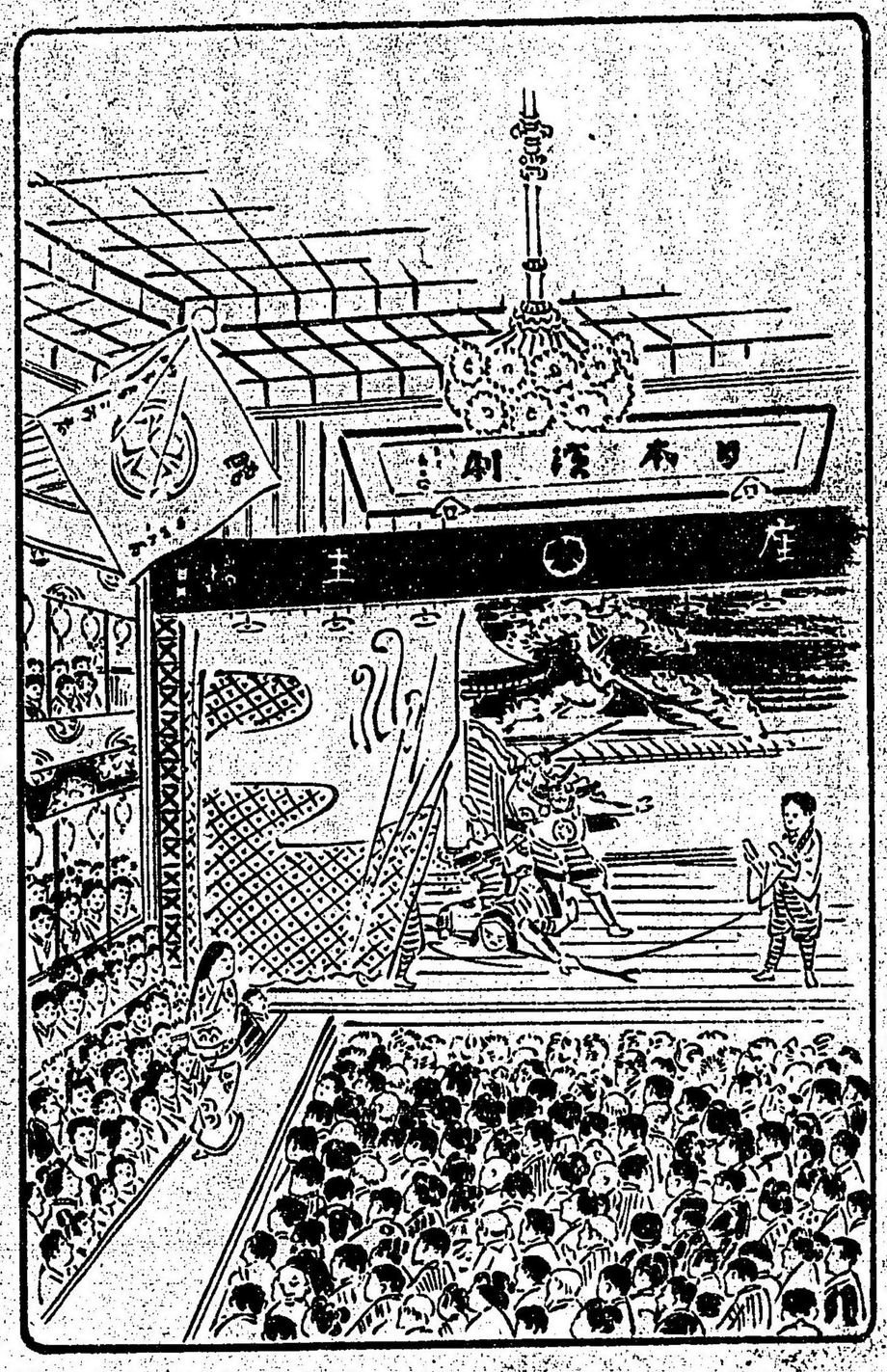
SAKURADA

Dōjōji

道成寺

KAGAMIYAMA

鏡山



漫遊記

川上と貞奴

我邦に始めて壯士芝居てふ新演劇を組織して、大いに社會の時好に投じ、漸次に舊演劇と對抗の姿を現はし來り、中頃捲土の勢ひをもて、團、菊、左等の舊老優を喧若たらしめたる川上音二郎氏が、種々の事情より、破綻百出し弱弩の意氣ありし彼も、末には魯縞を穿つの力を失ひ、幾度か起たんとして幾度か躓づき、屢成らんとして屢敗れ、遂に全く倒れるに至るや、決然最愛の妻貞奴を携へて、東京を遁れ去りぬ、彼等が此地を去るや、一葉の短艇を繰りて

相、違、紀の三大離を犯し、幾度か危險なる風濤の中に、死すべき生命を拾ひつゝ、辛らうとして、神戸に着くに及び、某々等の勸誘斡旋に依り、殷賑の殘燼十餘名を率ゐて、先づ米國に渡りけり。彼等は人情異なり言語通ぜざる外國に於て、さながら聾啞を相手に日本演劇を興行し、何人にも結局の失敗を豫期せられしに係らず、川上及び貞奴は、日本のアクター及びアクトレスとして、大いに梨園社會をさわがし、英國の名優サト、ヘンリー、アをヴキング、俳優大學校長ベルクナップの兩氏に、非常の知己を得、其他有名なる文學者、美術家、新聞記者及び上流婦人等に珍重されて、名譽益々揚がり、夫れより破竹の勢ひを以て、倫敦に渡りウエールス親王殿下（今の英國皇帝陛下）より觀覽の榮を辱ふし、巴里に赴きては同國大統領、同國政府及び同市美術大學校等より勳章及記章を下賜せらるゝに至り、翻へ再び巴里ヴイフーナー座の熱望に依りて、本年四月彼地に渡航する の契約調ひしなどは殆んど夢にだに豫期せざりし成功を遂げ、名譽を擔ふて歸朝しげり、しかしながら彼等が此處に至るまでには、千艱萬難相接して起り、其乘港に在るや、衣裝道具を差押へられ、旅宿を放逐の憂目に逢ひ、同胞より歸國を勸告され、至る處の座主に擯斥され、幾度か炭鑛の工夫に變せんと決心し、市俄高に赴くや、盡はパン二三片を一食し、夜はコーヒー一椀を呑みて數日の露命を繋ぎ、遂に一文の金さへ得るの手段に盡きて、一行十五人四日間の絶食を爲し、ボストンに到るや、川上外二名病に罹りて二名は空しく異郷に土化せしなど、眞死の淵に陷りしと幾度なるを知らざるけり。彼等の今日あるは實に此の艱難、此の苦痛と格闘して、遂に之れに打勝し結果に外ならざるなり、今彼等一行が米國は乘港、市俄高、ボストン、華盛頓、紐育より、英國倫敦に向ひ、佛國巴里に渡りて最終の興行を爲すまで、其途中蓋かりしと、辛かりしと、喜ばしかりしと、可笑しかりしと、嬉しかりしと、悲しかりしと、失敗せしと、成功せしと等、其が表面裏面に續出せし珍談奇聞、及び彼等が西洋の芝居、人情、風俗等につさてさま〳〵見聞し來りし新事實等、詳細なる經歷を、其本人たる川上と貞奴の口より物語らしめん

▲十三尺の短艇

（コレヲ相、違、紀の三大離を横切る）

川上は歐米に於ける一行の經歷談をなすに先ち、彼が妻貞奴と共に十三尺の短艇に乘じ、相違紀の三大離を乘切りて神戸に着せる擬樣を簡單に物語れり、彼曰く「エ、大森を出發いたしたのは三十一年九月の上旬でした」と其傍に坐れる束髪洋裝の婦人を顧みて「此のお貞と、私の姪（名はしげ、當時十三歳）と三人で、外にふくといふ一匹の愛犬を連れ、米、味噌、醤油の類を積込んで、お貞が櫂を取り、私が櫂を漕いで、愈よ海に乘出したとき、勇ましい中に、心細い感がありました夫れから横須賀へ行って、船を軍港へ乘入れたので、取りかゝって、新井少將の前に引張り出されいろ〳〵の等問を受けた末、此奴ア氣狂だと警察の手へ下げられて、航海の差止めを喰ったのです私は其處で、警官と大論判を遂りましたが、結局姪と犬は親戚召喚の上引渡されて、後は、貞と私と夫婦切りになって、新井少將の忠告や警官の說諭も聞かないで、強情を張り通して、横須賀を乘

出した。

▲果して東北の強風

（汲み出しては進み〳〵）

三浦岬を經て下田に向ひました時は、天氣豫報に東北の強風ありと警戒がありましたが下田へ行くには眞西を指して行くのですから、東北の強風結構！と短艇の、三角帆を充分に張りて進んで行く中に、果して豫報の通りの暴風です、波濤はどん〳〵船の中に打込むのを、バケツで以て、汲出しては進み〳〵して、命から〴〵下田に着しました。

▲洋中に漂ふこと三日

（命を助つたのは不思議な位ゐ）

名にし負ふ遠州灘では、南の大暴風で非度い目に遭ひました、仕方が無いので、三日間錨を下ろして、洋中に漂ふて、風の變るのを待つて居ましたが、中々變りさうも無い。エ、進ッちまへといふので風の吹〳〵方向に任かせて、帆を充分に張ッてぶッ放すと船は矢を射るやうに、北の陸の方へ向つて走つたが、とう〳〵天龍川の砂原に乘上げて、大破損をしました、後で思へば船の破損より二人の命の助つたのが、不思議な位ゐと思はれた

▲一町漕いでは吹戻され

（紀州灘しはの岬の危難）

遠州灘よりもまだ困難をしたのは、紀州灘のしはの岬です、此處は第一番の難場で、普通の小蒸汽などでは逆も駄目です。私共が乘つてるのは、僅か十三尺の短艇だから、切ッて自由に操縦り易い帆り間違ッて沖へでも出てたら夫れッ切りだから岸へ〳〵と〳〵ッ附いて、やう〳〵岬の鼻まで漕付けて、其處を回らうとすると、山の如き大濤と、岩を千切るやうな風が進ッて來て、忽ち後へ戻されるゝ、さういふ風に、一丁行つては打戻され、二丁行つては吹返へされ、僅か七八丁の處を、一日かゝつて漸う〳〵の事で通り越しましたのです、以上が相、遠、紀の三大難で、三度死地に陷つて三度命を拾ふたといふ苦辛慘憺たるお話である、夫から一直線に淡路島へ渡つて、由良の砲臺の下へ船を附けて無事に神戸に着いた事は着きましたが、之が爲め身体が非常に疲勞ッてとう〳〵血を吐いて當分入院をしました。

▲引張り揖！押揖！

（新熟語を拵へる）

此の間可笑かつたのは、お眞が揖を取る時です、表揖といつても取り揖と云つても如何してよいのかサッパリ分らないでせう、夫れぢや仕方が無いといふので、表揖の時は引張り揖、取揖の時は押し揖といふ新熟語を製造して、引張り揖！押し揖！で、遠州灘や紀州灘を進つて來た。

▲一行十九名の門出

（米國桑港へ向け）

私が初めの考へは、其短舟で朝鮮海を横斷つて、支那沿岸を漫遊する筈であつたのですから、神戸に着くと直に遊船所に、舟の修繕を賴んで、病氣の全快次第出發をしやうと、思つてゐました、すると東京からは私の一座で、私の腹心や股肱とでも申すやうな、十三名の者が、態々神戸へ遣つて來て、うんな冒險は思ひ止まれと忠告をしますし、又當地の知人等も利害得失を說いて切に止めて居ます中に、亞米利加大西洋岸のアットランチック市に、日本の庭園、ヤアお茶屋です、夫れを營業してゐる楠引弓人といふ人から、桑港に來て芝居を打ては如何だと、私共を買に來たのですから、支那沿岸の漫遊なぞより此方が餘程面白からう。殊に是まで外國へ行て、日本演劇を演つたものは一人も無いのだから、一層張合があつて面白いのみならず、不完全ながらも彼等に、日本演劇の一斑を紹介して、多少の成功をしたならば、大いに我々新演劇一派の奬勵にもなるだらうと、いろ〳〵前途有望な事計り考へて、愈よ渡米する事になつて、芝居の衣裳道具等一切の準備を整へて、一行十五名の中に、本年十三歲になる私の姪(名はつる、短舟に乘りしげの妹)と十六歲になる弟の磯二郎——二人とも米國へ殘して來ました——、此二人外二名を一行の中に加へて、都合十九名で、ゲーリング號に乘組み、亞米利加を指して、神戸を出帆しましたのは、三十二年四月三十日でした」と、川上は喫茶一椀、話は是れより米國桑港に於ける初舞臺失敗談に移れり。

▲衣類道具を差押へらる

(芝居は當つても)

川上及び貞奴の一座十九名が、一昨年五月廿三日米國桑港に着するや、爲こ一座の渡米を勸誘せし楠引某は、營業の手違ひより大に損耗をなして、芝居興行ゑころの騷ぎ　ねば、同港に日本移民の事を取扱へる辯護士光顯耕作なる者に、一切の斡旋を引受けしめたるより、土地不案內なる一座は萬事光顯の爲すがまゝに任せて、カリフオルニヤ座を借受け、日本の芝居に飽ゐし日本居留民を目指す見物となし、其の十八番なる「兒島高德」「楠公」「道成寺」等の狂言を以て、漸く初日を出せし處思ひの外景氣好く、四日目に至り、諸雜費差引き、純益二千弗を得たる程なれば、一座益〻勇を鼓し、五日目の興行に取掛らんとて、ホテルを出で劇場に赴き樂屋に入らんとすれば樂屋の戶は堅く閉ざされて、中なる衣裳道具は悉く差押へられたり、川上は大に怪しみて座主に仔細を聞けば、彼の光顯耕作は、また小屋料も仕拂ずして昨夜二千弗の純益金を携帶し、何處とも無く姿を隱したれば、期は差押をなしたりとの事なり。

▲ホテルを放逐せらる

(十七人の宿無乞食)

されば川上等の驚き譬へんに物無く、何故に光顯は斯る不埒を働らきしかと、段々內情を探れば、光顯は移民取扱ひ等の事につきて、兼て桑港の外人某に少からざる借金あり、外人は光顯が芝居を興行するを機として、頻りに返濟を督促する處より、光顯も進退谷まりて、斯くの始末に及びしものと判然りたり、此時の有樣を川上は物語りけるやう「ドウも此時程困つた事はありませんでし

た。兎に角本國には、大々的吹聴をして、私共も大野心、大抱負を以て遣つて來て、言はゞ世界の檜舞臺で、日本劇、しかも新演劇の初興行をして、夫れで僅か四日に對する總益金が二千弗と言ふのですから、コヂヤ占めたと、内心大天狗で居る矢先に、此始末ぢやありませんか？差押へられた計りなら、まだ好いです。芝居小屋から追出されて、悄々ホテルへ歸つて見ると、私共の部屋にはヒン〳〵錠が下ろしてあつて、中にある一切の所持品は之れも差押へてある、其んな滅棒な理窟は無いと、ホテルの主人を相手に談判をしても、主人は早くも我々が芝居小屋の不始末を知つて、無財産の貧乏人と見拔いたから、惜け用捨も無い、泣顔に蜂とは此の事で、夫れから宿屋を放逐されて十七人が宿無し犬の哀れなさまで、ホテルをそろ〳〵出て行きは行つたものゝ、扨愧はといふと、右の始末であるから、パンを喰ふ錢さへ無い。宿屋は元より無い、有つても、此有樣では泊めてくれる處は勿論ない。無いと言つて往來を大勢でぶら〳〵歩いて居る譯には行かんから、仕方無しに公園へ行つて、共同椅子に十九人がズラリと陣を取つて、如何したら好からう、斯うしたら好からうと、いろ〳〵身の振方について評議を凝した、兎も角今日だけでも飯の喰へる算段を仕なければならぬといふので、持つて居る時計を賣る、鰐錢を搔集めるなど、非常な苦心をして、漸う露命を繋いで居つた次第です。

▲生死進退の決する所

（君達の生命は已れに預けてくれ）

此不幸に陷り此災厄に逢へる一座は、程なく義侠なる同胞の居留民の催しにかゝる一週間の義捐演劇に依り、九死の中より救ひ出されて差押へられし衣裳道具所持品等も、無事手元に歸る事を得たり、川上曰く「どうして此間ホテルなどに宿る處の騒ぎぢやありません、或人の世話で、汚ない物置小屋を借りました、其處が一面に板の間ですから、蓙を敷いて、其上に寢起をして、日本の雜貨店から米を取寄せて、丸で乞食見たやうな生活をして居りましたが、右の義損演劇が濟ひと、幾分の利益があつたのですから、其れを持つて、一日も早く歸國するが好からうと居留民の重立つた人々から頻りに忠告がまゐるし、一座の中には分離の相談が起つて、其の利益を山分けにして、私共夫妻は此地に留まり、他は布哇まで行つて、其處で歸國の旅費を拵らへたいといふのです、私は大いに是れに不賛成を唱へました。「ア〳〵百折撓まず、行ける處まで行つて見やうぢやないか、行くだけ行き、演るだけ演つて、いよ〳〵駄目だとなれば、其時ア蒸氣の釜焚きかボーイになつて歸へるのも、未だ遲しとなさずだ、夫れまでは君達の生命は已れに預けてくれ、頼む」と大蹈張りに蹈張つたものですから、遂に夫れに決して、夫れから大平洋岸を傳ふて、シャートルといふ一小市まで辿りましたが、私の責任はいよ〳〵重くなつた。

▲親妻子の生死に係はる一大事

（再び組織すれば）

亞米利加で初舞臺の大失敗と此れから起つた居留民の非難、冷評、歸國勸告、一座の分離説など萬

難蝟集の中に立つて、私一人頑張つて、桑港の一の門かウシャートル市の二の門まで行かうといふまでに爲た經營若心といふものは實に一通りでは無かつた。ソヨヤ斯うやつて多少成功をして歸つて來た今日から考へて見ると、何でも無いやうに思はれるのですが、其時の私は中々さうは行がんのです、言はゞ桑港から歸國說、分離說を排斥して、シャートル行を企てたのは、萬死の中から活路を求ひるのでは無く、態々死地を求めに行くやうなものです。只私の考へは行つて見たら、如何か成りさうなものだと、闇黑の中に朦朧と希望の光を抱いて居つた事。夫れですから、事再び齟齬する曉にはです、私一人の身体斗りぢやない、一座何十名と云ふ者を、再び生死の路頭に立たしめねばならぬ、只夫れのみならず此何十名は、故郷の日本に、親もあり兄弟もあり、妻子もあるものが過半で、皆一家の眞棹になつて働いて居るもので、彼等の生死は親兄弟妻子の生死にも關係る一大事ですから、私も餘り突飛なことは出來ない。成るべくなら、無理を言はずに、實は歸國の方針を取りたかつたのです。夫れはうんな場合には、誰れしも起るべき人情だらうと思ひます併し乘りかゝつた船で、男の意地づくですから、失敗の旗を卷いてすご〳〵後へ退くのは厭で〳〵堪らぬのです。

▲決然猛進し

（第二の難關に向ッて）

遂に決然猛進して第二の難關を破らうと云ふとに相談が纏まつて見ると、足手纏ひの者があつては重荷の上に重荷が殖ゑ、又憂き目つらい目をさせるのも可愛相といふので、一行の中に連れて來した私の姪――其時はやう〳〵十一歳になる姪の鶴は今も桑港に居る書工で、青木年雄といふ人へ、養女同樣に托けて、如何か普通學を三年だけは進らせくれと約束をし、又弟の磯二郎（其時十六歳）は或る西洋人の學僕に入れて仕舞つたのです。

▲第二の難關

（結果は如何に）

さて姪と弟が、右の樣に仕末が付きましたから、重荷の中にも聊か荷が減つて、愈々シャートル市に出掛けました。同市はさう遠方ではありません、桑港から八百哩東に當る太平洋岸で、滊車に乘ッて一人前五十錢か一圓位で行かれる處です、兎に角義損演劇の上り高の中から劇場料なぞ諸雜費を拂つた殘りを、僅か許り持ッて居るのですから、二圓も三圓も旅費の要かる遠方へは、行かうと思ッても行かれない。左樣です、シャートル市では、一回即ち一週間の興行をしました、處が此處は、日本の船舶も出入する港で、日本人の店なぞもあッて、意外に好結果を得て、又少し旅費位取たものですから、聊か桑港失敗の勇氣を回復して、一座稍々進取の氣が出て來た、此調子で行けば大きに工合が好い、モ一ッ進んで見やうぢやないか？進んで見やうぢやありませんか！と夫れから東方六十哩程隔つた、タコマ市へ行ました、此處は、極小さい市で、僅か二日間しか興行しなかッたが、割合に又好結果を得て、一人の費用一圓と見れば、夫に對する三倍の取入、詰り三

圓を得たやうな勘定になつたのです、愈々調子が面白くなッて、夫から太平洋の岸を傳ッて、東へくと指して、ボートランド市を經て市俄高府へまゐりました。

▲炭鑛を目懸けて行く

（罷り間違へば工夫になる決心で）

なせ太平洋岸を傳ふて、東へくと進んで行つたかなれば、此邊は至る處炭鑛があるから、炭鑛を目がけたのです罷り間違つたら炭鑛の工夫にでもならうといふ決心を抱いて出掛けたのです。ソシテ此の間は、なけ無しの金で、滊車なぞ贅澤を言ッちや居られませんから、滊車に乘る處は、山阪の嶮しい處許りと極めて、あとはやし〳〵歩きました、歩くと言ッても只歩くので無い。

▲衣裝道具を脊負つて歩く

（俳優か人足か）

肝腎な商賣道具の、衣裝、道具、鬘などいふ重荷があるから、お貞始め皆んな草鞋穿にさせて、衣裝は衣裝、鬘は鬘と、細紐や繩で縛ッて、名々肩にしよッて、歩きました、丸で人足です、ろして芝居小屋に着くと、此の人足共が、黑い顏に白粉を塗るやら、紅をつけるやら、お姫樣になつたり殿樣になつたり、早替りの藝當を御覽に入れる譯です、斯ういふ風にシャートルから市俄高へ着くまでは、芝居を演ッては旅費を拵へ、拵へては先へ進むといふ工合で、大した怪我過も無かつたので、幸ひに炭鑛の工夫にもならずに濟みましたが、市俄高は御存じの通り、米國オハヨー州の一大都會で、劇場も重なるもの斗りが、十三ヶ所もありますから、此處では、一番大興行を演ッて、大當りを取ッて道らうと、一同大層力んで行くと、其處の劇場からも刻付けられ此處の座主からも斥けられて、何處に取付く島も無く、一座十五人途方にくれて錢は無くなる飯は喰へず、生きながら餓鬼道に陷ッて只死を待つ斗りの苦みに逢つたのです。

▲部屋借りの困難

（二人しか泊れぬ）

市俄高には今申た通り、日本の歌舞伎座以上の大劇場が十三ヶ處もあるのですから、此處は、シャートル市やタコマ市などの田舍町とは違つて、十中の十までは成功をするだらうと思つて、疲れ足を引摺つて或る旅宿へ着きました、旅宿と云へば彼地で云ふホテルですから、立派なやうに聞こえますが、實は荷物を背負つて歩いて來た次第だからホテルなぞ、其んな洒落れた事は出來ない、お恥かしい話ですが、八方奔走の末、老人夫婦に下女が一人か二人居る、家の或る座敷を借りたのです處がこの座敷はダーブルベッドと云ッて、二人しか寢られない、床が只つた一ッある切りで、部屋の廣さが僅かに四疊半か其處らで、下は勿論板の間です、夫れだから日本の下宿か旅籠屋のやうに何枚でも蒲團を貸りて、轉々雜魚寢をする譯に行かんのみならず、御承知の通り何でも、規則で堅めた西洋の事ですから、ダーブルベッドの部屋に、二人以上泊るとは彼方で許して呉れません……夫れでもお金づくなら如何か知りませんが、お金は無論澤山無いと來て居るから、困つてしまつた。

一行十五人の中二人だけ泊まれるにしてから後の十三人は如何始末を着けるか？一夜位ゐなら軒下にでも寝られるが、是れから劇場の座主に談判をして、劇場を借り受るまでに、少くも一週間位ゐは要るので、サウ軒下にばかり寝ても居られない、サア困づた、如何しやう〳〵と、額を鳩めて評議の結果、爰に妙策を案じ出た。

▲妙策を案出す

（お客になッて秘密の寝泊り）

其妙策と云ふのは、私とお貞と二人で先づ其處を借り受けたのです。スルと後の十三人の者が、近處の旅籠屋から、私共を尋ねて來たやうなお客に見せかけて、最初二人ばかり遣つて來る、其二人が長ッ尻で容易に歸らぬ。スルと後からまた三人ばかり尋ねて來る、是れも話し込でいつかな座は立たゝぬ。其の中に殘つてる連中が時刻を見計らつて四ッ逵り來る、五人來るして、十三人が何時の間にか其ダーブルベッドの部屋に這入り込んで、荷物も秘密に運んで仕舞つた、勿論着いた夜の事で、頃は一昨年五月の末つ方。

▲四疊半の板間に十三人のごろ寝

（ボーイが來るとお客樣になる）

皆んな疲れ切つて居るのですから、荷物の衣裝を解いて、之れを冠ては、冷たい板の間にごろ〳〵寝て仕舞ふ、四疊半位の部屋に十五人といふのですから、丸で鮨か澤庵を附けたやうに、床の下まで蕊繰り込んでゐる。家では固より不審に思つて居たでせう、尋ねて來たお客が、申合せたやうに長ッ尻で、夜が深けても歸りさうな氣色が無いので、下女が何か用を持つては、時々部屋へ遣つて來る、此のさまを見附かつちやあ、早速苦情の種だと、秘昔がすると、オイ皆んな起きろ〳〵と云つちや、床の下からなぞ蕊繰り出ては、俄かに行儀を整ろつて、急に話を持出しては、何か仔細らしく協議をし始めて、まだ中々終らぬといふ風を見せるのです。下女は我々の樣子を見て、けゝんな顏付きをしちや出て行き居りました。斯うなつたら面の皮の千枚張りで耻もへちやもあつたものぢやない、とう〳〵下女を胡麻化し掩せて仕舞つた腹前は、我々でなくちや他人には出來ない仕事だと感腹した。

▲蕈は七錢で一食夜は三錢で珈琲一杯

（空腹の苦痛と戦ふ）

併し金の少しでもあれば、直ぐ下女に撓らせて、口止めをしますから、うんな氣兼や遠慮も要らんのですが、兎に角劇場に有着くまでが一週間と見積ると、一人前十錢位ゐの手當しか無い。夫れは一週間の部屋料を無い中から七弗（十四圓）といふ大金……其時は我々に取つて非常な大金です。其大金を然かも前金で拂ッたから、殘りは夫れッポッチに成つて仕舞つた。ェ、左樣ですとも、七弗は部屋料ばかりで、素人の家ですから、食事は拵へちや呉れません三度々々外へ喰ひに行くのですが、悲いかな、此三度の飯が喰へないのです。朝も早く起きる、腹が減つて食ひ物が多くなると

いふので、我慢しちや朝寝をして、夫から名々十錢宛持ッて日本でいふと繩暖簾見たやうな、珈琲店へ行く。其處で珈琲と麵麭とハムエックス位ね喰ふと七錢かゝる、十錢投出して三錢の釣を取ッて家に歸へる、夫れッ切りで晝は何にも喰べません。夜になると寒しなにです、其の三錢を握ッて又珈琲店へ飛込む、ヤッと珈琲を一杯を呑んで家へ歸へるのですが、夫りや腹が減るの減ないのッて、實に堪つた物ぢやなかッたです。兎に角此の苦痛と鬪つたのは、我々見たやうな、東洋流の最も不規則な生活をして居たものですから、先づ辛抱が出來たのですが、萬事キチンと規則通りに食事をして居る西洋人なら、一日で直に病氣になッて仕舞ふ。

▲何處の國の乞食坊主！

（てんから相手にせぬ）

二人床の四疊半を、私とお貞の名義で借受けて、借家の主人やボーイには、二人しか居ないやうに見せて、殘る十三人を來訪者に拵へて、其れが皆んな長ッ尻で何時までも話込んで、ボーイの目を盜んぢや板の間に轉寢をして、飯は七錢の料理——否料理では無いパンと珈琲と偶にビフテキかハムエックス位ねを喰ッて、此れで一日の饑を凌いで、寢る時に一椀の珈琲で僅かに空腹を充して居るといふのは、實に乞食にも劣つた情け無い境遇でした。此んな事には誰れがした？、皆んな私一人の罪です。國元に居る親兄弟妻子が聞いたら、自分の倅や自分の亭主を、なぜ乞食にまでしてくれたと、個々に私を怨み私を責めるだらうと思ふと、空腹に呑む一椀の珈琲さへも咽喉に通らんとがありました。兎に角一座の者をして、一日も早く此の苦痛、此の困難を免がれしめて、貴ゆて三度の食事が人並に喰へるやうにして遣りたい、夫れをするには外では無い、一日も早く劇場を借受けて、興行をして、相當の給料を取らせて遣りたい。夫れが又我々の目的であるのですから、朝から晩まで空腹を抱へて、市街我市中を馳回りて、甲の劇場がいかなければ乙の劇場へ行き、乙がいかなければ丙へ住くと云ふ工合に、至る處の座主に逐つて、興行の相談を持込ひと、何處の國の乞食坊主共が、遣つて來たのかと思つたのか、てんから相手にしない。

▲座主との談判

（半分は日本語と身振）

座主との談判にですが？通辯なんて强義なものがあれば、まだ幾分か話も仕好いですが、そんな悠長な事言ッてる暇は有りません、文法が違ふが發音が虛たらうが、當るを幸ひ盲滅法界に破格英語で半分は日本語を交せて、手眞似身振で胡麻化してどし〳〵遣ッ付けたのです。

▲踊ッて見よ唄ッて見よ

（十五人位では駄目）

先づ甲の座主に會ッて、興行の話をすると、此方の芝居は、二年も三年も前から申込んで置かなければ駄目だよ、さう取ッかゝりからオイソレ行くもんぢやないと、見事に放付けられて、乙の座に行くと、

「一体お前達の一座は俳優が何人あります」と聞くから
「十五人です」と答ふると
「お氣の毒樣だが、我々の劇場は、十五人や其處らで踊るやうな小さい舞臺では無い、百名乃至二百名も使ッて、演らせて居る大劇場だ」。
と又一言の下に放付けられた、今度は又丙の座に行くと
「お前さん方は夫れでも俳優かな！俳優なら踊れるだらう、一寸此處で踊ッて見なさい、唄がうたへるなら唄ッて見なさい、試驗をした上で、御相談にもなりませうアハヽヽヽ」
と云ふやうな調子で、我々を冷笑する、愚弄する、實に腹が立ッて癪に障ッて堪らない。

▲我々は日本人なり

（支那人も日本人も同じものだ）

此處でも放付けられて、又次の劇場に行ッて相談をすると、矢張馬鹿にしてかゝる、此奴は支那人だ々々々だと云ふから、否、日本人と威張ッて見たが何の威じも無い、支那人も日本人も同じ者だなアと、劇場の談判は扨置き、悪評冷罵の中に葬られて仕舞ふ。

▲今は隙が無い、今日は留守だ

（横着なる座主の口實）

堂々たる米國市俄高府の劇場の座主ともあるべき者に、支那人も日本人も同じ者と、言はれた時き

わ、實に私しは情無く感じました。幾何本邦では世界の日本だと威張ッて居ても、彼地ではまだ東洋に日本といふ獨立帝國のあるとを、知らないものが多いですな。此の大都會の劇場の座主にして此くの如しとすると、まだ〳〵日本といふ國は世界に知られてゐない。日本人と云ふより、寧ろ支那人と言つた方が、まだしも威張れるのかと、つく〴〵否になつて仕舞ひました。今申したやうな工合に、何處の劇場へ行つても興行の相談は駄目です。中にも横着な座主になると、三遍行つても四遍行つても、今日は留守だから明日でも來い、今は隙が無いから後にしてくれなアと一寸遁れを言つて、なか〳〵逢つてくれませんので、我々の望みは殆んど絶えて、と言つて其儘指をくわへて居る譯に行かんから、此の廣い市中で澤山ある劇場の事だから、何處にか一ッ位ゐは空いて居る處がありさうなものだ、モウ一度探がして見やうと、八方奔走して居る中に、ライリック座といつて此處の座主は幾俠心に富んで居るといふ事を、ぼんやり聞たのです。

▲藤田領事との面會

（零落してもお役人には縋らぬ決心）

是れ又天の與へと喜んで、其座主に逢ひに行かうと思つたのですが、イヤ〳〵突然に行くと、又例の通り放付けられるから、コリヤ誰れか知つてる者の紹介を以ッて行きたいものだと思つて居る處に、幸ひ日本人茶菓組合の寶茶店があるといふとを聞込んだ。ケレドモ幾何捜がしても廣い市の事で何處にあるか頓と分からぬ。日本の領事館に行けば、勿論分かるのですが、零落をしてお役人に

紐がるのは、只恥を掻きに行くやうなもので、此方から相手にしない。如何な場合に遭遇しても、獨立獨行で行かうと、始めから私共は決心を爲て居たのですから、市俄高に着いて、領事館の領字も頭には考へて居ないのです。併し我々の運命は旦夕に迫ッて一座十五名は生死の危急に迫つて居る場合ですから、領事館の厄介にはならぬが、責めて其日本人の賣茶店の在所を知らせて貰ひたい、尋ねに行くだけは何も差支ねはあるまいと思ひましたから、お貞と二人でとう〳〵領事館へ出かけて、藤田領事へ面會を求めました。

▲領事曰く「僕は芝居は大嫌ひだ」

（紹介は眞平御免）

藤田領事は、我々へ逢ふだけは逢つて呉れましたが、苦虫踏潰したやうな顔をして、面會の用向きは何事だ、早く申せといふやうな調子で不愛想千萬。用向きは斯く〳〵云々の次第でムいますから如何うか日本人の賣茶店のある處をお知らせ下さいと願ふと、領事はいよ〳〵不機嫌顔をして、

「僕の迷惑になるからろんな事は願る」

雙頭第一から遣ッつけられた。

「一体是れまで、此地へ來た日本人に碌な者は一人も無い、皆んな不道德、不名譽のありたけを仕盡して、揚句の果は、領事館の厄介、實に言語道斷だ、加之、僕は芝居は大嫌いだ、其んなもの〻紹介は御免を蒙らう」

とッーと坐を立つて仕舞はれた、私共は餘りの權幕に驚いて、只呆然として其處を出て行ッた。

▲ブイリック座の入口に待つと殆ど一日

（座主に會はんとて）

何も紹介を頼んだ譯でも無し、只日本人の居る處を敎へて貰らいたいと言つた計り、夫れに情ない領事の挨拶ですから、我々は殆んど立端を失ッた。モウ斯うなりや天にも地にも座主一人が敵眤い方だ。例の破格英語で直接談判をするより外に、手段は無い、出來なければ夫れまでだ、餓死をするか乞食をするか二ッに一ッだと、大決心を以てブイリック座へ出かけましたのが三日目の朝でした。座主はホットンと云つて、屈指のマヂーヤヤーです。何卒か座主にお目にかゝりたい、日本俳優の一座の者で、興行の御相談にまゐつたと言ふと、取次の者が、今多忙で御目にかゝれませんと斷ッた。夫れではお手透までお待ち申して居りませうと、劇場の入口に立ちながら待つて居ると、容易に遣つて來ない。其中に二時間經ち三時間經ち、正午も過ぎて一時になり二時になッてもホットン先生チッとの姿も見せない、此處が我々の運命を卜し、生死を分くる最後の綱ですから、打たれても叩かれても、座主の顏を見るまでは立去る譯に行かぬ、土に喰付いても此處は退かぬといふ覺悟を極めて、とう〳〵朝から晩まで立づくめに立つて、其入口に待つてゐると、座主ホットンやつとの事で面會に來た。

▲座主曰く「私の娘は日本が大好きです」

（是非劇場を貸して上げたい）

萬死の中に一生を得た思ひをして、應接間に案内をされて、先づ自分は日本優俳で此程一座の者と當市へ興行に參つたものであるが、不幸にして何處の劇場にも斥けられて、進退谷まつて居る。何卒貴下の義俠心を以て、我々一座の生命を助くると思ひ、興行をさせて呉れる譯には行くまいかと、事情を訴へて頼むと

『オ、貴下は日本俳優ですが、私の娘は、日本の事が大層好きで、日本の事に關する歴史や地理や物語りやいろんなものを、平生調べて居ます』、

と意外に歡迎をされたので、此時の嬉しさ喜ばしさと言つたら、今でも骨に銘じて忘れません、ホットンは我々の事情を氣の毒に思ふ上に、最愛の娘が日本好きといふ譯ですから、大に喜んで

『是非劇場をお貸し申さう、明日から直々にとでも申したいが、御覽の如く目下開演中で、次回に約束もあり閉場には當分間もあるとであるが、幸ひ此の日曜日は、夜は慈善會許りで、晝間が決いてゐるから、此日をお貸し申さう』。

▲座主の義俠心

（見物が無ければ娘と二人で見る）

『然るに此興行は、僅か一日にしても、廣告をせねば人の來手が無い、其の廣告料ばかりでも、少くも五百弗は要る、また電氣料舞臺働き等の男女の給料其他の雜費が百七八十弗はかゝる、もなた方も東洋から來て初めての芝居で、假令狂言は面白いにしても、土地の人にお馴染が無いから夫れ程金をかけて廣告をしても、果して觀客が來るか來ぬか保證が出來ない』

『夫れでは觀客が來ない時は如何なさる』

と聞くと

『其の時は私と娘と親子二人で見る、其の覺悟で選つて上げるのだから、相當の給料を取らうなぞゝ思つては大違ひです。併し當地の文學家、美術家、新聞記者、芝居仲間等は夫れ〳〵招待を發する積りです、又廣告をすれば多少見物が來ないとも限らぬから、其觀劇料の上り高を、當日の收入として、百弗なら五十弗、二百弗なら百弗と、あなたの一座と私とで其れを山分けにしませう』

と斯ういふのです、流石に拜金宗の國だけに、上り高を皆んな選らふと言はない。

▲如何にして此四日間の命を繋ぐ

（愈々一文の金も無くなる）

渇する者は飲を選ばずで、一文の金にも有りつきたいと思つて居る矢先ですから、給料が安いの少くないのと言つてる場合ではない。萬事貴下の言はるゝ通りで、此方には少しも異存は無いから、夫ではいよ〳〵此次の日曜日にしやうと約束を極め、呉々もホットンの厚意を謝して家へ歸つて此事を知らせると、一座狂氣の如くなつての大喜び。シカシ喜びはしたものゝ、さて日曜日までには

まだ五日といふ間があつて、毎日七錢がパンと肉、三錢が珈琲で命を繋いで來た、都合十錢の食料は、其前夜まで悉く見事に費ひ切つて仕舞つて、裸体になつて衣服を拂つても、鐚錢一文出て來ない。サア困つた、時計は桑港で宿屋を放逐された時に賣つて仕舞つたから、失れも無い。着てゐる衣服を脱いだ處が、幾何にもならぬ、衣裳屋なぞは飯を食ふ商賣道具だから、賣り飛ばす譯には行かぬ。如何して此の四日間の命を繋ぐ　今日から何を喰つて生きて居る？大の男が十四人も集つて、珈琲一杯呑むべき金が無い、饑饉で食ふ者が無ければ、土でも嚙ぢる丁簡も出るが、麺麭や肉や牛乳や目の前に轉がつて居る、僅か十錢か其處ら出せば、呑喰ひされるのであるのに、其十錢が今日から無くなつたのであるから、喰ひたい飲みたいといふ慾が一層盛かんに起つて來て、夜は寢ても眠られないのです、迚も堪られぬ苦しさ紛れにや、がぶ〳〵水を呑んで、腹一杯膨らしちやごろりと横になる。いくら腹はふくれても夫れが水ですから真晒なお話しだが直に出て仕舞ふので腹に少しも應へが無い。

▲腹が減つては水を呑む

（一座蠱く餓鬼道の幽靈）

今日一日だけは、水を呑んで暮らしたが、開場日までに、まだ後四日もあるので、一日千秋の思ひをして、待つて居ると、其一日が容易に暮れぬ、暮れても夜といふ長い時間の間さへ空腹の苦痛と闘つて居る〳〵ウン〳〵唸つちや又水を呑む、歩〳〵と力が無い上に益々腹が減るといふので、水を呑んでは静に寢てゐる、斯樣な工合に一行十五人が、毎日水許り飲んで露命を繋いで居たとが、丁度全四日間と開場當日の午後まで、殆んど五日間でした。モウ三日四日目頃になると顔の色が蒼白くなつて、肌膚の脂が脱けて、指の骨が高くなる、目が落込む、頬がこける、眼の色がぼんやりして口を利くにも力が無い、皆半死半生になつて居る身体が四疊半の板の間に、算を亂して、顔許り見合はして笑ふ勇氣も無いといふ、一座蠱く餓鬼道の幽靈を見たやうでした。

▲雪中蠢蠕の行列

（市俄高市中の異觀）

昔の文覺や修驗者は山に寢たり、野に寢たり、瀑にうたれて、幾十日か滿願の曉まで、飲まず食はずに居たといふ話は芝居でも能く見ますが、夫れは業をする一ッの手段で、始めから其覺悟でかゝるのだから、慮が減ッて苦しいのは當り前で、意地にもつらいとは言へない。處が我々は大いに飲み大いに喰ッて、充分身体を拵へて、舞臺で活潑に働くのが業ですから、一日飯を喰はぬのは、修業者なぞの百日にも相當する位な苦痛です。夫れに殆んど全五日間といふのだから、其辛さ若しさといふのは、迚もお話しには出來ない。ドタン場に坐つて居るとは言ひながら、私始め一座十五人の者が能く辛抱をしました、能く病人が出來ませんでした、と今日になッて驚いて居る位なです。さて愈々四日目になると、明日が日曜で、ライタック座と約束の興行日です、今日一日さへ凌げば明日の夕方には、多少の給料は取れるから、モウ水を呑むには及ばぬ、麺麭も喰へる、スープも喰

へる、肉も喰へる、珈琲も飲めるから、今日一日の辛棒だが、此辛棒を回復するには、給料を成るべく澤山取って、好味い料理を多く喰うやうに、招待客以外の見物が一人も多く來る工夫を爲ねばならぬ、夫れについては、茲に一ッの新案がある、苦しくもあらうが、一番働いて呉れッ、と皆んなを勵ました。其新案といふのは是れから鎧兜を着て、町々を練歩いて大々的廣告をするのだと申すと、夫れは面白い、遣りませうと一同勇氣を鼓して、今までウン〳〵唸ッて居た大病人共が、立てばひよろ〳〵して部屋の中さへ歩けない痩衰へた身体に、肩で息をしながら鎧を着る、兜を冠る、草鞋を穿く、見る間に一騎當千の武者振と變ッて、天晴勇ましき打扮になったのです、準備はよいかといふので、夫れから一同戸外に勢揃ひをなし廣告旗を押立て、繰出すと、空は晴渡と打曇つて、未明から降り出した、雪は巴萬字の降りしきつて居ます、其の中を物ともせず、螺の貝を吹き立て、陣太鼓を打鳴らし、ドンドーンデー〳〵と、一列に足並を揃へて、市俄高市の大通りを威勢よく練歩くと、其ドン〳〵デーの異樣な音樂に驚いて、市中の老若男女は、我先にと表へ駈出して見る、何とかと思ふと、未だ曾て見た事も無い、不思議な裝をして居る行列が進つて來るので、いよ〳〵驚いて眺めて居ると、廣告旗を見て、さては新聞にも出て居つたヲイリック座の日本芝居の一座であるかと、始めて皆んなが頷いた。之が爲に淋しい雪降りの町も、至る處見物の山を築いて、まだ芝居の始まらぬ前から、意外にも非常な景氣がついて、市俄高市中の大評判になつたのです。

▲舞臺の大立廻り

（絶食の爲めにバタ〳〵倒れる）

ヲイリック座の準備は夫れ〳〵整ふて、いよ〳〵翌五日目の午後一時頃から開場といふことになりましたところが、彼の武者行列の廣告が非常に利いて、木戸の見物がどんどん這入るので、一座は勿論、座主も大喜びです、夫れからまた座主の招待を受けた、文學家、美術家、新聞記者、演劇關係者なども殆んど盡く遣て來て呉れたので、一層張合がつきました。狂言は私の「兒島高德」に貞奴の「道成寺」を見せましたが、「高德」の方には柔術の大立廻りがあるのです、何でも此立廻りを充分激しく勇ましく演つて、見物の目を驚かして遣らうといふ此方の腹ですが、何を申しても、麺麭一片肉一片喰はないのが、丁度此日で五日目ぢやありませんか、ろして今申した通り、皆んなひよろひよろの病人同樣で、加之に、前日鎧兜で練歩いたのですから、立廻りなんて出來ッこはないです。其の上に激しく勇しくといふのですから、凡そ世界に無理と言ッたら、斯んな無理な注文は無い、斯んな無法な注文は無いです。併し何も商賣だ、しかも今二三時間經てば、給料も貰へる、飯も喰へるから、出來るだけの大立廻りを演ッて彼奴等の膽を潰さして遣らう。バッタリ斃れて仕舞つたら、夫れまでの事だと、度胸を据ゑて「高德」の狂言に取掛つた。

▲目が眩んで舞臺に倒れる

（如何にも實地を見るやうだと西洋人の賞賛）

いよ〳〵柔術の立廻りになると、初めの中は皆んな意氣込んで居たから、少しは好かつたのですが果せるかな、段々弱ッて來る、併し西洋人の目には、珍らしいが一杯ですから、如何にも激しく如何にも勇ましい格闘だと思つたのでせう、滿場の拍手喝采は喜舞も搖がん斗りです。此の拍手、此の喝采の中に、ヘコタレて仕舞つちや折角の立廻も夫切りだといふので、皆んなが一生懸命でかゝる、私も一生懸命です、取ッてかゝる奴の胸倉取つて投ぐる、頸筋掴んで引倒す、組伏せる、放ね返へす、上になる、下になる、成るべく激しく、成るべく勇くと演ッて居たが、悲魂腹に應が無いので、やがてすると目が眩んで來て、彼方へひよろ〳〵、此方へひよろ〳〵、組敷かれた奴は其儘跳返へす力が無くッて、動けないのを起してやる、投げられたやつは、バッタリ倒れた切りて、起上がッて來ないから、穴が明いては大變だと、胸倉を取ッて引起す、と言ふやうな始末であッて實に無理無法な遣り方をした、トコロが幸ひ西洋人の目には、此等の欠點が見ねないで、バタリバタリと倒れたのが、却ッて實地の技だと言ッて、非常の好評を博した次第で、思も寄らぬ怪我の功名をした。

○▲貞奴の聖威寺

（是も舞臺に絶息す）

夫れからまたお貞の道成寺ですな、是も傘を持ッてキリ〳〵と舞ふ處になると、矢ッ張り舞臺に絶息して仕舞ッたのです、スルと坊主共が大騒ぎをして寄ッてかゝッて夫れを扶起す、起されてやゝ〳〵生氣に返ッて、辛うして於局まで舞ひ續けたのですか、是も西洋人の目には分からぬから、其苦しいので倒れたのは、斯くすべきものだと思ッて、其倒れ方が如何にも自然だ、なぞと頻りに賞賛をして居たものもあつたようです。然るに是れが錯が無くて、絶食の結果だから情け無い、内幕が知れたら日本のアクトレスも愛想を盡かされて、仕舞つたかも知れない。

▲鯉の糊二分ばかり透く

（是も絶食の結果）

立廻りが濟で「高德」の芝居が幕になッてから、喜舞に這ふやうにして、樂屋に歸ッて見ると、非度いものです、其立廻りの中は、ボタ〳〵流れるやうに汗を掻いたんですから、普通なら身体が暖ッて、汗がしと〳〵するのですけれども、此日に限ッて、いくら汗をかいても、身体が寒ともぬらない、ろして汗の出るのが、まるで水を浴びるやうにいやに冷たくて、寒ッ氣が少しも無いのです。思へば誠に無理は無い初めの中は、大方麩麺と珈琲で、後から水ばかり呑んで居た、其結果です。殊に我れながら、情なく感じたのは、褌を着けた時、いつも小さいと思ふ位ゐキチンと合ッた筋が馬鹿に寛くなッて、眼か二分許り透いて居るのです、吁飯を食はないと、僅かの中に斯くも痩せ細るものかと驚を見て つく〳〵哀れを催した。

▲無一文の鹿に三十弗の敢入

（入し振りに鏡の面を見た）

此日の見物は、滿場立錐の地なしとまでは、行かなかつたのですが、座主から招待を受けた紳士貴婦人達は、日曜日の安息日なるにも係らず、上中の席は盡く一杯でしたが、是れはい〳〵ち澤山來ても一文の收入にもならぬ。切符を買ッて這入ッた者は、所謂立見連が多かつたのですが、兎に角すッかりで六十弗の收入を得たので、ホットンは約束通り、其半額の三十弗を我々に與へました、久し振りに錢の面を見たので、是れで命が助つたと、一同は殆んど蘇生の思ひをして、芝居を打揚げてから、先づ一番に飛込んだのが料理屋です。

▲胃の腑の破る〻程食ッて見たい

（一分間が待遠い）

劇場から出た時は、例の無法な立廻りで、身体がモウへと〳〵になつて起ちも這ひも出來ぬ始末でしたが、是れから飯が喰へるといふのにやつとのと辿まされて、一歩一歩漸く料理屋へ辿りついた逢ふた時に笠を脱げで、ア、喰ひたい〳〵、早く食事に有りつきたいと思ッて、餓鬼道から日着をした連中ですから、今日ころ胃の腑の破る〻位ね、喰つて〳〵喰破つて遣らうといふ意氣込みで、洒落た料理の名は知らないから、日本でお馴染のビフテキやフライなどを山の如く誂へた、斯うなると一分間も待つて居るのが焦つたい、食匙と刀を持つて、今か〳〵と待構へて居るとボーイがやつと運んで來た。

▲胸が一杯になつて喰へない

前後殆んど五日間の絶食といふ揭句であるから、定めし牛飲馬食をしたらうと、お思ひになるでせう、私共もさう思つて居ました、處がさうでないです。たとへば一皿のビフテキが運て來る、夫れを喰はうと思つて、刀を着けると、何だか胸一杯になつて喰へない、胸一杯になつたのは涙です、其涙は悲しい涙であるか、嬉しい涙であるか、何だか分らぬが、我々の是まで萬死に瀕した苦心慘憺と、今が今まで眞黑闇の裡を手間探りに探つて居て、今日漸く成功の微光を認めた其嬉しさなどの感じが、変々胸に集つて一杯になつたのです。胃の腑の破る〻まで食はうと決心をしてかゝつた者が、僅かにビフテキの二片斗り喰ッて、モウ喰へないと云ッて食匙と刀を置つたまゝ、大の男共がはろはろ涙を溢してゐた。

（やつとのことでビフテキの二片れ三片れ）

▲一座の生命を預て萬死に瀕した私

（蘇生の思ひをした皆んなの顏を見た時の嬉しさ）

私の妻を除いて一座十三名——其本國には親兄弟妻子も有る十三名——其十三名の生命を預かつて桑港を出立した私、指して行く先は貿葉も分からぬ不知案内の處を打ッて回ッた私、行く先々に多少の成功を期して居たのが、此の市俄高府に來てからがらりと變はり、する事なす事鶴の嘴と喰違ッて、旅で命と頼む金——其金さへ無くなッて、絶望の極、苦痛の極、生命を預かつた一座を慘憺たる萬死の境遇に陷し入れた私が、死物狂ひの血眼になッて、ライツック座の座主と談判の結

果、漸〳〵一條の活路を得て、一日間の興行を許された私、其の評判不評判が、我々一座再度の生死の境と覺悟して、絶食の爲め目が眩んで舞臺へバタ〳〵倒れるまで、必死に働いた結果が、意外にも大喝采を得て、座主から、三十弗の金を貰つて、是れで生命が助かつたのと、其金を握つて料理屋へ飛込んで、始めて皆なが蘇生の悲ひをして、莞爾した時の顔を見た時の私、其時の喜び其時の嬉しさは、實に筆紙に盡し難く、言語に陳べ難しで、飯を食はふとして思はず私も胸一杯になつたのです。

▲苦痛を共にせし一座の姓名

（是非掲げて頂きたい）

何卒、私夫妻と共に、此の憂き目辛い目を共にして、萬死の境に出入して、失敗と闘ひ、困難と闘ひ、苦痛と闘ひ、絶望と闘ひ、羞辱と闘ふて、遂に之れに打勝つて、多少の成功を得て、今回無事故郷に歸り、イヤ中にはまだ成功の半ばをも見ずして、異郷の鬼となつたものも二人ありますが、此二人と共に、一座の姓名は、永〳〵紀念として是非とも貴紙上に掲げて頂きたいのです。

其姓名は

川上音二郎　貞奴　藤川岩之助　山本雷一
和田卷二郎　野垣清一　津阪幸一郎　高浪定二郎
三上繁　丸山藏人　小山倉吉　駒井梅二郎
高木半二郎　富士田千之助　杵屋君三郎

此の内丸山藏人に、三上繁の兩人が、不幸にしてポストン府で病死をしました。是れについては、實に慘憺たるお話がありますが、後でポストンへ行つた時に詳細しい事を申上げませう。

▲打つて變はる家の待遇

（一弗の祝儀で下へも置かぬ）

兎に角ライツック座の一日興行で、幾何かの金に有付いて、飯も喰ッて勇氣をつけたのですから今までではコッ〳〵寢起をして居た、例の二人床の四疊半に歸ッても、何と無く肩身が廣いやうになッて、モウ意張つたものです。直に其處の主人と女中に一弗宛の祝儀を遣りました。スルト人は現金なもので、今日が今日まで泥棒か乞食にでも宿を貸して居るやうに劒呑がつて、偶に用事を頼んでも、知らん顔をして、物を言ッても碌に返事もせず、始終木で鼻括〳〵ッたやうに、不愛想極まる風をして居た主人や女中は、僅か一弗の御祝儀を貰つた許りで、其晩から、打ッて變つた待遇です。ふ部屋の掃除をしませうかお手洗をお遊ひなさい、お湯が無ければ持ッて參りませう、お買物の御用はムいませんかなンと、愛嬌を振蒔いて、下へも置かぬ扱ひになつた、吁、是れにつけても、萬事黄金世界だ、一も金二も金、金が無ければ、彼地ではいくら紳士と意張ッても、人の尊敬を受けるは、到底駄目だと思ふ例を、今目の前に見たのです。

▲座主ホットヤ川上の寓を叩く

（日本芝居大當り〳〵!!）

翌朝になると彼の愛嬌のある下女――イヤ昨日までは〳〵れッ顔のオタンチンでもつたが、一弗の利目でモウ愛嬌のある下女になつた。其下女がいろ〳〵遊つて來て、座主のホットン樣が、川上さんに一ずか目にかゝりたいといッてお出になりましたといふので、サア大變だ、二人床に十五人！座り先きも無いのに、斯んな犬小屋見たやうな汚ない處に案内をされて堪るものか、此の不体裁を見られた日にや、流石のホットンも腹を腐して、日本俳優は丸で裏町の乞食だと、會はぬ先きから逃げて歸へるかも知らぬ。

「オイ皆んな起ろ〳〵」

と言ッた處が、通す譯には行かぬ、

「困ッたな〳〵、如何しやう〳〵、ア、さうだ姉さん濟みませんが、應接間が明いてるなら貸して下さいませんか、お客樣を此方へ通してちやいけませんよ、チャー〳〵」（決して〳〵）

なんて、トチレてる上に例の破格英語が一層甚しい。下女は委細を呑込んだと見ゐて、エースエース、オーライト〳〵で機嫌能く應接間を貸して、其處へ通して呉れましたので、ヤッと安心をしましたが、此時のトチレ方はお目にかけたいやうでした。

▲ホットンの大恐悦！　大滿足！

（日本芝居大當り〳〵!!）

ホットン先生何の用で早朝から尋ねて來たのかと、聊か不審に思ッて應接間へ行ッて見ると、ホットン先生大恐悦！大滿足！といふ莞爾顔して

「日本芝居大當りです、新聞の評判大相よろしい」

と、小鳥に山の如く抱へて居るのを、テーブルの上にドッかと下ろして見せたのが、市俄高府の諸新聞です。此等の新聞には昨日ライツック座で演つた我々の演劇が、皆んな繪入りになッて、紹介やら批評やら、大々的評判である。ホットンは其諸新聞を、一々私の前に披げて、批評の大要を紹介しました。

▲東洋に着眼する者は宜しく行ッて日本芝居を見るべし

（宮さん〳〵やチョンキナの類に非ず）

嘸れも精細しい評が載つて居ましたが、一々讀まして聞〳〵譯に行かんから、ホットンから其大要を聞きますと、東洋の一孤島たる日本には、優美なる音樂や美術があるやうに、朦朧に耳にはして居たが我々市俄高市民には、まだ一向紹介されて居ない、只僅かに、宮さん〳〵やチョンキナなぞいふ簡單な唄を、日本人の列せるの夜會や其他の席上で、聞いたことがあるのみであるから、日本の音樂は、斯んなものかと殆んど座興の一笑に附して居たが、昨日ライツック座の招待に應じて、日曜日の安息日を過ごすながら行ッて見ると、川上及び貞奴一座の日本演劇の高尚優美なるに、始めて歎美の舌を捲いた云々と、御我から非常に褒めてかゝつて、私の「兒島高德」やお貞の「道成寺」の

細評に及んで、剣の立廻りやお貞が目を睨して絶息したとや、絶妙、無類なぞあらもる最大級の形容詞を連つて褒めたてゝ居る、其結論になつて、兎に角日本演劇は微頭徹尾臺詞の意味は分らぬけれども、其音樂といひ、其技藝といひ、充分の妙趣を味ふことが出來る、思ふに彼等の藝は歐米の梨園界に於て確かに異彩を放てるもので、東洋の音樂東洋の美術に着眼するものは、宜しく行つて彼等の技藝を一見すべし、といふやうな、夢にも豫期して居ない大評判を取つたのです、是れが成田屋か、昔羽屋ならば、さもあるべしと、誰れも信用するでせうが、我々風情ですから、幾何褒められても、日本ではほんとうにして呉れません。

▲ホットヤ曰く「モ一ト芝居打つ氣は無いか？」

（ねらい人氣なので朝飯前に違つて來た）

ホットヤは意よ乘地になつて、新聞の好評が此の通りであるのみならず、昨日見物に來てくれた、文學家、音樂家、美術家、俳優其他同業者仲間の評判も非常なもので、其上に今朝まだ寢て居る中から、八方より電話が懸つて、日本芝居は昨日一日切りですか、今日はモウ有りませんか、是非一度見たいものですが、モウ開演にはなりませんかなぞゝヤヤ大變な人氣です、私は一体朝寢坊の性來で、如何な要事がたて込んで居らうが、午前十時過ぎで無くちや劇場へは出張しない、ところが新聞と電話とでねらい人氣だから、直に寢床から飛起きて來たので、まだ朝飯も喰べない始末です。どうです、此の人氣に乘じて、モ一度演つて見る氣はありませんかと、ホットヤ先生大いに意氣込んで居る。

▲川上曰く「演つて見る氣は大に有り」

（併し收入の山分けなら御免を蒙る）

今迄では此方から一生懸命になつて、泣くやうにして頼んだのですが、今度は反對に向ふから頭を下げて來たから、一方もさう〳〵コダレちや居ない。此處が商賣の駆引きで、向ふの弱點にツケ込む處だと思つたから、輕々に乘らない。私も演つて見る氣は大いに有ります。有りますが、昨日のやうに收入の山分けなら御免を蒙る。と先づ斯ういふ工合に切つて出た。スルトホットヤは

「夫れなら如何いふ御意見です」

と聞くから、

「我々一座を相當の給金で買つて下ださい」

と云つた、

「幾何の給金です？」

「普通のホテルに此の一座が宿泊つて居れば、一週間で、少くも三百弗や其處らは要る。一回興行（一週間）四百弗で買つてくれ」

「四百弗！」

「イヤ四百弗ばかりではいかぬ、四百弗では殆んど喰ふだけに過ぎない。一座十五名は桑港を

出立してから、此處に着くまで、シャツやカフスの一ッ洗濯したとも無い。其外色々小遣ひも要るから、此十五名に對して、一人前二弗宛の手當が欲しい、夫れで御異存が無ければ、一週間働きませう」

ホットンは暫時考へて居たが、

『よろしい、上げませう、給料四百弗と二弗宛の手當を上げませう』

と斯ういふ事になつて、愈々契約を取替はして、夫れから一週間打ちました。人氣の立つて居る矢先ですから、見物がぞん〳〵遣ッて來る。毎日大入り大評判といふので、また一週間演じました、座主ホットンはいよ〳〵恐悦になつて、紐育の同業者へ、此度日本から、コンナ珍らしい俳優が來てゐる、其處で興行をして見たいと思ふなら是非紹介をしやうと、言つて遣ッたから、紐育から直に我々一座を買ひに來ましたが、直に行く譯に參りません、是れからボストン、華盛頓を打つて廻つて、然る後紐育へ行かうと約束をして戻した。市俄高で二週間の興行を濟ましてから、ボサイラスクラッラビット、チフヒル、トレードル、デートン外二ヶ所の田舍廻りを遣つて、孰れも一週間乃至二週間位の興行をして、ボストン府に着いたのが、一昨年の十二月八日

▲ホットン氏は一座の運命の神

（永〳〵感謝して忘られぬ）

我々一座が最も絶望をして、最も困難をした市俄高府は、其の逆境が一轉して、最も希望ある、最も愉快な、成功の道を開いて呉れたのです。此の救世主は、取りも直さずライタック座主のホットン氏で　實に我々一座の運命を暗黒の裡から光明に導いて、今日あるを致させた、神佛と言ッても よいので、其の厚恩は永〳〵感謝して忘るゝ事は出來ないです。夫れからと言ふものは、全くとんとん拍子で、ボストンから華盛頓、々々々から紐育、英國へ渡つて倫敦、佛蘭西へ行つて、巴里……此處で御名殘狂言を打つて日本へ引揚げるまで、至る處に歡迎されて、怪我にも失敗といふとは無かつたのです。實に人の禍福成敗は糾へる繩の如しとでも申しませう！

▲ボストンの興行

（市俄高以上の景氣）

ボストン府には一ヶ月と二十八日間―約二ヶ月ばかり滯在をしました。芝居も市俄高以上の好景氣で、丁度英國からも、彼の名優サー、ヘンリー、アーヰング氏も來て盛に演ッて居りました。私共はアーヰングの一座の一軒置いて隣りの、トレモント座で演りましたが、アーヰングも父子連れで態々見に來て呉れました。貴社の大岡さんも、歐米漫遊中で、其時に紐育に居られましたが、アーヰング前後に見物に來て下さいました。其他日本の紳士達も大分見ねたやうでしたが、狂言は重に「高德」「曾我」「道成寺」と、此三ッを出した。先づ初日を出すと、市俄高以來方々の新聞で、激賞した影響が利て、立錐の地も無迄の大入。

▲小村公使と面會

（川上氣焔を吐く）

此日に小村公使が華盛頓から見物に來られて、大層喜んで

「どうも非常な景氣ぢやな何故公使館へは尋ねて來ない？」

と仰やいますから、斯うお答へをしました、

「私は日本のお役人は信用しません、都合が好い時は、ヤレ何たソレ彼んだと、頼まぬ事まで、御厚情をかけて下さるのですが、悪い時は、アリヤ日本人では無いといふやうな顔をなさる。夫れですから私は此地へまゐつてから、今まで非常な困難をしましたが、一度だつてお役人を尋ねたとは無い、御厄介にならうと思て尋ねたとは無いのです。夫故態と失禮を致しました」

と氣焔を吐いた。

▲公使曰く「實はコッソリ見物に來た」

（思つたとは大違ひ）

スルト小村公使も

「ろりや尤もだ、感心だ、己れも、お前達が、非常に零落をして居るとを聞いたから、氣が氣でならぬ。ドンナ樣子かと大層心配をして、實は今夜コッソリ見物に遣つて來た。處が思つたとは大違いで、大喝采を以て滿場に迎へられて居るので、嬉しくて堪らぬ。早速明日でも公使館に遣つて來い。諸新聞社へも己が紹介をしてやる。久しく夜會も催さないから、お前が來たのを幸ひ、大統領を始め諸大臣や貴女紳士を招待して、充分紹介の勞を取つて遣らう。芝居も如何なものかと案じて居たが、アレなら大意張で見せられる、是非夜會で一番演じて呉れ」

といふ御懇情であつたので、私も鬼に金棒、厚く公使の御好意を謝してお別れをしました。

▲盲腸炎と鉛毒と腦病

（三人前後に倒る）

今までは一行十五人、申上げた通り非常な困難をして、幸ひ一人の病人も出來ず、無事ポストンまで、遣つて來ましたが、人の身体は金鐵では無い。桑港出立以來、種々無理をした因果が、半分は報つて來たのでせう、程無く私は盲腸炎、丸山（藏人）は鉛毒、三上（繁）は腦病、三人前後にバタ〳〵倒れて入院をして仕舞つた。丸山と三上は孰れも一座の立女形です。此三人の中私は幸ひにして助かりましたが、後の二人は百方治療の甲斐も無く、遂に異郷の土と化して了つた。誠に可憐さうな事をしました。此二人の死につきて、悲慘な一條のお話がありますが、全で一篇の悲劇です是れは早晩我々の芝居に仕組んで菩提を吊らふと思つて居ります。

▲波止場の別れが此世の見納め

（言替はせし未來の妻）

三上は神戸相生町の者で、家には五十五六になる母親と、二十歳前後の妻君と、十三四になる弟と三人の家族があります。此妻君といふのは、西京の女で、兼て双方から深く思合つて、夫婦約束を

言替はして居つたのださうですが、愈々亞米利加へ行くことになつて、其娘を母親の許へ始めて連れて行つて、何卒、此度西洋から無事に歸りましたら、其上で兩人を眞正の夫婦にして下さいと、言つて神戸を出立しました。其時此三人が波止場まで送つて來て、泣きの涙で別れたのですが、思へば之れが親兄弟夫婦が此世の見納めであつたのです。

▲生れぬ先の襁褓さだめ

（兒が生るゝとの報知）

三上が病氣になつた直接の原因は、全く酒です。性來非常な酒好きで、彼地へ行つてからは益甚だしかつた、頃しも冬の最中ですから、酒好きの者は尚堪らない、寒いと云つちやウキース・キーを煽り、工合が悪いと云つちやブランを飲む。一日でも酒の氣の絶えたことが無い。其ウキースキー、ブランで以てすつかり、身体を悪くして、とう〳〵腦病に罹つたのです。其病中に、國元の妻君から手紙が來て、兼て妊娠をして居たのが、モウ臨月になつて、子供が産れるといふ報知が來た。元來非常に子供好きの男ですから、夫れを聞いたら、嬉くて〳〵、寢ても起きても居られない。産れぬ先きの襁褓定めで、子供の洋服を製らせる、帽子を買ふ、靴を買ふ、玩具を買ふ、大變な騒ぎです。まだ男か女か分かりもしないのに、とお貞が傍から笑ひますと、乾度男だ、男に違ひないです、と枕元に其の洋服だの帽子だのを飾つて、子供の事を囈言の樣に言つて、夫れ斗り楽んで、國へ歸る時は、子供の土産だけを、一便先きへ送つて置くなぞと、全で半分は狂人のやうでした。

▲生命は所詮覺束なし

（三上の病狀）

此れ程夢中になつて楽んで居る、當人の病狀はどうかと言ふと、一日々々と重くなるばかり。遂に院長も見放して、是れは到底六ケ敷い、助かる見込みは所詮無いと、匙を投げて仕舞つた。吁何卒かして、歸るまで命だけは繋ぎ止めて、今一度故郷に居る母親や細君や弟に顏見せて遣りたい。土産まで買つて楽んで居る子供が、無事に産れた報知があるまで、責めて此世の人にして置きたい。と心の中で神佛に祈つて居りましたが、匙を投げた名醫の一言に違ひは無い。入院をしてから、確か一週間目位ねでした、十二月十一日の夜になると、どつと容樣が變つた。

▲遺言は無いか？

（ガツカリ氣落をした樣）

西山に入る夕日は、清盛の扇で招き返へすことが出來ても、消えかゝつてゐる三上の魂魄は、最早此世のものにすることは出來ない。病人も斯うと知るなら、故郷の親や女房に遺言もあるだらう、私も聞いて歸へらねば家族に對して申譯が立ぬから、お貞と二人で其枕元に行つて、醫者の言つた事を有体に言て

「生死は天命であるから、此場に及んで潔く諦めて仕舞へ、母親さんや細君や弟へ、何か言置きたいとは無いか、」

と申すと、當人も夫れを聞いてガッカリ氣落をした據樣です。ア、惡い事を言ッたと思ッても、女子供では無し、親子兄弟妻子を捨てゝ、新演劇の爲なら討死をしやうといふ大決心を以て、箇々に遣て來て居る位ですから、私も男らしく明けつ放して、醫者の言つた通りを言つて仕舞つたのですスルと三上は、落凹んだ目に一杯の涙を浮べて、ッと私の顔を見つめました。

▲哀心なる三上の臨終

（死にともない——如何しても死にとも無い）

『言ひたい事があるなら、遠慮無く言へ、己れ　　が危る』

と氣を勵ましますと、三上は苦しい息の下から

『新演劇のあらん限りは、私は死んでも、貴下方二人の名は忘れません、何卒、斯道の爲めに充分盡して下さい、私はモウ決心をしました』

と漸くは言ひ放つたものゝ、一念故郷に在る親妻子の事に思ひ至ると腸を切斷るやうな三上の苦痛です。彼れは遂に

『私は死なれない』

と言出した。

『私が死んだら國に居る母や弟はどうします、私が無事に歸るのを、如何なに樂んで待つて居ませう—モウ子供も產れて居る時分で、其の子供の顏も見たい、洋服も着せて、帽子も冠せて、靴も穿かせて見たい、其子供の顏も見ずに、外國の病院で、私は死ぬるのですか？嗚死にとも無い、如何しても死にたくない……、と思つても死ぬるものなら仕方がありません、併し私は今此處で死んでも、諸君が無事歸朝をして、神戸の波止場に上がるときは、私も魂だけは、一緒について上がります……』

▲臨終の淋しき微笑

（最後の握手）

此の時は早瞬々として眠るが如しで、其息は絶ゆ〳〵に、其の言葉は幽かに聞かれるのみです。人の將に死せんとする其言や善しとか申して、此の臨終の遺言を聞く時は實に堪りませんでした。私とお貞は枕邊に、一座の者は其周圍を取卷いて居りましたが、其一言一句は釘を打つやうに胸に應ひて、いくら泣くまいと齒を喰ひ縛ッて居ても淚が溢れるのです。此時私は、彼の世へ行きつゝある三上へ、最後の言葉として、

『モウ夫れで言ひたいとは無いか、母親や女房や弟の事は、決して心配するな、己れが居る間は、貴樣に成替ッて、孝行をして遣る、不自由な目はさせぬ、弟は己が引受けて、學校へも出して遣る、教育もして遣るから、心置き無く成佛しろ、よいか、聞こえたか』

と申すと、其言葉が通じたのか、蒼白い顏に淋しい微笑を漏して、頷いたまゝ、ガックリ息を引取りました。

▲一同白裝束

（物凄き電燈の光）

時刻は丁度十二日の午前二時頃で、病院の中では、看護婦を始め私共に、至るまで、皆一同白裝束です、アークライトの白熱燈が、物凄さまで蒼き光を放ッて、まだ魂魄は其邊りを遶ッて居るかと思はるゝ、三上の死顏を映らしてゐる。交る〳〵最後の握手をして、此世の別をした一同は、手を束かね首をうな垂れて突立つたまゝ、默然として暫時は言葉も無かつたのです。

▲身体中一面の瘤

（丸山モルヒネ注射の痕）

さて丸山の方は如何かと言ふと、是れも最前から人事不省になつて、臨終も刻々に迫つて居る危篤の容体。丸山は長野縣南安曇郡三田村傳藏といふ人の弟で、二十四歳でした。同人の病氣は、此方に居た時から酷い鴉毒で、始終自分でモルヒネを買つちや注射をして居りましたので、手から足から身体中が一面瘤だらけ。エ皆んな注射の痕跡です、私は彼地へ行つてからは一層厳しく小言をいつて、秘密に買つて居るモルヒネを取上げては、捨てたりして居ましたが、夫れでも追付かぬ。私に隠れちや、矢張注射て居る、苦たしいのはホテルのボーイに五弗呉れて一弗のモルヒネを買ひに遣つたといふお話も有る位ですから、亞米利加へ行ッても、日本に居ても、所詮助からない身体でした。同人は、只た一人の兄の外に、親も無ければ女房も無い、ホヽの獨り者で、夫れに性質が三上と違つて、極淡白で、質撲で、無口で氣の勝ッて屬る男でしたから。臨終の時なぞは、女々しい情に引かされるやうなことは、少しも無かつた。

▲彼れが臨終の大氣燄

（勇しく死に方）

是れも三上同樣醫者が匙を投げましたから、人事不省になつて居るのを、氣付け藥りを呑まして貰つて、起しました。

『丸山！貴樣も所詮助からぬと言ふ診斷であるから、遺言があるなら今の中に言つて置け』

といふと、丸山は、何か考へて暫分默つて居りましたが、頷てすると

『僕は何んにも言ふことはありません』

と斯ういふです、

『ウム遺言は何んにも無いか』

と念を押すと、

『只一言あります、何卒諸君は是から先益々成功をして世界一遍の目的を遂して、無事に歸國をして、我々の新演劇を充分改良して貰ひたい。近來日本の新聞を見ると、壯士役者の腐敗は益す甚だしい、間男、欠落、賭博、泥棒なぞ、社會の罪惡は大抵壯士芝居の仲間から出て居る、實に將來新演劇の不名譽と思ふのです、今度歸朝をされたら諸君が卒先して、此等の腐敗を掃蕩して、壯士俳

僕の不名譽を回復して貰ひたい。殊に僕は此地に來てから、芝居仲間の奴等から、日本には音樂があるか、芝居があるか、二言目にはヂャップだ〳〵なぞと、絶えず冷評されて居たのが、實に殘念で堪らぬ、此等の悪罵冷評を撲滅するのも諸君の一大責任です。僕は死ぬのは構はんですが、成功の半途にして此處で死ぬるのは、僕一人死に損ぢやありませんか」

と絶叫をする、實に非常な氣焰でした。

▲天皇陛下萬歳を唱ろッ

（天皇陛下萬歳！）

斯くいふ中にも段々弱ッて來ましたから

「モウ何んにも言ふことは無いか」

と聞くと、

『是れでお仕舞ひ』

と勢ひ好く言放ッて、夫れッ切り黙ッて仕舞つた」

「よろしい、貴樣の言ッたとは確かに承知した、此世の別れに恐多いが天皇陛下の萬歳を唱へろ」

ッといふと早幽かな聲で

「天皇陛下萬歳」

と唱へました。

『今度は新演劇の萬歳をいへ』

といふと、モウ耳も聞えず口も利けませんから、我々一同が楚ッて、

「新演劇萬歳」

と唱へて遣りましたときは、既に此世の人では無かつたのです。

▲ボストン府ホーム山上の墓標

（魂魄今何處にさまよへる！）

三上の死ぬる時は、實に哀れで、可哀相で傍に居たものは、さん〴〵泣かせられましたが、丸山は大氣焰を吐き大演説をして、勇ましい死方をしました。三上の死を情實的とでも申せば、丸山の方は全く武士的であつたのです。二人ともボストンのマウント、ホーム即ちホーム山に葬ッて「南無妙法蓮華經」「故丸山藏人之墓」「故三上繁之墓」と書いた二個の墓標を建て、一同回向をして歸りました。両人の魂魄は今頃何處を彷徨ッて居りますか、墓標は空しく風雨に曝らされて、誰一人香華を手向けて呉れるものもありますまい！

▲墨塗繻子張り金々具付の箱二つ

（マサカ嫁の道具でもあるまい）

死人を棺に入れる前に、湯をつかはせたり頭を剃つたりして、十千萬兩の身代の者でも、經帷子の六道錢、是が冥途のお土産。日本の入棺は誠に手輕なものですが、彼地ではなか〳〵大變なもので

ある。冥途の旅立に身の廻りの準備がケチに遣つても八十弗位ゐは要るのですから、貧乏人などはオイソレと直ぐに旅立が出來ない。冥途へ行くも金次第で、金滿家は後から死んでも別仕立の急行列車で早く行けるといふやうな譯です、三上と丸山が死ぬると、直ぐに葬儀會社――入棺の手數から一切の事は此會社で世話をするから、親兄弟が繩襷をかけて、プル〳〵ものの、死人をあつかふにも及ばぬ……此會社から直ぐに死体を引取りに來て、準備が整ふといふので一同行つて見ると長持位ゐな大きさで、スッカリ墨塗にした箱に、燦然たる金々具の錠前の付いてるのが、二ッ並らんでゐる。大層立派なものだが葬儀會社にマサカ嫁入道具でもあるまい、と思ッて見ると豈圖らんやです、是れが三上と丸山の棺桶だといふのです。

▲棺の中には見も知らぬ美男子と好紳士

（三上でもなければ丸山でも無い）

〜エとばかりに、魂消て居ると、ボーイが遣ッて來て、其金々具の錠前をヒンと開いて、蓋を退けて見せると、棺の中は懷中時計を入れる箱のやうに、一面繻子張りになッて、其奇麗な中へ、孰れも死体が仰向けになッて、胸の處へ掌を組んで、成佛をして居る、其死体を見るとです、是亦豈計らんやで、三上の死体でも無ければ丸山でも無いです。イヤ三上よりも丸山よりも、ズット上の美男子、ズット上の好紳士が、孰れも新調の洋服、しかもフロックコートを着て、新調の靴を穿いて新調のカラー、新調のチックタイを着けて、頭髮は奇麗に刈込んで、カスメで奇麗に分けて、頷も奇麗に剃ッてゐるのです。其の容貌といひ風采といひ、身裝といひ、昨日まで病院で呻吟して居た丸山でも無ければ、また三上でも無い。

▲肌は玉を磨きて日に珊瑚を含む

（死体を見違へるのも無理は無い）

病院に居た丸山と三上は、見る影も無く痩衰へて、頭髮は蓬々と、髭は伸びて、眼が落込んで、頬がコケて、色が蒼白くなつて、垢だらけで、手もつけられぬほどきたなかつたから、我々は一見此のフロックの好紳士、盛裝の美男子に驚かざるを得ない。尙よく〳〵其顏を見ると、鼻の穴から耳の穴まで奇麗に剃つて、落込んで居た眼の肉も上がつて、頬もふつくりして、雪を欺くやうな白い肌が、磨いた玉の如く艶々して、ほんのりと薄紅ゐを帶んで、唇の色はまるで、珊瑚を含んでゐる

▲爪は寶玉を磨ける如し

（平生から汚ない手をもあつた）

奇麗なのは顏ばかりでは無い、御當人達は平生から余り清潔の方ではなかつたので、爪などは垢が一杯溜つて居た。其爪を見ると、垢を取つてある處では無い、爪の肉際のトゥまで丸く奇麗に取つて、其色はルービーの如き美くしい光澤を放つて居る。我々が西洋に行つたのも此度が初めて、西洋で朋遠を亡くして、親し〳〵其葬式をしたのも初めてゝ、其死骸は如何して埋めるのか、手續きなどは不知案内の我々ですから、墨塗り繻子張り金々具付の棺桶から膽を潰して、此死体の奇麗なの

を見て呑驚りして、死んだ當人では無いと不審を打つたのも、實に無理は無いです。

貞奴の物語

▲冥途へ舞入り仕度

（あつちゝや死人に化粧をするんです）

貞奴は傍より、此盛裝せる三上、丸山の死体につきて説明せり、

『ほんとうにね、妾もまるで見違へて仕舞ひたんですよ。西洋ぢやね、死んだ者は皆んなろうんな風にお化粧をするんですよ。頬紅をつける、白粉をつける、口紅をつける、顔を剃る、爪の掃除までしますし、そして洋服から靴からシャツから、カラーから、チックタイから、カフスから、何から何まで、そつくり取替へて仕舞ふんです。まるで冥途へお舞入りでもするやうに、お洒落をするんですよ。

▲海綿細工の死人

（ふだんから肥つてゐるやう）

夫れから兩人ともコンナに痩せこけてゐたのが、むつくり肥つてるでせう！夫れだから一層見違へたんですよ。どうも不思議だと思つて、よく〳〵見ますと、妙なことをしますんですね、口の中に海綿を詰めてあるんですよ。其海綿のために頬や眼の肉などが、好い工合に持上つて、まるで平生から肥つてる人のやうに見ゆるのです、西洋ぢや爪の掃除が大變なんですよ。其掃除といふのがね、肉際の周圍ですね……ホラ斯んなにトウがたつて堅くなつてませう、此のトウを奇麗に切つて、垢は元より取つて、スッカリ磨きをかけて、そして爪紅を塗けて又磨くんですよ。夫れだから三上や丸山なぞのは、あんなに奇麗になつたんです。此爪の掃除ばかりで、幾弗とか幾フランといふのですから、日本人の目から見るとホントに馬鹿氣てゐますわ。

▲紳士の爪紅と口紅

（日本では色狂人です）

エ、爪紅は平生男でも塗けますとも……彼地ぢや紳士とも言はるゝものは、皆お化粧をするんですもの……爪紅も塗ければ、口紅も塗けるんです。日本で男が其んなことをしたら、色狂人とでも言ひますまいが、彼地ぢや、人に對して無禮だといふので、外へ出る時きあ、お洒落のありッたけを仕て行くんです。夫れで無ければ、レヂーだとか、ゼントルマンとか言はれないのですから……今までではさうも思はれなかつたんですが、今度歸つて見ると、汚ないナッをして意張つてるのは日本人ばかりですよ。

▲死して始めて紳士となる

（着たい〳〵と言つたフロックコート）

川上は又語を次いで、

「其のフロックに就いて可笑しい話があるのです、桑港以來、一同困難の揭句ですから、洋服は着のみ着のまゝの汚ない容貌で、晴れの場所へは着て行かれない。如何か早くフロックだけは新調へたいものだと思ッて居ても、また新調へるだけの餘裕が無い。其の中に病氣になッて、兩人が死ぬる、死体を引取られる、行ッて見ると、我々が寐言のやうに着たい〳〵と、言ッて着られ無かつたフロック、しかも新調のフロックを着て、お化粧までもして立派な紳士になッて居ますから後で笑つたとでした、兩人は仕合せなことをした、死んだために漸う〳〵フロックを着て紳士になることが出來たッて……。

▲人氣を落さば再び元の麭麵と珈琲！

（病氣の爲に休まれぬ）

私が盲腸炎に罹つて入院したのも、三上丸山の兩人と殆んど同時でした。イヤ煩ひかゝつて居たのはズット其前からです、丁度ボストンの醫學大學校に、杉本と云ふ人が入學をして居られましたので、其人の御厄介になッて、大學の博士達にも診察をして貰ひましたが、經過が甚だ面白くない、今の中に入院をして、ミッシリ療治をしないと、或は一命にも關はるといふ診斷でしたけれども、我々の越方を思ふと、生きるか死るかの目に逢つて、市俄高でヤット成功の端緒に取付いて、ボストンまで遣つて來て加之、景氣の付いた矢先ですから、如何しても斯うしても休む譯には行かん。休んで人氣を落した日にや夫れつ切り、また元の厭阿彌で、麭麵と珈琲！ですから、苦しくて堪らないのを無理押しに出勤をして居ると、或時は鴉を錐で揉むやうに痛むので、堪らなくなつて舞臺に倒れたともありました、斯ういふ無理をして居たから病氣の惡くなるのは當り前です。

▲俳優は舞臺にて死ずべき者に非ず

（是非入院をせよ）

段々惡くなッて杉本さんから、大學の意見だといふのを聞くと、川上は今から二十四時間を經過すると腹部を切開せんければ、療治は出來ぬといふことです。私は夫でも聞かない。俳優が舞臺で死ぬるのは、武士が戰場で討死をするのと同じことだと、痩我慢を張て居ました。スルト御社の大岡樣が見に來て下さつた日――病氣の最も惡い日でした。芝居が閉場てから、お貞が御宿へ御挨拶に上がると、丁度杉本醫師も來て居られたさうですが、大岡さんより懇々の御忠告で、武士が戰場で討死をするのは當り前だが、舞臺で俳優が死るのは名譽でもなんでも無い、俳優は舞臺で踊るのが商買だ、討死をするなんてソンナ不文明なことは無い、是非入院して切開をしろッて、私が吳々も言ッたといつて、お前からも入院を勸めるやうにと、斯ういふ御傳言でムいましたから、私も斷然其の御忠告に隨つて、遂に翌日入院をしますと、直に麻睡劑をかけて腹部を切開されたのです。私だけ幸にして一命を助かつたのは、全く貴社の大岡先生の御忠告の御蔭と常に感謝して居ります。

▲ボストンの慈惠病院

（看護婦の行屆き居ると）

少しお門違ひの御話ですが、私が入院をして、實に感心をしましたのは、病院の整頓して居る事は勿論ですが、第一看護婦の行屆いて居る事ですな。病院ですか、病院はボストンの慈惠病院です、入院料は一週間目毎に勘定を持つて來ますが、拂つても拂はんでもよいのです、金が有る者は拂ふ、無ければ勘定書を握潰して居ても、何とも言はない。元より慈惠といふが目的であるから、其邊は病人の都合に任かせて置くのでせう。斯ういふ病院だから、看護婦なぞも、普通の病院と違つて、給料や手當も充分でありますまい、また病人から手當を貰ふとも殆んど無いです。有つても實に僅少なものでせう。詰り看護婦は病人に對して恩も着ず仇も無く、全く義理一遍で働くのです。亞米利加！しかも世界で最も拜金宗の門徒とでも言ふべき亞米利加で……御厩儀が出ないと、ボーイでもメードでも石臼のやうに尻の重い亞米利加で、厄介極る病人に對して、嘘にも義理で働くといふとが出來ませうか。處が此の病院の看護婦が我々に對する看病の方法の、親切なと、叮嚀なと注意周到なとは實に驚くべきものです。辯い處に手の屆くやうだと申しますが、手の屆く處では無い、痒く無い處までも氣を利かして掻いて呉れる。

▲ボストンに於ける同胞の恩人

（骨董店主松木文恭氏）

右のやうに、私共が病氣に罹つて、入院をした時、我々の爲めに非常に手厚い世話をして呉れたんで、今日に至るまでも恩人として忘るゝ事の出來ないのは、松木文恭氏、一人です。此人は數年前亞米利加に來て、ボストン市の中央に、日本の骨董店を開いて、亞米利加人の番頭や下婢を、大勢追ひ使つて、非常に盛大に遊つて居りますが、日本人が獨力を以て、外國で商賣をして、斯くまで成功を遂げた人は、實に少ないと思ふです。日本人で外國に行つてるものは、其同胞に對して、卑むべき一種の猜疑心を抱くのが常であつて、成功するものは、之れを陥入れんと計り、失敗するものは、越人の秦人の肥瘠を見るといふ譬へよりも、また冷やかな心を以てするのが、滔々として風を爲して居るですが、此松木文恭といふ人は、其の腐敗してゐる中に立つて、幾俠に富み慈善に厚く且つ正義を守つて居る、一箇[illegible]德の君子と賞贊するに躊躇しない。我が田に水を引く譯では無いですが、三上、丸山が死んだ時なぞは、死体引取りの手數から、葬式の事から何から何まで、自分で費用を拋つて、我々の爲めに出來るだけの盡力をして呉れました。此人の知己を得なかつたなら、我々はまだ一層の悲劇を演じたかも知れないです。

▲看護婦の熱線と機敏と忠實

（病人から給金を貰て居るやう）

私は切開をしたのですから、無闇と身体を動かすとが出來ない、又動くのを禁ぜられて居る。横になると當分なつた切ですから、腰や肩や頸の骨が折るゝやうに痛い、堪らないから、余り再々看護婦を使ふのも面倒だ、氣の毒だと思つて、一人で寝返りをしやうとすると、機敏なものです、病人の一擧一動に、始終注意を怠らずに居るのだから、直に三四人の看護婦が遣つて來て前と後からッ

ーッと敷布を持上げて、其間に他の敷布を敷いて、夢のやうに浮波ッと下へ落す、落されると自分は何時か寝返をして居る、其寝返りの仕合工合が實に心持が好い、身体中切開をして居ても、少しも痛みを感じないだらうと思ふ位ね、其遣り方の巧みなこと、丸で手品ですな。

▲親兄妹に取巻かれて居るやう

（見ず知らずの外國に來て）

是れは看護婦の技術の熟練を褒むるに過ぎないですが、斯ういふ風に看護をして呉れる彼等がです毫しも忌な顔をせず、面倒だとも思はず、病人から數百弗の給金でも貰ッて居るかの如く、忠實に立働いて呉れるのですから、見ず知らずの外國に來て親兄妹に取巻かれて居るやうな心持がしました。彼等の忠實と機敏は用のある時許りで無い、夜中に私が一寸眩でもすると、直ぐ遣ッて來て

『お呼びになりましたか』とか『如何かなさいましたか』

とか、言葉やさしく物靜かに尋ねる、歩くにも足音が仕ない、話すのも極靜かで、笑ひ聲などついぞ聞いたことがない、實に靜肅で嚴格で規律正しい者で、これを日本の看護婦に比すると如何です、我邦の病院などからは、看護婦見習ひのため、此處の病院へ奉公でもさせたいやうに思ひました。

▲名優アーヴィングの知己を得

（紀念の寫眞と紹介狀を貰ふ）

英國の名優サー、ヘンリー、アンヴィングの一座はボストンで我々が演ッて居た、トレーモント座から、五六間しきや離れて居ませんでした。アーヴィングですか？六十七八にもなりませう、髪は眞白で鼻の高い、眷もスラリと高い痩形の老人です。髭はありません。我々の芝居へも再々觀に來て、大相贔負にして呉れました、手紙も貰ひますし、寫眞も紀念のために態々呉れましたが、宿屋で床の間へ飾ッて置いたら、何時か人に盗まれて仕舞ひました。倫敦へ行つたのも、此人の勸めで

『私が紹介狀をあげますから、是非倫敦へお出でなさい』

と自分で書いて呉れたのです、彼地へ行ッて好結果を得たのも、詰り此人のお蔭です。出し抜けに行ッた日にや、夫れこそ市俄高の二の舞ひを演つたかも知れません。

▲日本の老俳優宜く愧死すべし

（アーヴィングの勇氣と勸勉）

アーヴィングは、毎年亞米利加へ遣て來て、ボストン、華盛頓、市俄高、紐育、桑港至る處の都會を打つて廻るのみならずです、山の手にも行けば場末にも行く、加之ドシ〳〵田舍廻りを遣つてシコタマ金を儲けちや、故郷の英國に持つて歸る。世界第一の名優だから安くは賣らないなぞと言つて、意張つちや居ない、何處へでも稼ぎに行つて、七十近い老人が、舞臺の上でヒシ〳〵働いて居る、其勇氣と勉勸のほどは、實に感心ぢやありませんか。日本の舊俳優は、年を取つて名優とかなんとか言はるゝやうになると、學問も無い癖に、意張るとばかり知つて、東京に居据りの、休業になると別莊に引籠りの楽隱居で、働くとは知ないで、欲の深い一方です。斯如ちな老朽俳優は、ア

ーヴキングに對して宜しく愧死すべしと云たい。

▲川上アーヴキングの向ふを張る

（大膽不敵な譯です）

アーヴキングの相棒になつて働いて居のはエレンテリーといふ女優で、比較にやなりませんが、日本でなら九女八です。此の兩人が始終取つ組んで遣つて居ますが、『ロベスピーヤ』と『人肉質入裁判』なぞが、最も得意ださうです。私共も一夜觀に行ましたが『質入裁判』の方は、以前から筋も知て居ますから、其仕草やコナシで以て、臺詞の意味も大概理解が出來ました。アーヴキングの高利貸（シヤイロック）にエレンテリーの辯護人（ポーシヤ）です。日本芝居の演り方とは、無論變つて居りますが、臺詞廻はしと云ひ、身振と云ひ、仕草といひ、分からぬ我々さへも只感に打たれて歸りました。歸つてからつく〳〵考へると、我々の狂言も『高德』や『道成寺』なぞの一點張りでは、鼻についてをかしく無い。何か變つた新狂言……と云つても外に無いから、コリヤ一番アーヴキングの向を張つて遣らう、私のアーヴキングお貞のエレンテリーで、『人肉質置裁判』を遣つて見やうといふ考が浮んだ。元より言葉が出來ないから原作は演られない、言葉が出來て原作通りに演つた處が、向ふは世界第一の名優だから、足も取れる氣遣ひは無い。其處で此の狂言をスッカリ日本の事に直して、日本のシヤイロック（高利貸）と日本のポーシヤ（辯護人）を見せて落ちを取つて遣らうと、斯う考へたのです。大膽不敵な譯です。

▲早いが人氣

（臺詞なぞはどつでも好い）

慇懃々々してゐると向ふの芝居も閉場て仕舞ふから、直ぐ明日から看板を揭げやうといふ騒ぎ。迚も稽古抔して居る際は無いのですのみならず、まだ肝腎な狂言も出來てゐ無い。早いが人氣だから臺詞なぞは如何でもよい、只筋だけ拵へろと、ヤツサモツサで拵へたんです、其處で私の高利貸シヤイロックをかりに北海道の漁師にして、お貞のポーシヤは何處か金持の娘にして、裁判の處に和田（卷次郎）の僧が立合ふ事にしました。ヤア役割が少し變つて、日本的になるばかりで大体は原作と違ひはありません。元より裁判の所だけです。其處を中心にして前後に二幕か三幕ばかりクッ附けました。

▲『妾は何といや好いんですよ！』

（ブ・チヲカポコ〳〵とでも言つて置け）

狂言の筋は大略立つて、愈々今日から演るといふことになつたのですが、其間際になるまで臺詞なぞはチット！モ出來てゐない、皆んな困つて居ます。肝腎なお貞のエレテンリー女優先生も、呆氣に取られて、『妾は何と言や好いんですよ』と幕明前になつてトチレて居る、『何とでも好いやな、如何せ見物にや分らないから』、絶句をしたときあ、スチヤラカポコ〳〵でも何でも好い、只身振や臺詞にウンと力を入れて、如何にも熱心に見せてさいゐりや、金玉の名句を吐いてると思ふ、夫れで澤山

だ」と舞臺へ引摺り出した、他のやつ等も皆な斯ういふ調子で出たのですから、實に亂暴極る芝居でしたが、土臺がある上に一夜作りにしちや、割合に好く出來たので、意外の大喝采、翌日の新聞の評を見ると、日本人は器用に巧妙だといふことを兼て聞いて居たが、彼等の芝居を見て、其欲提なるに益々驚いた、殊にシェークスピヤの劇は少くも一年位ゐは稽古をしてから演るのが通例であるのに、僅か一日の準備で、斯くも巧みに出來るものかと、坐ろに舌を捲いた、本子と褒め立て入賞てゐつたのは意外千萬。

▲アーヴキングよりは細かいと沙好評

（川上以て冥すべしです）

就中喝采を博したのは、シヤイロックが一斤の人肉、三寸四方の人肉を切取らうといふ所でした、此處はアーヴキングの演方を見てゐると、慘切庖丁見たやうなもので、相手のアントニオーに、ダ〻突立て〻切らうとするのみですから、私は一ッ新工夫をした。我々のシヤイロックは漁師ですから矢立を持ッて居ます、イザとなると其矢立から筆を取出して、相手の奴の身体に三寸四方チヤンと圖を引く、夫れから出刄庖丁で、圖を引いた處だけ取切らうとするのです。此處が大いに見物の御意に叶ッて、アーヴキングよりは行方が細かい、三寸四方とあるから、圖を引くのは、左もあるべきことだ、實に名題向だ、新意匠だと　喝采を博して、新聞にも其通り褒めてあッた。樂國の外遊觀せられて居る日本の壯士俳優川上風情の者が、外國へ行ッて、世界の名優アーヴキングの向を喪ッて、怪我にも、アーヴキング以上だといふ好評を受たのは、以て冥すべしぢやありませんか……と同々一笑す。

▲日本は仁義道德の國

（シヤイロックの如き人物は居らぬ）

此のアーヴキングの芝居を演る事に就いて、ポストンの新聞で私は大いに氣炮を吐いてやりました。我日本帝國は、仁義道德を重ずるの國民ばかりであるから、高利貸シヤイロックのやうな殘虐非道な奴——金を貸して其代りに、人間の肉を取らうなどいふ冷酷不法な奴は、何處を探しても居ないのみならず、殆んど我々日本人の夢にも想ひ到らぬ人物である。元よりシヤイロックは西洋の穢多で、歐米人の齒觀するを敢づる劣等下賤の族であるから、斯の如き殘虐非道を行はうとするのは、當り前だ、今更決して怪しむに足りないと、實ふかも知らぬが、穢多は西洋ばかりでは無い日本にも居る、日本の社會でも昔は人間並みの待遇を受けて居なかつた、道で逢ッても汚がらはしく思ふ程に擯斥をされてゐたけれども、古往今來、芝居にでも小說にでもシヤイロックの如き殘酷な人物は一人も描されて居ない、描されて居ないのは、畢竟日本に斯る殘虐の者が居ないからである。故に我々が此シヤイロックを演ずるのは、殆んど別世界の人物を演ずるやうな感があるので、如何なる人物にしやうかと、種々考へた末、我が北海道は、無智文盲の土人も殘つて居るし、未だ比較的未開野蠻の僻地が多い、假りに此處の漁師としたら、幾分か適り易いだらうといふので、此

漁師をシヤイロックにしたのであるが、我々日本人の目から見ると、殆んど日本人の性格を没して居るとしか思はれない。と斯う書かせたのです、スルと其新聞を見た奴等が、彼れは猶太人の邪教徒で、歐米の人種では無いから、是れを以て我々を攻撃するのは、餘り酷では無いかと、辯護をして居た者もありました。

▲華盛頓日本公使館の夜會

（小村公使の招待）

小村公使が、我々一座の事を心配して、歓行をしてボストン府へ來られた時、滿場に歓迎されて居る、意外の景氣にヤット安心をされて、近々日本公使館で夜會を催すから一座を引連れて是非來いといふ御話しであつたのですから、其中に日取が極つて華盛頓の日本公使館へまゐりました。

▲空前の盛會

（大統領各大臣皆來る）

日本の公使館は頗る狹まいから、大勢の賓客を一時に招ばれないといふので、夜會は二夕曉に渡りました。公使からは當時の大統領マッキンレイ氏を始め各大臣、各高等官、文學家、美術家、各大學校長、教授、新聞記者、其他知名の貴女紳士等へ夫れ〳〵紹介狀が出ると、日本公使館の夜會は久し振の催しであるのと、兼てボストンの新聞で評判をされて居た、我々日本俳優の演藝があるといふので、招待を受けた賓客は、大統領から各大臣から殆んど盡く出會をされて、日本公使館設立以來の盛會であつたのです。

▲臨席の榮を得た我々の恐悦

（元は毛虫のやうに忌がられてゐた）

日本の領事や居留民から、毛虫のやうに忌がられて、悪評冷罵を受けて居た我々が、國らずも堂々たる日本公使の招待を受けて、言はゝ米國の天皇陛下とも云べきマッキンレイ氏や國務大臣からの臨席の榮を得て、其の前で日本演劇を代表して……代表して居るやうな我々が、芝居を演ずるといふのですから、假令其技量は拙くとも、以て大いに誇るに足ると、心窃かに、我々新演劇の萬歳を祝しました、狂言ですか？『高徳』『曾我』『道成寺』と、此の三つを出しました。

▲前の名優プースを觀るの思あり

（新聞評の見當違ひ）

我々が『曾我討入』や『道成寺』を演つて西洋人の喝采を博したと言つて、日本へ歸つて意張つた處が仕方が無い。日本には成田屋あり音羽屋あり、川上何者ぞと、一言の下にケナされて了ふ。我々も元より其及ざるを知つてゐるから、イクラ彼地の新聞で褒められても、日本人が褒めるのと同樣には思つてゐないから、手前味噌は並べません。タヽ西洋人の目に我々の演じたことが如何に映じ如何に解釋されたかといふことをお話いたすのが面白い。『曾我討入』を演つたとき、役割は私の五郎、藤

川の十郎、津坂の工藤、お貞の虎、高木の少將でしたが、五郎の私が兄の十郎と工藤の寢室に忍入り、敵の首を討って、私が血刀を提げて階子を下りる處がある。其時に私は刀を三遍振って下りてろうして暫時息を吐いたのです。三遍振ったのは半分は無意識の裡に遣ったのですが、元より刀の血を落す積りです、何の意匠も何の趣向も無かった。處が明くる日の新聞を見ると、此處の仕打を馬鹿に褒め立てゝ書いてある、何と褒めてあるかといふと　五郎が敵の首を討って寢室を出る時は如法闇夜である。其闇夜に階子を下りる時、一、二、三と三遍刀を振って、一振り毎に階子を數へて下りたのは、如何にも注意周到な仕打ではないか、ソシテ息を吐く處なども、多年の目的として居る敵討の一大事を遂げた後の安心と疲勞の体が、さもあるべく見えた、我國の大名優前のプースは、最も注意周到な藝を以て喝采を博したが、川上の藝の細かい處はプースを見るやうな感がある と、激賞をしてゐるのです、實に滑稽ぢやありませんか。

▲日本腹切りの式を見せよ

（曾我兄弟切腹を命ぜらる）

此の夜會で、滿堂の賓客から、是非日本の腹切の式を見せて貰ひたいといふ、前からの注文ですから、此の『曾我』の狂言にくつ着けて、對面と討入を演つて、曾我兄弟で切腹を見せる事にしました愈々切腹仰付られるといふことになつて、母滿江、虎、少將など、別れの愁歎があつて、檢視の役人が來る、三つの太鼓を合圖に愈々切腹の準備、曾我兄弟は白無垢、三寶に腹切刀、之れを白紙に卷いて腹に突立て、一文字に引廻はすまで、スッカリ故事通りに演つて、介錯の役人が刀を振上ゲる處で幕にしましたが、是れも西洋人の目には珍らしかった。

▲目の凹みたる少將

（妙な處で落を取る）

少將を演った高木半次郎といふのは、淺草辨天山の壁屋ですが、ポストンで女形が二人亡くなったので、『如何でも拵まはんからお前演れ』と云って、高木を引出した、處が此の男お貞の虎よりも大層評判が好いのです、如何いふ譯かと聞くと、此男は眷が高くて、目が凹んで居るから、西洋婦人ろつくりだといふのです、彼地の女は目が引込んで居なくちやいけないさうです、妙な處で落を取つたものです。

▲小村公使思はず噴飯

（レヂーが言てゐる謹聽すべし）

此の時また可笑しかつたのは、高木の少將の臺詞廻はしです、少しは器用に出來るだらうと思って居ますと、些とも女になってゐない、丸で五郎に議論でも吹きかけてゐるやうな調子ですから、小村公使は堪らなくなってとう〳〵噴飯して了った。けれども、滿場の西洋人……女尊男卑の亞米利加人は、高木の男といふことを知らないから『貴嬢が言って居る、謹聽すべし』と一層靜粛に威儀を繕って見てゐましたが、コレモ滑稽の一つでした。

▲一も貞奴二も貞奴

（我々は顔色無かつた）

お貞の道成寺は、市俄高以來不思議に大當りを取つて、一も貞奴二も貞奴で、彼地に行つちや我々は殆んど顔色も無かつたですが、日本に歸へりや、男尊女卑だから、モウ大意張りです。（貞奴は傍にあつて只微笑し居るのみ）。夜會の道成寺の時は、華盛頓は勿論、ボストン、紐育からも新聞記者が大勢遣つて來ました。

▲貞奴の道成寺とヘラルド新聞記者

（電話の劇評に驚を潰す）

紐育ヘラルド記者――其ヘラルド記者は左の小脇に絲のついた電話のパイプを挾んで、一生懸命に見て居ましたが、お貞の一擧一動毎に、今斯んな振をした、彼んな仕打を演つた、夫れから扇を持つて見ねをした、次に傘を持つて舞つた、前を向いた、ヤレ滑つたソレ轉んだ、と云つちや一々電話のパイプに驚評をしてゐる。スルト百里餘りの紐育ヘラルドの編輯局ぢや、其電話を聞きつゝ、驚評を書取ッてゐる。明くる日の新聞を見ると、電話で言つた通りの驚評がスラカリ載つてゐるのです。彼地へ行つた人は、別段驚くほどの事もありますまいが、我々は其通信術の完全と敏速なのを、目前に見て驚を潰して仕舞つた。

▲國務卿ヘイ氏川上の意志を叩く

（コイツ困ッた事を聞かれた）

芝居が濟んでから、大統領マッキンレイ氏小村公使を始め各大臣、貴女紳士達が、今宵を晴と盛裝して、千日月が、一度に照輝いて居るやうな、電燈の下に、各宴席に就いて、我々も其席末に列したのです、スルト大統領の傍に居た國務卿ヘイ氏は私に向ッて、「貴下は亞米利加の劇はお好きですか、また其劇に對して御意見があるなら、御高說を承ひたいものです」と斯う切ッて出られた。コイツ困ッた事を聞かれた、御高說なんて、元より有う筈は無いけれど、向ふは堂々たる國務大臣此方は日本俳優として招待されてゐるのだから、意見を聞かれて、ナンにもありませんと、指を咥へて引退がつてる譯には行かん。此處宜しく亞米利加劇に對する自分の所感を開陳すべしだと、大いに意氣込んで席を立ちました。通辯は小村公使に頼んだのです。

▲小村公使川上の通辯となる

（亂暴なことを言ッては困るよ）

私は國務卿ヘイ氏に向ッて、閣口一番、斯う答へをした、國務卿ヘイ閣下には、只今私に向ッて、亞米利加劇に對する卑見があらば、聞きたいといふ御下問でムいましたが、閣下には普通一般の挨拶を好まるゝか、夫れとも私しの卑見を有のまゝ腹藏無く言へと仰しやるのか」と反問をするとヘイ氏は大相喜んで「貴下が感じたまゝの事を、有体に謹聽したい」といふ挨拶です、「然らば所感のまゝを陳べませう」といふと、小村公使が傍際から心配をされて、餘り亂暴なことを言つちや

困るよ。大丈夫か」と念を押される「エ、大丈夫です。亂暴なとは申しませんが、私の言ふことを、好い加減に遣つて下すつちやいけませんよ」と言ふと、小村公使は「よろしい〳〵」

▲大統領の前で川上の演說

（米國の芝居は猥褻なことが多い）

御覽の如き壯士俳優で、演劇に就いて批評眼とか審美眼とかいふ六ケ敷い眼は持たぬから、國務卿へイ氏の問に對して、私は所感のまゝを斯う答へたのです。私が今度始めて貴國へ來て、各處の劇場を見ると、其規模といひ構造といひ、先づ外觀の壯麗なのに驚き、中に這入ると內部の裝飾から大道具小道具の遺憾なく完備して居るに驚き、電氣を以て舞臺の光景を、千變萬化せしむる、巧妙な作用に驚き、舞臺の廣大なのに驚き、其廣大な舞臺に現はるゝ俳優の數の、最も多い時は百四五十人もあるに驚き、見る物聞く物、一として我々日本人が驚愕の種とならぬ物は殆んど無い、シカシ其中で要領を得ないのは、餘り大勢の俳優が舞臺に出過ぎることである。見てゐると、其中で主になつて藝を演じて居るのは、僅かに二三人に過ぎない、此二三人を除く外は、何の爲に登場をして居るのか、サッパリ分からぬことが多い、是れは我々の目から見ると舞臺を只賑やかにして、却て喧噪を來たし同時に技藝の趣味を大に殺減するの感がある、次に狂言の筋を見ると、猥褻に近いものが過半で、五幕の中四幕までは、男女相擁して接吻をする類ゐの幕切が多い、元より男女の接吻といふことは、貴國や歐羅巴では、古來の風俗であるから、別段怪しみもしないが、我々日本人の目から見るといかにも、不思議の感が起る。我々の演劇は、國の爲めに忠を盡し、君の爲めに苦痛を立て、孝の爲めに一命を果し、義の爲めに一身を獻ずるといふやうな、悲壯なものが重せられてゐるが、貴國の劇は、一も女の爲め二も女の爲め、如何にせば男は女の歡心を得、如何にせば女の愛情を買ふことが出來るかといふ研究の材料を與へ、又其疑問を解釋して與れるやうな感じが、何と無く浮んで來る。我々は只心外に堪ゑぬ……と斯う言ッたやうな挨拶をしてお茶を濁して仕舞つた。

▲國務卿へイ氏が川上への答辯

（川上君の演說は大きに御尤）

此出鱈目の演舌に對して、皆んな何と感じたか知らぬが、大統領、國務卿などは大相喜んで居た樣でした。スルト國務卿は、再席を起つて、斯ういふ意味の演說をした。亞米利加では、當時喜劇のみが最流行して、悲劇は頓と廢れて仕舞つたが、是れはエドキン、ブース。ローレンス、バレットの兩名優が死んだ以來である。此兩名優は悲劇を以て亞米利加に雷名を轟かしたのであるが其死後といふものは、兩優の衣鉢を繼ぐやうな、悲劇俳優が無い爲めに、いつしか衰頽を來して、社會の嗜好は自然と喜劇の方に向いて、なまなか悲劇を見て、陰氣になるよりは、喜劇を見て快く笑ひ興ずる方が、觀劇の主旨に叶ふといふ風になつて來たので、狂言も隨つて川上君の言はるゝ如き輕兆浮薄なものが多くなつた。失故心あるものは、今日の芝居を見に行くのを決して喜ばぬ、私の妻の如きは、十年以來、頓と覗いたとも無い位ゐです……、と云つて、私が演說の主旨を賛成し

てくれたので、私も大いに面目を施したのみならず、日本俳優で、大統領や國務卿を相手に演舌をしたのは、川上貴二郎一人だらうと、内々鼻を蠢つて居ました。

▲紐育の興行

（此處でも一珍事があります）

華盛頓の滞在は僅かに一週間で、夫れから紐育へ行つたのが昨年の二月でした、此處には大分逗留をして日數は七十八日間――二月から四月末で丁度二ケ月半ばかりでした、此處にも一ッ面白いお話がある、アーヴキングの向ふを張つたお話と、一寸似いては居ますが、此處は、紐育貴婦人倶樂部――上流の貴婦人から組織て非常の勢力ある紐育の一大婦人倶樂部……對……英國女優チザースリー……對……川上及び貞奴といふ風に、倶樂部と女優と私共が三巴になつて、大に社會問題を持上げたお話でなか〳〵面白い事件です。

▲英國女優チザースリーの人氣

（我々は顔色無かつた）

我々が打つた劇場はビヤヨー座といふのでしたが、丁度此のビヤヨー座と向ひ合ひに演つて居たのが、今申上げたチザースリーといふ英國で有名の女優です。年の頃は三十前後で、背のスラリとした、肉付きの好い女で、紐育では、飛ぶ鳥も落す人氣女優です。其容色と言つたら、我々日本人が見ても戰ひ付く程の美人です。芝居は毎日大入大評判で、初日から大景氣と意張つて居た有樂の我々日本俳優先生迄も、此のチザースリーに對しては殆ど顔色無つた。

▲チザースリーに對する興行禁止告訴

（相手は貴婦人倶樂部）

處が興行未だ幾日ならざるにです、チザースリーの狂言は、彼の紐育貴婦人倶樂部の一大問題となつて「斯る卑猥な狂言は社會を紊し風紀を害するの恐があるから宜しく興行を禁止すべし」といふので、倶樂部の貴婦人達は、遂にチザースリーを相手に取つて、興行禁止の告訴をしたので、此處に一大騒動が持上つた。

▲猥褻なる幕切れ

（實に恐縮に堪ない）

此の騒動の持上がる前の晩位ゐでした、我々も一日見物に行きましたが、其狂言の外題は『サフオー』と云つて、日本でなら一寸小三金五郎と云やうなもの、其猥褻や加減は實に堪まつたものでない。サフオーといふのは、劇中の女主人公の名です、高等淫賣をして居る下等の女役者で、此れをチザースリーが扮する。或る日某處の夜會に招かれて行くと、何處か地方の金持の息子でヤンゴシといふ青年の法學士と懇意になつて、夜會が果てゝから、丁度午前二時頃法學士は一人でテクテク下宿屋に歸らうとすると、最前から誘ふ水あらばといふ風に、法學士に持かけて居たサフオーは中々逃がさない、「耶君、何處へお歸りですか……夫れぢや好いお道連れですねェ、私も一人ぢや淋

しいから、遠れて行ッて頂戴な」など云ッて、充分あまたれて、とう〳〵ヴンコシンを擒にして一緒に連立て歸へる。蟲て法學士の下宿屋に着くと、サフォーは此機乘すべしと、「私は今夜飲んまりお酒を頂いたもんですから、醉ッぱらッち仕舞つて歩けないわ。一人ぢや歸へられないから、郎君の下宿に泊めて下さいな……後生ですから……」といふやうな調子で、法學士先生を口説いて、遂に下宿屋に泊まる事になる、法學士の寢室は二階だから、サフォーの手を取ッて、梯子段を上がらうとするとサフォーは足もよろ〳〵と其處に凭れかゝッて「私はモウ動けないわ……後生だから郎君おぶッて頂戴な」といふから、法學士も仕方が無いといふ風に、醉潰れて居るサフォーを抱き上げる、サフォーはヒッシと男に縋がッて、二人梯子段を上りかゝる處で幕になるのです。

▲幕を開けると十二三回

（滿場の見物は盡く色情狂）

と云つたばかりでは頗る氣なくて、別段猥褻な處も無いやうだが、此間の二人の一擧一動が實に恐縮に堪ない仕打が澤山ある。此の幕切れの拍手喝采と云つたら、舞臺も搖がんばかりで、御承知の通り彼地では、一旦幕を閉めても、拍手の鳴が止まぬと、再開けて見せる、再閉めてまだ止まぬ時は、又開ける、二度三度は慣かなと、甚だしいのは、十回以上も開ける事があるのです。此處の幕切れなどは、實に凄まじいもので、幕が閉まると鳴る、鳴ると開ける閉めるのと鳴るのと競爭で、後では見物と舞臺方と根くらべです。我々が見に行つた時などは、十二三回も開けました。

其間法學士のヴンコシンはサフォーを抱いたまゝ、階子段を少しづゝ上りながら、飽くまでも癡態を演じて居る。モウ十二三回目になると、宜しく……といふ樣な風をして、二人が左右から別れ〳〵になッて出て來るのです。拍手喝采をしてゐる滿場の見物は丸で狂人――色情狂です。

▲男女間の制裁

（東洋よりは非常に嚴しい處がある）

御說明をいたすまでも無く、西洋の男女の關係は、東洋よりは非常に自在な處がある代りに、また制裁の非常に嚴しい處があつて、上流社會では紳士の居間にさへも貴女を入れるとは中々八釜しい、夫れに此芝居では、深夜女を自分の寢室に連れて上がらうとするのみならず、之れを擁し之を勦はつて、甚しき痴態を見せるですから、心あるものは迚も見てゐられない、遂に紐育貴婦人倶樂部から、大議論の持上つたのも無理は無いのです。

▲猥褻涙と非猥褻涙

（新聞二派に分かる）

此狂言に對して貴婦人倶樂部から、いよ〳〵興行禁止の告發をすると、チザースリーも有絮一辯ある女ですから、決して後へは退いて居ない、直ぐに故郷の英國から來て居る、澤山の辯護士を雇ッて、倶樂部の告發は不法である、「サフォー」の狂言は決して猥褻でない、男女の神聖な愛を演じたものだと言ッて、反訴をしたのです。紐育の各新聞は、猥褻、非猥褻の二派に分れてチザースリー

最貧の新聞は、盛んに之れを辯護して貴婦人倶樂部を攻撃し、反對派の新聞は、何處までもチザースリーを罪に陥さんと意氣込んで、毎日議論を戦はして居たが、ヘラルド新聞だけは局外中立をして、此勝負如何にと傍觀をして居つた。

▲亞米利加派と英吉利派

（辯護士同志の戦ひ）

此の告發事件は、チザースリーの手から直ぐに故郷の英國へ電報で報道をした。スルト倫敦の梨園社會では萬一チザースリーが此裁判に負けると、英國の名折れであるといふので、有名な辯護士を撰んで、態々亞米利加へ送くるといふ騒ぎ、倫敦からは毎日のやうに、昨日の模樣はどうか、今日の結果はどうかと、電報を以て裁判の成行を聞いて來るから、此方からも其日〳〵の模樣を毎日のやうに打つ、此の騒ぎは遂に貴婦人倶樂部……對……チザースリーといふよりは、亞米利加と英吉利の辯護士同志の戦ひになつて、どちらの辯護士が勝つか負けるかの問題にまで、轟は變つて來た

▲貴婦人倶樂部の大勝利

（人氣女俳優牢に這入る）

斯んな騒ぎの持上がつたのは、彼地でも實に珍らしい事ですから、社會全体の人々が此事件の成行きに注目をして、罪になるかならぬかの問題で、中には賭けまで遂つたものがある位ぬです。さて貴婦人倶樂部とチザースリーは各有力な辯護士を使ッて、此處を先途と法廷に是非を爭つたのですが裁判の結果、原告の貴婦人倶樂部は見事勝利を占め、被告チザースリーは見事敗北をしたので、芝居は其儘興行禁止し大喝采を以て迎へられた人氣役者はどう〳〵牢に這入ッて、昨日までの狂熱の見物を以て沸騒ッて居た向ふの劇場は、火の消たやうに淋しくなッて、誰一人覗いて見るものもない

▲日本趣向「サフオー」

（川上思へら〳〵奇貨措くべし）

アーヴキングの向ふを張ッて味を占めた譯でもないが、此時私は又思へら〳〵です。「サフオー」の狂言は餘り人氣が立過ぎて、社會問題から裁判沙汰、役者が遂に牢へ這入ッた始末であるから、今後亞米利加では到底見られない、夫れに是非の議論が、梨園界や一般市民の間に益々沸騒して、居る最中だから、此機に乘じて「サフオー」の狂言を持込んだなら、又々大評判になッて大當りを取るに相違無い、明日から直に出さうといふことになッて、狂言の筋もまだ出來てゐないが人氣を取るために、看板だけ出して置かうと、英字で以て「サフオー」と大〳〵書いて、其下にヤパニース、アイデヤ（日本の趣向）と註を入れ、傍に明日より開場と書いた看板を掲げたが、チザースリ入牢の日で夫れから直に筋拵へと稽古に取かゝつた。

▲縁育の新聞記者八方より賑付る

（是は軍機を漏す譯には行かぬ）

日本趣向といふ『サフォー』の看板が掲げらるゝと、サア大變　昨日まで英米二ケ國で裁判の勝敗を爭ふて、其結果とう〳〵英國の負けになつて、興行禁止をされて、人氣女優ヂザースリーは牢にまで打込れた『サフォー』の狂言であるから、ビヤホー座の前は、見る間に人山を築いて、ワイ〳〵言つて騒いで居る、甲傳へ乙唱へて、忽ち紐育市中の大評判で興行禁止をされた、同じ外題の狂言を我々紐育市民へ一應の挨拶も無〳〵興行するとは、怪しからぬヤツプ共だと、怒鳴込んで來る、非ヂザースリー派の奴もあれば、大恐悦顔をして看板に見惚れて、明日の開場を一日千秋と待詫び居る、ヂザースリー派もある、各新聞社は早くも聞付けて、如何いふ筋の狂言であるか、是非聞かせて呉れと迫まつて來る……否是れは我々の軍機であるから、漏らす譯には行かぬ、今稽古をして居る處だと、放ぬ付けると、ソンナラ責めて稽古だけでも見せて呉れ、振りの一つでも好い……否夫れも出來ぬ、新聞へは書かぬから、鳥渡でも見せて呉れ……夫れも駄目と、とう〳〵頭つて何處の新聞社へも一切秘密にして、其夜の中に、筋も拵へ稽古もして、明くる日にいよ〳〵初日を出した

▲入場券を買ふ者裏町まで續く

（初日に三四日分を賣盡す）

大人氣を取り、大喝采を博した『サフォー』の狂言――モウ是れつ切り見られないと思つて諦めて居た紐育の老若男女は、日本趣向といふに、一層好奇心を驅られて、東西南北から潮の如く打寄せて開場時刻に迫まると、何の事は無い、停車場の切符賣捌所で、入場券を買ふ者が、一列になつて、蜿々と裏町まで續いて居たといふ初日の景氣、丸で嘘のやうなお話です、殊に驚いたのは、此一日の中に三四日分の入場券が一時に賣れ盡して了つたとです、此の一例を見ても、如何に『サフォー』の狂言が大當りであつたかといふことが分ります。

▲場所は向島、時候は花の盛

（佐保子と甚五、繰の網引）

さて我々の『サフォー』なるものは、如何な工合に原作を燒直して、日本的趣向にしたかと、いふと先づ名前は成るべく原昔に近いやうに常歌めて、サフォーを佐保子（貞奴）ジンゴシンを甚五（川上）とした、場所は向島にして、時候は丁度花の盛り、老若男女大勢の花見連が一組遣つて來て、忠臣藏の茶屋場見たやうな鬼ごつ子がある、夫れが濟むと色氣に、滑稽を交せた網引の遊戯になる、網は第一番第二番第三番と、一々番號を付けて、夫れを引くと、一本の網に兩人づゝ取組むやうになつてゐる、男の方では彼の女をと狙ひ、女の方では彼の男をと狙つてゐるのが、箇々に當てが放れて若い男がお婆さんと、引合ひ、娘が老爺さんに引當てゝ、テンツル〳〵テンツルテンの、賑やかな合方になつて、順番に舞臺へ出て來て、変る〳〵いろ〳〵の可笑味があつて、最後の網曳きに、佐保子と甚五が引當てる、是れが縁の綱になつて、平生から惚からず思つて居た、兩人の戀が、一層深くなる、即ち戀の成立を見せるのです。

▲殖に嬉しき男の力

（鬼が來て布袋を冠せる）

縁の綱引きが濟んでから、今度は前と變つた鬼ごつこになつて、鬼は大きな布袋を以て、大勢を追回しておつ冠せやうとしてゐる、皆んな逃げつ隱れつ走り回つて、何處へか追散らされて仕舞ふと後に佐保子と甚五の二人が取殘される、日も段々暮れかゝつたので、佐保子は好い道連れだから、何卒か自分の宅まで送つて行つて呉れと頼むと、甚五は極初心の堅氣な男であるから明るい中なら送りもしやうが、日が暮れては……と迷惑をして居ると、佐保子は急に持病の癇が差込む。甚五は驚いて、押へたり擦つたりして介抱をすると、佐保子もヤット生氣になつて、「穩に嬉しき男の力」といふ唄につれて、佐保子が嬉しきこなしあつて、ヤット甚五の手を握つて、耻かしさうに袖の下に隱くし、此の間双方たつぷり色摸樣になつて居る、其處へ突然鬼が逃つて來て布袋をおつ冠せる明けて見ると、佐保子と甚五の二人であるから、驚愕して居る處に、大勢の番も馳付け、此の体を見て、箇々に二人を嘲ぶると、離れもやらず、消ねも入りたき、風情でいつれも、羞む仕打の處で幕になる。

▲東洋のヤップに取ぢよ

（米國新聞の英國攻撃）

勿論一夜作りの急稽古で、誇るべき新意匠も、見るべき技藝も無いが、只チザースリーが男女の愛を濃厚に演せんとして、殆んど春畫に近い劣情の愛を見せて、遂に失敗に了つたから、此方は夫れと反對に、極純潔な、極初心な、極淡泊した處を演じやうといふので、此んな物を拵へたのです。處がチザースリー事件の反動の結果かして、此狂言が非常に上流社會の好評を博して、彼の貴婦人倶樂部から之れが爲めに態々總見物して呉れる。原作の「サフオー」に反對をした各新聞は、我々の趣向をひゞく賞贊して、「不德淫猥を演ずるを以て、文明の劇と信ずる英國の如きは、東洋の一孤島たるヤップに對して恥づる處無きか」など再度の攻撃を始めたやうな次第です。

▲チザースリーの出牢

（直ぐに見物に來る）

彼の入牢をしたチザースリーも、其罪は極めて輕かつたのですから、我々が開演中に首尾よく出牢をした。處が直ぐ向ふに居る我々一座が、日本の趣向で、自分のお家狂言を演つて、大當りを取つて居るといふ評判を聞いたので、何は扨置き直に見物に來て呉れたのです、閉場になると、我々の楽屋に遊つて來て、日本にも同樣の狂言があるかと聞くから、イヤ實は貴嬢の狂言から思付いて、私が拵へたのであると有体に答ふると、有樂のチザースリーも驚いて、オ、お前は天才だとか何だとかいろ〳〵褒め立てゝ、紀念の爲にと言つて、後から態々寫眞を贈つて呉れました。

▲貞奴、貴婦人倶楽部の招待を受く

（名妓特別會員になる）

チザースリーを告訴して「サフオー」の興行を禁止した紐育貴婦人倶楽部は、我々が日本趣向を格別

に歡迎したのです、之れが爲めにお貞へは、倶樂部から招待狀が來た『女優倶樂部』に案内を受けて、會長エマ、フヌイ夫人を始め貴婦人、女俳優一同列席の上、名譽特別會員に推薦されて、グードヲックといふ、斯んな特別の徽章を貰つて來ましたが、日本女優といふので、大持てでありたさうですが、私は何にも貰はなかつたー

▲貞奴の演說

（紐育女優倶樂部にて）

貞奴自身の物語りに『エ、女優倶樂部へは一座の中から、妾一人まねつたんです。通辯は紐育の日本新聞の林さんて方が爲て下さいました、其倶樂部へ行つて見ると、貴婦人や女俳優や大勢居て握手をする許りでも大變なんですよ、皆んな席へ着くとヨッセス、エマ、フヌイといふ會長が、演壇へ登つて、私の道成寺や今度の『サヲオー』の狂言について、藝が甘いとか、趣向が面白いとか、いろんなお世辭を言ッて、我々倶樂部員は、日本女俳優貞奴夫人と、永く交誼を結ぶために、此倶樂部の名譽特別會員に推薦をしたいから、何卒承諾の樂を得たいとかいふやふな、演說をしたんです、夫れから妾も仕方が無いから、其後で演壇に上つて挨拶をしたんですよ、妾は元日本の藝者で夫れから、女優になつたのでムいます、此度歐米漫遊を思ひ立ッて。先づ貴國へ上がつて見ると皆さん方がふつゝかな私風情の未熟の藝をお見捨無く、色々と御引立て下されて、毎度過分の御褒に預かつたのは、實に難有く存じます、殊に今回は貴婦人倶樂部御一同から、特別の御招待に預かりまして、名譽特別會員に御推薦下されましたのは、妾一人の名譽ばかりで無く我々一座の名譽！日本俳優の名譽と存じますといふやうな意味で、スマシ込んで挨拶をしたんですよ。夫れから特別會員の推薦式があッて、グードヲックの徽章を貰つて、叮重な待遇を受けて、歸つたんです。

▲紐育俳優學校長ベルクナップ

（川上無二の知己となる）

紐育府に『セ、アメリカン、アカデミー、オブセ、ドラマチック、アーツ』と云ふ有名な俳優學校があります。校長はベルクナップ氏と云ッて、本年六十八歳の老人です。此人には華盛頓で小村公使の夜會の時、初めて面會をしましたが、紐育に行つてからは、取分け我々を引立てゝ、自分の俳優學校やブースの建てた俳優倶樂部や、其他色々演劇に關係ある處へ紹介をして呉れましたので、殺地の梨園社會の事について、少からぬ智識を得ました。

▲ベルクナップ、川上の爲めに無言劇を作る

（日本に歸つたら是非演つて下さい）

ベルクナップ氏は、我々の演する芝居を見て、日本の劇は我國のパントマイムに似てしかも一層優美な處があると大相感服をして居つた。此のパントマイムといふのは只所作ばかり、臺詞は一切拔きにして、徹頭徹尾無言で演るから、パントマイム即ち言無劇の稱がある、日本には純然たる無言

劇は無いが、義太夫物や、長唄、清元、常盤津などの所作狂言は、殆んど無言で演る處が多いから我々の『道成寺』や『左芒五郎』などを見て、斯樣な激賞をしたものでせう。ベルクナップは此類似無言劇が大層氣に入つたと見えて、私が日本に歸つたら、是非自分の無言劇を演じて呉れと言つて、私の爲めに、態々一幕物のパントマイムを書いて呉れた。『ゼー、トレートル、サミセン』といふ外題で、此脚本です……

▲紐育俳優學校の參觀

（ベルクナップ氏の案内）

俳優學校といふのは、歐米各國到る處に在つて、非常に盛大を極めて居りますが、就中巴里の如きは政府の直轄にさへなつて居る學校がある位ですから、如何に藝術や俳優が彼地では尊重されて居るかと云ふことが分かります。此事は兼て洋行歸りの人の話にも聞いて居ましたが、百聞一見に如かずで、亞米利加へ行つて、ベルクナップ氏の紹介で、始めて紐育の俳優學校といふものを參觀に行きましたが、其規模、構造のすばらしく、廣大で、其教育の仕方が嶄新で萬事整頓完備してゐるのを見て、只驚嘆の外は無かつた。我が日本の藝術、就中演劇の技術が、社會に尊重されて俳優の位置が高くなつて、斯んな學校が設けられるまでには、今後幾十年、否幾百年の星霜を閲みしなければならぬかと思ふと、只モウ心細さの限りです。

▲參觀に行きし實地の話し

（詳細の事は規則にあります）

俳優學校の教師ですか？男は勿論、女も居ます、俳優も居りますが、重に錚々たる美術家、文學者、哲學者、動物學者など、ドラマチック、アート（演劇の技術）に精通して居る博士學士達が多い、皆悉で五六十人も居ます。詳細いとは其處の規則を持つて來ましたから、夫れに就いて御覽下さい、私は只參觀に行つた時、見聞した實地のお話をいたしませう。

▲途上の見聞が毎日の學課

（空を眺めて茫然歩けない）

紐育の俳優學校は二ケ年で卒業です。初めの一ケ年の月謝が七百弗（千四百圓）で、後の一ケ年が五百弗（千圓）ですから、一ケ月が百十七八圓になります。教育の仕方は啓發的で、教師が教へるのでは無い、教はつて覺えて行くので無いです。自分で箇々に實地の研究をして、其研究した結果を毎日學校へ持つて行つて、受持教師の前で、一々演つて見せて、夫れから意見を聞いて大いに啓發するのです、是れが初め一ケ年の學課で、皆實地の研究ばかり夫れですから學生は、學校の往返りにも浮ッかりして歩け無い、高い月謝を拂ッて毎日研究して居る課目が途中に轉々して居るから、茫然空なんを眺めて歩いてる譯に行かんのです。

▲一酔漢に逢ふ

（是れも學課の一ッ）

途中で見る物聞く物が、皆んな實地研究の材料、即學課であるから中々油斷は出來ない。ソレ向ふから醉漢が遣つて來た、此奴どんな身裝をしてゐる、どんな顏をするどんな眼付をする、どんな口の利き方をする、どんな手付をする、足取をする、どんな擧動をする、身分は官吏か、商人か、學生か、職人か、市の者か、田舍漢か、何から何まで出來るだけの觀察をして、下宿に歸へると、其の醉漢の眞似をして、充分內稽古をして、夫れから學校へ行ッて、敎師の前で事捌かに演ッて演せると、其處は善い、此處は惡いと、先生が醉漢についての、批評をするです、他の學生も皆んな斯ういふ風に、夫れ〳〵研究をして行つて、跛の眞似をする者もあれば、盲の眞似をする者もある、さては娘の眞似、お婆アさんの眞似、下宿屋の主人の慳貪な顏付、下女のふくれつ面、喧嘩をする時の態度、駄り合をする時の手付、千態萬狀、細大漏さず、盡く實地問題について練習をする。

▲椅子の掛け方と手洗の試驗

（仕草が一々細ッかい）

此の一年生の敎場が第一、第二、第三と三ツに分かれて、第一敎場が實地研究の練習と試驗をする處で、私が參觀に行つた時は

▲椅子の掛け方▲顏の洗ひ方▲歩の針仕事▲跛の歩き方

此の四通りをを見ましたが大勢居る學生が其中から敎師の前に一人宛呼出されて、一々演つて見せる、活動寫眞にでも撮つてお目にかけ無ければ、迚もお話には出來ませんが、椅子の掛け方なぞ、

有れば有るもので、十四五通りも仕て見せました。椅子の隅を持ッて、右にクルリ、左にクルリ、ズッと立つと椅子は何時か前に回はり、スッと掛ける後ろに廻つてる、其手際の巧妙自在なとは、丸で椅子を遣ふ手品師かと思はれる、顏の洗ひ方なぞを見てゐると實に細かいものです、下宿屋か何處かで其初誰れか手洗を遣かつてる所を詳細し〳〵見て來たのでせう、一擧一動の中に、其人の性癖が自然と現らはれて居るから面白い。先づシャツを兩腕とも充分まくし上げて、金盥に機械を捩ぢつて湯を出して、夫れから水を入れて微温くする。一寸と手を附けて見て熱ッ、、、ゥと指の先を振つて、また水を注ぐ、また手を附けて見て、此度は丁度好いといふ思入れをして、夫れから顏を洗ひにかゝる。エヽ勿論機械も無ければ金盥も無い、敎場ですからソンナ道具なぞは一切ありません、只有るやうな風に見せて、敎師の前で演つて居るのです、其洗ふ仕草は口を嗽ぐ、目脂を取る、鼻を拭む、爪を洗ふ、石鹼の使ふ、其の使ひ方、洗り方、取り方、嗽ぎ方が又一々細つかい。いよ〳〵顏の全体を兩手で一生懸命に洗ひにかゝると、まくし上げたシャツが段々落こちて來る、エヽ五月蠅いといふやうな顏をして、濕れてる指先で、一寸其シャツを摘まんでまくし上げると、洗つて居る中に又落ちて來る、エヽと又癇癪を起して摘み上げる、大變な騷ぎ。愈々洗つて仕舞つて、スッカリ拭いた顏を見ると眞正の手洗を遣かつたやうに、眞赤になつて居る。夫れから鏡を見て頭髮にカスメを塗けて、分けやうとする、分け損なつちや、またグチャ〳〵にして、又分ける、やう〳〵奇麗に分けて、夫れから石鹼を手拭に包んで、歸つて行くのです。

▲顔の洗ひ方は及第點

（教師が後から批評をする）

教師は始めから終まで、仔細に其洗ひ方を見て、七十點とか八十點とか點數を附ける其の演り方が拙くて及第點にならぬ者は、批評も何も加へないで、其まゝ元の席に返へして、及第點以上と見ると、演ッて仕舞つてから、一々評をして、自分の意見を述べるのです。此顔の洗ひ方は及第をしたと見ねて、石鹸を手拭に包んだ時、まだ水氣の有るのを碌に拭きも仕ないで、突然包んだが、其れは少し注意が足りないとか、其他いろ〳〵評を加へて居ました。

△鈕の附け方と眺の歩る き方

（大眞面目で演る）

女の針仕事は、洋服の鈕を附ける處で、二通りありました。一方は躁急しい亂暴な娘で、裁縫の極拙づい處です。鈕を附け損なッたり、絲を切ッたり、素らしたり、針を突立てたり、色々な間違を演かす。一方は巧妙で熟練で迅速な處を見せたのです、跛の歩き方なぞは、實に噴飯したくなつたが演る者も見て居る者も大眞面目です。（よ 神聖の學校の課目の一ッですから……。）

△顔の仕方僅かに二分間

（支那人の勞働者に扮せよ）

夫れから第二教場に行ッて見ると、此處は顔の仕方を稽古する處で、廣い教場の両側へ、壁の方へ向ッて机と椅子が澤山並んで、机の上には七ッ道具と紅白粉油墨、其他色々の品が這入ッてる化粧箱が有ッて、其前には大きな化粧鏡が一ッ宛懸ッて居る。學生は男女混淆で、ズラリと椅子に掛ッて、毎日顔の仕方の稽古をしちや、教師の批評を聞いて居るのです。私が觀に行つた時は、「年齢五十六七の、支那人の勞働者の顔を扮れ」と云問題が出た、夫れを二分間に扮れといふ命令を出して教師は時計を持ッて教場の中央に立つて時間を見て居る、僅か二分間といふのだから、中々急がしい。其命令が下だると、両側に並んで居る百人近い男女の生徒が、ガタビシ化粧箱を開けて、一整に取りかゝる。油を塗る者もあれば、青黛を使ふ者もある、眉を畫損なッて、狼狽て〳〵消してる者もあれば、色邊を間違へてトチレて居る者もある、後から見て居ると、なか〳〵面白い。

▲半面は亞米利加の紳士半面は支那の勞働者

（半分しきや出來ない）

二分間だから見て居る中に經つて仕舞ふ。いよ〳〵時間が來ると、教師は容捨なく鈴を押す、チリンと鳴る鈴の音と共に、ピタリと止めて、今迄壁の方を向いて鏡と討死をして居た男女の生徒が、クルリと椅子を廻はして一整に正面を向いて起立をする、此椅子の廻はし方なぞは第一教場で稽古をしてゐるから、なか〳〵巧妙い者です。其向いた顔を居ると、五十五六の支那人の勞働者が、首から上だけ、見世物のやうに並んで居るが、顔の仕方の同じ者は一ッも無い、個々に思ひ〳〵の顔を拵へて居るのです。顔を拵へてるはまだしも好いが、中には半分しきや出來て居ない——半分

は亞米利加の紳士で半分は支那の勞働者といふ、生れも付かぬ片輪者が、スマン込んで並んで居る、其顏といつたら、思はず噴飯したくなるが、向ふは馴れてるから、一向平氣なもの。

▲時間的の嚴格なる敎育

（昔羽屋の如きは學校の門番にでもなれ？）

敎師は夫等の顏を巡檢して、一々手帳に點數を付ける。點數を付けられて椅子に掛ける者は、落第をしたので、其儘立つてる者は及第をして、是れから顏の仕方について敎師から批評と說明を聞く恩澤に預かるのです、敎師は此の顏は六十點彼の顏は七十點と、點數を付けて仕舞つてから自分の繪いた、支那人の勞働者の肖像を張貼けて其繪を標準として及第者の顏に一々評を入れる、お前の鼻には兩側に墨を入れてあるが、支那人は一般鼻が低いのに、ソンナ仕方は無いとか、此の眉は下がり過ぎて居るとか、此の目は青黛の用ゐ方が多過ぎるとか、仔細に評を試みて、夫れからボールドに同じ肖像を畫いて、顏の仕方の順序や色彩の使ひ方を詳細しく說明して聞かせるのです。斯んな風に時間的の嚴格な敎育を受けて、ソレカラ俳優になッて世に出るのですから、日本の俳優見たやうに、話をしたり烟草を吸つたり悠長に攣へて顏を作つちや居ない、十分間なら十分間、十五分なら十五分と、時間通りキチンと仕て、直に舞臺に出るから、貴重な寸陰を竊合で潰して、見物に迷惑をかけるやうなことは更に無い。昔羽屋のやうに見物や時間を屁とも思はぬ我儘な役者は、此處の門番にでも、一ト月斗りさせて置きたい。

▲動物の啼聲の稽古

（猫はミヤチ〳〵犬はワン〳〵）

顏の仕方を見てから、第三敎場に行くと、此處は昔聲の練習です。人間の聲の眞似は勿論のことですが、牛、馬、猿、鷄、犬、猫あらゆる禽獸の啼聲を稽古してゐるから難くです、丸で人間の動物園ですな。此處の先生には猫八見たやうな滑稽な顏をして居る奴が居ると思ふと、何々博士とか、何〳〵學士とかいふ堂々たる人達が此の牛馬の啼聲の先生をしてゐる、學生は矢張一人〳〵其先生の前に引出されて。

「お前は牛の啼聲を遣つて見なさい……と言はれて

「モー……なんと牛の眞似を演る。

「今度は猫の啼聲……といふと、

「ミヤチ〳〵ニヤン〳〵

「犬の啼聲は

「ワン〳〵ワウ〳〵

といふやうな工合で、一匹の犬についてもいろ〳〵な調子を遣つて聞かせると、敎師は手帳に控へて、此犬は巧いとか、此猫は拙いとか、眞面目腐つて點數を付けてる。是れも卒業試驗の成績に關はるから、學生も一生懸命に學校の歸りにや時折動物園へ出かけて行ッて、實地研究をして來るの

です、此の教場で可笑しいのを堪へて居たほど苦しいことは無かつた。

▲政治家や學者の身振假聲

（一擧一動一言一句）

動物の階梯の試驗が濟むと、今度は政治家とか實業家とか、學者とか商人とか、あらゆる階級の人々の、身振、假聲から一擧一動、一言一句、其身分職業に應じて、性格習癖を、仔細に演じ分けて見せる。是れも一々教師が見て點數を付けたり、批評をしたりするのは、前と同じことです。以上の三教場で爲ることが、一年八百弗の月謝を拂ッて、啓發的の教育を受ける前期の學課です。

▲二年生の無言劇

（日本人に分かるなら我々の手柄）

さて二年生になると、如何いふことをするかといふと、此處は教場が四ッに分かれて居る。第一教場が各國の歴史、第二教場が各國の言語、第三教場が体操と音樂、第四教場が初めて眞正の芝居になッて、教場が即劇場です私共を案内した校長のヘルクナップは、普通の芝居を見せても詰らぬから、是非無言劇を見て呉れ、是れが日本人に分かるなら、我々の手柄であるから……と言ッて無言劇の一曲を見せて呉れました。

▲私が了解した無言劇の筋

（臺詞の無いだけが却て分り易い）

パントマイム――無言劇――ヘルクナップ校長が我々に自慢で見せた無言劇は、其名の通り、一言一句も口に發しないから俳優は全く唖同樣、見馴れぬ我々の目には一寸滑稽に見ゆるが、併し臺詞の無いだけ、又却て分かり易い。狂言の外題は何と言つたか忘れたが、筋だけは日本の芝居を見ると同樣に詳細く了解することが出來たのです。其大要をお話しすると、紐育附近の或る田舍に住んで居る一人の畜工と、紐育の或る貴女とが、互ひに思ひ思はれて指輪を交換へて、夫婦約束をして居る。併し畜工はまだ女の心を疑ひ、女も亦畜工の心を疑うてゐるので、なか〳〵結婚の運びに到らぬ、スルト或日のこと、女は彼の畜工は眞實自分の事を思つて居るや否やを試めし、其上で約束通り夫婦にもなり、また破談にもしやうといふ決心で、窃かに畜工の家へ尋ねて行ッた

▲下女に扮して男の心を試めす

（畜工は少しも知らぬ）

女は畜工の家に居る一人の下女に申し談じて、髪を冠ぶり衣服を取替へて、スッカリ下女の裝になり樣ッて仕舞ふ、畜工の部屋には久しく戀人に逢はぬため、懐かしさ戀しさの餘り、責めてもの心遣りに繪きかゝつた戀人の肖像が、漸く半分計り出來上がつて、畜工は獨りつくねんと其肖像の顔を眺めては逢ひたい見たいと一人夢中になつて心を惱ましてゐる、畜工は其苦痛を癒やすに由が無いので、下女を呼んで酒肴を命ずると、最前より身仕度をして待構へて居る戀人の貴女は素知らぬ体に繕らふて、酒や肴を持ッて畜工の部屋に行ッてお酌をすると、半分繪きかけた自分の肖像がか

ッて居るので、内心は喜びながら、表面は其女の肖像について、いろ〳〵嫉妬の仕打を演る、書工は其中に一酔陶然となつて、其下女に接吻をさせてくれといふ、女は、郎君が大事さうに箝めて居る其指輪を下さるなら接吻をさせませうといふと、否此指輪は遣るとは出來ぬ、其代はりにお前が好きなものを、只で繪いて遣るから、何卒接吻をさせてくれと、推問答の末、とう〳〵箝めて居る指輪――彼の戀人と夫婦約束をして交換へた指輪を脱いて女の指に箝めて與る。スルト女は突然驚を取退け、正体を現はして、男の心緩りを責めると、有繋の書工も今更面目なく、實は貴女を思ふの餘り繪さかゝつた貴女の肖像に、餘り貴女がよく似て居るので、ツイ大事の指輪を脱ぐまでに至ッたが、是れも貴女を眞實戀ひ慕うて居るからの事であるといふと、女もヤット安心して、互の疑も解けて、元の通り指輪を取替へて、夫れでは愈々夫婦になりませう、と互に抱付く處で幕になる。芝居では是よりはズッと詳細いのですが、梗概はマア斯んなものでした

▲彼地の芝居にもクロンボあり

（但し學校の稽古場だけです）

學校の舞臺ですか？スッカリ本式の通りで、舞臺の有所は地の下の四階になッて居る一番下で。他の教場などは地上十七階の上です、日本では公然觀せる芝居にでも、黒頭が出て居ますが、彼地ではソンナ者は一切無い、併し此處の稽古場の舞臺にだけ附いて居る――否匿くれて居るのを發見しました、日本の芝居でいふと、舞臺の前即ち平土間の小一の前に、蔽ひを掛けた燈火が、學校の舞臺へも澤山並んで居る、日本のは瓦斯だが彼地のは電氣燈だから顔の皺まで見える、學生共が大勢出て、芝居を演ッてると、時々何處からか大きな聲で怒鳴る奴がある『モット力を入れないとイケナイ』とか『調子が低過ぎる』とか、色々な小言を言ッて、號令をかけてる奴がある。

▲クロンボ學生を叱咤す

（是れは皆學校の教師）

何處から言ッてるのかと思ッて見ると、舞臺には學生の俳優の外、誰れも居ない、よく〳〵注意して聞いてると、舞臺の前に電氣燈の蔽ひの中から其聲が出て居る、ハ、ア成程と思つた、澤山ある蔽ひの中から、電燈の光線の射してるやつもあれば、射して居ないやつもある。射して居ないのは電燈を點けてないのかと思ッて居たら、其中から怒鳴ッて居る、其中にクロンボが隱れて居るのです、其クロンボは誰れでも無い皆んな學校の教師達で、矢張教授をして居る處なんですね。

▲日本にも俳優學校を立つべし

（今の俳優では駄目です）

私も此學校を參觀に行ッて他の人が行ッたッて　夫れ程にも感じますまいが――苟も俳優の末席に列ッて、夫を商賣にして居る我々は大に感じたのです。其所で將來俳優にならふといふ少年の男女を、教育して行より外に手段は無い。其教育をするのは、結局俳優學校です、始めッから彼地のやうに完全無欠なとは望まれぬから、今日の日本に適するやうな、極めて卑近な俳優學校を設立し

て、藝道と學問と成るべく並行して行くやうに、教育の方針を取るのです。是れで無くちや、いくら劇界の刷新だとか演劇の改良だとか絶叫をなされても、今の興行師や無優には馬の耳に風です。

▲俳優のみ豈無學なる可けん哉

（今度行ッて歸つたら斷然學校を建てます）

仕立屋には裁縫學校あり、料理には料理學校まで出來て、下田さんは下女や子守の學校まで建てたといふぢやありませんか、是れを思ふと新橋に藝妓學校が出來たといふのも決して滑稽では無い、世の中が進んで來た風潮の然らしむる處です、既に下女や子守や藝妓の學校まで出來た今日だから、私共は今度彼地に行ッて、下等な奴等から一言目にはヂャップだ〳〵と嘲弄される、口惜しくッて〳〵堪らんから、捕まへちや始終喧嘩をして居ました。コンナいろんな事が骨身に染みて來て居るから、決して座場の空論は吐かない、今度モ一度行ッて充分彼地の芝居の研究もして、金も儲けて歸つたら、斷然日本にも俳優學校を建てる心算です。又川上の法螺と言はるゝかも知らぬが……、今は何と言はれても仕方が無い……只再度歸朝後の實行如何を見て頂戴ば、夫でよいのです。

▲米國第一の興行人

（一人で百有餘の劇場を持つ）

米國で第一番の興行人はフローマン氏と言て紐育に住んで居ます。此人の持つてる劇場が米國到る處に在つて、其數が百有餘場、二言目には日本の事が、お引合に出ますが我邦では小度けな一軒の劇場さへ、幾人の株主が、手を持つ足を持つして、しかも辛らうして、維持して行きつゝあるが、此フローマン氏はたッた、一人で以て、歌舞伎座以上の建物を百有餘場も所有して居る　此一例を見ても洋行歸り、殊に新進文明國の亞米利加歸りの先生達が、只打ッ魂消て來て、我れと我が國に愛想を盡かすのも無理は無いと感じました。餘談は扨置き私共夫妻は、俳優學校を參觀に行つた後で、此のフローマンが持つて居る中で、最も高等な劇場……矢張紐育にあります、其處で俳優學校の卒業式があるといふので、校長のベルクナップ氏やフローマン氏等から、特別の招待を受けて觀に行きました。卒業生は三十七名ありました。

▲俳優學校卒業式の參觀

（川上夫妻の優遇）

卒業式は劇場の舞臺で行るのです。舞臺は後の方を段々高くして、椅子が三重に並んで居る。其第一席が紐育市長、第二席が米國の重なる興行人、第三席が有名な脚本作者、其次が公立病院長、醫學博士等、私共は其次に置かれて卒業生と其家族、在校の學生、其他の來賓は、一同見物席に列つて居ました。

▲女優キャンデルの氣焰

（演劇改良派の主領）

式場では日本と同樣、卒業生に向つて校長初め重なる人々から聽の演說がある。此時は先づ校長の演說があつて、次に作者、夫れからキャンデルといふ有名な、女優の演說があつた。此優はモウ老婆さんですが、學問も深く技藝も上手で、演劇社會には非常な勢力を以て居る。殊に演劇改良派の主領といふので一段と名高い。老婆さんではあるが。其演說の仕振りといひ、主意といひ、實に堂々たるものです。其大要は初めに在來の演劇の弊害を痛論して、若し此儘にして置く時は、益々文明の時勢に遲くれる而已であるから、盛んに改良の手段を講じ、進步の路を開くのは、梨園社會刻下の急務である……と冒頭先づ自分の主義を論じた。次に妾は今日卒業をされる、三十七名の諸君に對ッて切に一言を呈したいのは、今後社會に出られてから、諸君を招聘する興行人から、金錢の爲に其技藝を束縛せらるゝ勿れといふことである。諸君は幾百弗の金を拋ち二年間の光陰を費やして、刻苦勉勵、漸く卒業をしたのでは無いか、諸君の得たる智識と修めたる技術は、決して興行人が金錢を以て束縛し得べきもので無い、諸君は自分の思ふ通りに其智識と技術とを以て、自由に働いて、世界の美術の爲に貢献しなければならぬ。諸君が働く舞臺は決して亞米利加に限らぬ、亞米利加でいかなければ英國に行け、英國でいかなければ、佛蘭西に行け、獨逸に行け露西亞に行け、諸君を歡迎する處は、世界各國到る處にある……

▲貞奴接吻をされて驚く

（紐育の大評判！）

キャンデルの此演說は當日の聞き物で、非常の喝采であつた。其演說が終つてから、キャンデルは我々夫妻を舞臺の正面に引出して、一同に紹介をして呉れたのですが、紹介が濟んでから、キャンデルはお貞を捕まへて、突然頬邊をチューとキッスを仕たのです。餘り不意を打れたので、お貞はエ、ッと驚いて、キャンデルを振拂つて、猥褻てゝ元の席へ逃げ歸つて黙くなつて居ました。

▲ベルクナップ曰く「貴下は此式場に臨んで如何に感ぜしか」

（日本人の居ないのが殘念です）

次に変る〳〵教師や興行人などの演說があつて、最後に卒業證書を渡して、式は此れで終りを告げましたが、此時ベルクナップ校長は我々に向つて「貴方がたは今日の卒業式に臨んで、如何に感じましたか」と問ふたから、私は「貴下等の御紹介に依つて今日此席に臨むの榮を得たのは、實に喜ばしく感ずる、併し今卒業證書を貰ふた學生の中に、日本人が一名でもあつたなら、猶一層喜ばしく感じたであらうが、喜びの中にも只夫れのみが殘念に思ふ」と、斯う返答をすると、ベルクナップ氏は大相喜んで、夫れは誠に御尤、併し兩三年の中には、貴國からも入學生があると思ひます、決して御心配には及ばぬ……」と如才ない挨拶をした。

▲プーズの俳優倶樂部

（此處にも色々珍らしいお話がある）

或日某俳優の紹介で、俳優倶樂部といふのを參觀しましたが、此處も亦盛大なものでいろ〳〵珍らしいお話がある。此俳優倶樂部といふのは、大統領を殺した前のブースの弟、即彼のブースが建てたのです。其主意は男女俳優間の親睦を計るといふばかりで無く、政治家や文學者や美術家など交際を開く目的で建てたのです。溝來ブースは死ぬまで、此倶樂部の三階を、自分や家族の住居にして、自ら此處の番頭になつて、出入する倶樂部員を接待したと云ふとです。

▲俳優倶樂部の組織

（大變なものです）

此倶樂部の組織と云つたら、大變なものです。一寸重なる室の部類を擧げて見ると、

▲歴史の書籍館

▲世界の新聞縱覽所

▲名優の演藝の寫眞、愛翫の髦、髭其他の遺物を陳列せし室

コレハ皆んな世界の名優で、古代からのを歴史的に陳列してある

▲番附筋書類の陳列室

コレモ世界古今の番附筋書類を蒐集してある。

▲倶樂部員名簿室

▲玉突場

▲食堂

此の外に部類をされてる室が澤山ありますが、私共が見た重なるものは此位ねでした。

▲ブースに取ッテ偉大なる紀念

（ブースの書齋と寢間）

政治家に限らず文學者に限らず、何人でも一代に偉功を奏した人の爲に、紀念碑を建てるとか、紀念物を保存するとかして、千載の後までも其人を追慕崇敬するといふ美風は、東洋も西洋も變はりはありませぬが、私の考から見ると、東洋よりは西洋の方が、其方法が如何にも叮重で、如何にも人情が濃かいやうに思はれる。外では無い、此の俳優倶樂部を建てた、弟ブースの書齋や、寢間が。今でもチャンと殘ッて居る。其處へ行つて見ると、僅か一の俳優に過ぎなかつた弟ブースの人物、其の拔藝、其の事業、其の遺德が、藝術界、文學界、音學界、其他あらゆる階級の社會から、いかに追慕され崇敬されて居るかといふことが分かる。

▲机上の沙翁劇

（ブースが開いたまゝ殘ッて居る）

弟ブースの死んだのは今から八年前です。或日倶樂部の書齋即自分の書齋で、シエークスピヤの脚本を讀んで居ると、其の書の上に頷いたまゝ、眠るが如く死んで仕舞つた。其のシエークスピヤの脚本が机の上に今でも殘ッて居る、ブースが瞑目する其刹那まで讀んで居るまゝ、開かれて居たま

或日某俳優の紹介で、俳優倶樂部といふのを參觀しましたが、此處も亦盛大なものでいろ〳〵珍らしいお話がある。此俳優倶樂部といふのは、大統領を殺した前のブースの弟、即後のブースが建てたのです。其主意は男女俳優間の親睦を計るといふばかりで無く、政治家や文學者や美術家などと交際を開く目的で建てたのです。爾來ブースは死ぬるまで、此倶樂部の三階を、自分や家族の住居にして、自ら此處の番頭になつて、出入する倶樂部員を接待したと云ふとです。

▲俳優倶樂部の組織

（大變なものです）

此倶樂部の組織と云つたら、大變なものです。一寸重なる室の部類を擧げて見ると、

▲歴史の書籍館

▲世界の新聞縱覽所

▲名優の演藝の寫眞、愛翫の鬘　髭其他の遺物を陳列せし室

コレハ皆んな世界の名優で、古代からのを歴史的に陳列してある

▲番附筋書類の陳列室

コレモ世界古今の番附筋書類を蒐集してある。

▲倶樂部員名簿室

▲玉突場

▲食堂

此の外に部類をされてる室が澤山ありますが、私共が見た重なるものは此位ねでした。

▲ブースに取ッテ偉大なる紀念

（ブースの書齋と寢間）

政治家に限らず文學者に限らず、何人でも一代に偉功を奏した人の爲に、紀念碑を建てるとか、紀念物を保存するとかして、千載の後までも其人を追慕尊敬するといふ美風は、東洋も西洋も變はりはありませぬが、私の考から見ると、東洋よりは西洋の方が、其方法が如何にも叮重で、如何にも人情が濃かいやうに思はれる。外では無い、此の俳優倶樂部を建てた、弟ブースの書齋や、寢間が。今でもチャンと殘ッて居る。其處へ行つて見ると、僅か一の俳優に過ぎなかつた弟ブースの人物、其の技藝、其の事業、其の遺德が、藝術界、文學界、音學界、其他あらゆる階級の社會から、いかに追慕され尊敬されて居るかといふことが分かる。

▲机上の沙翁劇

（ブースが開いたまゝ殘ッて居る）

弟ブースの死んだのは今から八年前です。或日倶樂部の書齋即自分の書齋で、シエークスピヤの脚本を讀んで居ると、其の書の上に頷いたまゝ、眠るが如く死んで仕舞つた。其のシエークスピヤの脚本が机の上に今でも殘ッて居る、ブースが瞑目する其刹那まで讀んで居るまゝ、開かれて居たま

さ、机の上に置かれたまゝ、八年の今日に至るまで、寸分の位置も違へずに、依然として殘されてある、其他机の位置から椅子の位置から、一すとした文房具に至るまで、此脚本と同樣に盡くプースが居た時の儘、保存されてある。

▲只塵埃の積るに任かす

（幾年たつても掃除をしない）

此書齋は無論掃除を仕ない、掃除をすゝと汚麗になるのはよいが、其時の位置がスツカリ轉倒れて仕舞ふから、塵は只積るに任かせてあるのです。四方の書架を見ると、四段も五段も、いろ〳〵の書籍がギツシリ詰つてゐる。如何な種類の物が多いかと聞くと、過半はシエークスピヤの脚本で、後は古代の歴史、殊に古代の歴史が多いといふとです。

▲寢室の蒲團も其儘に殘れり

（年に一度づゝ藏ひを仕替へる）

夫れから寢間に行つて見ると、是れもプースが臨終の時のまゝ、蒲團から枕から何から何まで、プースが寢に行かうといふ時のまゝ殘つて、此處だけは其上に藏ひがしてある。是れはプースの娘といふのが、年に一度づゝ藏ひだけを取替へに行くさうです。

▲食卓を圍める知名の貴女紳士

（曰く某政治家、曰く某新聞記者……）

俳優倶樂部に行つて、見物をしてると、丁度晝飯時になつたから、食堂に案内をされると、大勢の貴女紳士が、食卓を圍んで、思ひ〳〵の料理を注文して、飲んだり、食つたり、話をしたり、笑つたり喊に眠かなとでゐる。彼處に二人で食つてる貴女は誰れかと聞くと、某所の何某女優、其處に居る白髮の老人は……ヘラルド新聞記者某。十八九の窈窕たる美人は……何々孃といふ有名な音樂師、今コツプを持つた紳士は……何某の小說家。曰く某政治家、曰く某美術家、曰く某哲學博士、曰く某與行人、曰く某俳優と、目に映ずる滿堂の貴女紳士は、盡く當世知名の人々で、ソシテ皆其處の倶樂部員といふとです。實に盛なものぢやありませんかー、

▲紀念の德利

（知名の人々のもの）

食堂の周圍を見ると、銀色燦爛としたものが並んでゐる。何かといふと、皆ンな錫の德利で、夫れがズラリと並列でゐる。其中には酒でも這入つて、勝手に注いで呑むやうにでもしてあるのかと思ふとさうぢやない、皆此處の倶樂部に來た知名の人が飲んだ德利で、態々紀念の爲に取つてある。ソシテ其德利には、プースの飲た德利だとか、某名優のだとか、某文學者のだとか、一々名前が彫りつけてあるのです。

▲食堂の柱にプースの落書

（酒は飲むべし酒に飲まるゝ勿れ……）

此プースといふ人は、餘つ程酒好きであつたさうです。食堂の柱を見ると、醉拂つて落書をしたのがある、其文句の意味を日本流に直すと、「酒は飲むべし酒に飲まるゝ勿れ、酒を飲むは氣を養ふなり、氣を養ふは社會の爲なり、社會の爲には飽くまでも飲むべし、飽くまでも飲みて飽くまでも盡くせ」といふやうなことが書いてある。是れは今日に至るまで、此の食堂の金科玉條として、大事に保存されてある。

▲プースの遺德

（追想しない者は無い）

プースが平生勉强して居た書齋や寢室が、生きて居た當時のまゝ保存されてあるのみならず、自ら建設した俳優倶樂部が、此の如く益々盛大であるのは、プースのために高大な紀念碑や立派な石塔を建てゝ、其功德を吹聽するよりは幾層倍偉大な勢力を持つて居る。幾多の倶樂部員――政治家や、實業家や、俳優や、文學者や、興行者や、日々踵を接して出入する倶部樂員――書齋を見、寢室を見、食堂に飲食し、玉突場に遊び、書籍館に入り、新聞縱覽所に入る倶樂部員は、目に觸れ手に接し耳に聞く毎に、何に彼につけてプースの生前を思出さぬものは無い。演藝の技量に於ては、元より老プースに及ばず無かつたにしても、彼れが米國梨園社會の爲めに貢獻した、種々の功業を追想しないものは無い。

▲初て俳優と上流貴紳の交際を開く

（プースの偉功）

殊に米國でもプースの死ぬる少し前までは俳優の位置は餘程低くゝて、今日のやうに勢力も無ければ、尊敬も受けて居無かつた。詰り米國の河原乞食視せられて居たのを、弟プースが心外に思ふて、此俳優と上流の貴紳との間に横はつて居る關門を打破つて、双方の交情を疎通して、學者の卓論も聞き、此方の意見も聞いて貰らひ、互ひに切瑳琢磨して行かなければ、演劇の改良も覺束ないし、俳優や興行人の位置を進めるとも駄目だといふ處に感付いて、此俳優倶樂部なるものを其の機關として建てた結果、プースの考へ通りになつて、今まで交際場裡から疎外されて居た俳優は、貴女紳士と同等の地位、寧義望さるゝ地位に立つて、食卓を圍んで、自由に飲食談笑して、文藝技術の論を上下するやうになり、貴女紳士等も、男優や女優と交際するを一つの名譽とするに至つたのは、誰れの御蔭でも無い、全く弟プースが斯道の爲めに貢獻した結果ですから、梨園社會は固より、あらゆる技藝社會からも神樣のやうに尊敬されて、居るのです。

▲プースの地位に立つべき人は市川團十郎

（今からでも奮發して貰らひたい）

日本ぢや何かと云ふと、俳優風情がと一口にゲナシて仕舞ふ、コレハ昔からの習慣とまだ藝術家を尊敬するまでに進歩しないから仕方が無いが、飜つて俳優の方を見ると我々に至るまでドウモ風情がと言はれさうな奴許り、併俳優風情で、此優ウッチャッて置けば、矢張俳優風情で終はつて仕

舞ふから、日本の國柄相當、今日の時勢相當に俳優倶樂部見たやうな物を拵へて、双方とも頑固な考へを捨てゝ少しづゝ交情疎通の方法をつけて行きたい、進歩の仕方も餘程違ふだらうと感じました、日本で今デースの地位に立つて、斯んな仕事をする程の勢力ある俳優と言ッたら、差詰め市川團十郎其人より外にはありません、今からでも一つ奮發して貰らひたい位です。

▲紐育の出發

（愈々米國の舞臺を打揚げて英國倫敦に向ふ）

紐育の滯在で、いよ〳〵亞米利加の舞臺を打揚げて、英國倫敦に向ッて出發をしたのは、昨年の四月廿八日で、ニヘニヤ號といふ汽船に乘込みました紐育へはモ少し滯在をした方が、此方も儲かつたし、興行人も頻りに引止めたのですが、前にお話を致した通り、折角アーヴキング男が紹介狀も書いて呉れたし、我々も倫敦では一花咲かせて、夫れから巴里の世界博覽會へは、是非とも間に合ふやうに行ッて、結尾大に振ひたいといふ考があるのですから、サウ同じ處にばかり戀々として居られない。「モウ一週間打ッて呉れゝば、是れだけの給料を増すからといふのを、トウ〳〵振切ッて出發をしたのです。

▲我々の過ぎ越し方

（桑港以來の失敗はドウデス！）

其時こそツンナ勇氣があつたのですが、我々の越方を顧みると、ドウです！　渡米早早桑港で大味噌を附けて、宿屋から放逐されて、物置小屋を借りて寢る、居留民から義捐芝居を演ッて貰ふ、仲間には分離說が起る、夫れをヤットの事調和して一座の生命を一人で背負つて超つ、愈々失敗したら鐵夫かボーイにならうとまで決心をする、望みの綱として趕ッて行ッた市俄高では餓死をしやうとしてアノ通りの困難、其時の事を思ふと、見られたザマでは無い、賺にも人が給料を増して遣るから、働いて呉れと願まるゝのを、振切ッて行かるゝ我々では無いのです、少し都合が好くなると人間は勝手なものだと、我ながら思ッた。

▲懷中に一片の反古紙

（是れが何千弗と物を言ふ）

都合が好くなッたと言ッて、別段大儲けをした譯でも無い、一座十三人ニヘニヤ號に乘込んで、倫敦に着いた時は、運船賃や船中の費用が莫大で、大方夫れに遣ひ果したので、私の財布にヤ殆んど殘ッて居ないやうな始末。シカシ氣は何處までも大きい、今ごろ一文無しの貧乏人でも、懷にや英國に大勢力あるアーヴキングの紹介狀を持ッて居る、是れが我々の萬人力で、私の手から興行人の手に渡る日になると、一片の反古紙が忽にして何千弗と物を言ッて、ソレに替はるべき力を以て居る、丁度是れから鍬を肩にして金山でも掘りに行くやうな心持がして、着いた當時は先づ夢中でもあつた。

▲倫敦へ行ッてお門違ひの亞米利加主義

（金も無く柄にも無い癖に）

加之我々市俄高成功以來、ポストンや華盛頓や紐育で、金は無くても、派手に贅澤に遊る事ば かり、見馴れ聞馴れて、殊に俳優などはしみッたれて居ちや、信用も尊敬も有ッたものではない、人事凡て金力といふ。一ッのプランシプルを覺えて、唐間ヒい了簡になッて來たから、倫敦へ行ッても中以下の宿屋へ燻ぶつちや居られない。苟も日本俳優として、アーヴキングの紹介で來たからにや、夫れ相當のホテルに泊まッて、興行人や俳優や其他の人々から、信用と尊敬を落さぬだけに、無い袖も振ッて見せたいといふ度胸になッて、停車場から上等の二頭馬車を驅ッて、意氣揚々と、オックスフォルドのチコドル、ホテルに乘込んだ。但し是れは私とお貞の二人だけで。殘りの者は他のホテルへ宿らせました。トコロが後になッて段々英國の風を聞いて見ると、國民は一般にケチな方で米國のやうに派手や贅澤を遣るのを好まぬ、梨園社會とて矢張同樣で、金遣ひは餘り荒くない。ホテルや珈琲店などに行ッて、切れ放れが好くて、比較的に持てゝるのは、案外にも日本人位なのものだといふのですから、我々は餘り金も持たず、柄にも無い癖に亞米利加の外見主義を、初發から振舞はすにも及ば無かつた、と後から窃かに後悔をした位ね。

▲アーサーデオシー氏の歡迎

（倫敦日本協會副會長）

我々が停車場に着いて、是れからチコードル旅館へ行かうといふ時に、アーサー、デオシー氏も態々歡迎に來て呉れました。此人は御存じの通り日本へ幼少い時分も來た事があるし、其後も再三遊つて來た人で、今は倫敦にある日本協會——九百何人の會員から組織ッて居る團体で、其處の副會長をして居ります。倫敦滯在中は別して此人の世話になりました、夫れからホテルへ着くと、我々がアーヴキングの紹介で倫敦へ乘込むといふことが前以て分かッて居るから、重なる興行人や關係者や、在留の日本人達が、交る〳〵尋ねに來て呉れますので、一時は目が廻はる程の忙がしさ。

▲サテ〳〵案外千萬。

（興行人のノシキな挨拶）

チコードル旅館へ二頭立の馬車で、日本の大俳優然と、懷中にや十千萬兩も有る顏をして、大意驕りで乘込んだまでは好かつたが、實際の處は持ッてるといふ程の金が無いから心細い。シカシ我々の紹介が尋常の人ぢや無いから、善は急げで、芝居の方は明日からでも、開けてくれる、芝居さへ開くと、前金ころ取れないが、一週間の後には相當の給料が這入るから、今少しの辛抱だと思ッて、興行人に談判ッて見ると、サテ〳〵案外千萬、今丁度何處の座も好い處は塞がッて居るから、二週斗りお待ち下さい夫れまではもッくり旅の疲れの御保養、方々の芝居へも御案内をいたしませうし、御見物もなされといふ悠長な挨拶。

▲虎の子より大事にしてゐた貞叔の臍繰金

（コレデ旅館の前金を拂ふ）

先方は悠長に構へて居ても、此方は氣が氣でならぬ、困ッたものだ、如何しやうかと言てる矢先へ泣顔に蜂で、他の一座の者が泊まつて居る旅館からは、此處一週間だけ、宿料を前金にして呉れといふ催促、幾何かと聞く、大枚二百弗！亞米利加を立つ時は、二百弗位ゐ何でも無かつたが、船賃が馬鹿に高かゝつたぢやないかと、今更愚痴を溢したつて仕方が無い、如何しやう、と一時頭を痛めては見たが、此の金の出先について少し見當が付いて來た、外では無い、先刻からお貞の顔を見てゐると、何かモヂ〳〵して居る、此奴亞米利加に居る時、市俄高以來二百や三百の腐緑金を貯めて居るに相違ない、私はチヤント其の懐を見抜いたから、モウ黙かない、『オイお貞、貴様は二百弗位ゐ持つてだらう、此場に及んで出さずんば有るべからずだ』と、トウ〳〵財布をはたいて、虎の子より大事にして居た二百弗を、目事に出させてコレヂ、前金の拂ひを濟ました。

▲二人の拂ひは如何にすえ？

（モ少し有るなら出して呉れ！）

一方の前金だけは是れでヤット濟まして、虎口を逃れたが、肝腎な我々二人の拂ひは如何する？また前金の催促は來ないが、早晩來るに相違ない。來たら何と挨拶をする？今に芝居が開くから、夫れまで待ッて呉れか！堂々と乗込んだ日本の大俳優先生が、百や二百の金で、足元を見透かされるやうでは、ザマは無いぢやないか、『オイお貞さまモ少し持ッてるだらう』？と其顔を見る、と何だか持ッて居さうです。『イヱあれッきりですよ、モありやしません』といふ顔付が、ドウモ持ッて居さうに見ゐる。『ナニモ已れ斗りの災難ぢやない、二人の惣面に關はる事だ、殘りがあるなら持ッてるだけ出して呉れ』、と泣くやうに頼んでも、中々出しさうも無い。

▲川上貞奴をユスる

（有りッたけ出して仕舞へ）

ドウしてもまだ持ッてると見込を着けたから、私や傍くまでも、出せ〳〵と強請ッて居ると、有繋の奴先生も往生をしたと見ゐて、癪て不愉快な顔を持上げて『いくら要るんです』と、トウ〳〵本音を吐き初めた。『いくらでも好い、有りッたけ出して仕舞へ、遊蕩をすにや及ばない』といふと、『いくらでもかくらでも、モ是れだけしさや無いんです』と、此度は腐緑巾着の底を叩いて、正直に投出して見せたのが、亞米利加の紙幣で、僅かに六十弗

▲細工は流々仕上げを見よ

（此處に一つの妙策）

少くも百弗位はあると思つたが、僅かに六十弗だから、此れッぱかしかと、實は私も呆氣に取られた、旅館の拂ひは、二人で一日二十弗とした處が、一週間百四十弗だから六十弗位では江海の一滴に過ぎない、何卒、コレだけ取つて置いて下さいと、差出す譯にも行かんのみならず、出せば却つて耻を掻くやうなもの、いろ〳〵考へた末『巧い〳〵、此處に一つの妙策がある』といふとお貞が『何ですッ？』と聞くから『細工は流々仕上げを見ろだ』と、其の六十弗の紙幣を、悉く英吉利の五圓金

貨に取換へて仕舞つた。

▲六十弗の鼻藥

（番頭さんコリヤ少しだ）

お貞は折角溜めた給料金を取られて仕舞つて、終始滅入つた顏をして居るから、危急存亡の場合にや、命も捨て無くちやならぬ二百や三百の金が何だ。今にシコタマ儲けるサといろ〳〵に慰め賺かして、私は取替へた五圓金貨六十圓を食堂に行く時ポケットに押込んで、部屋を出ると、階子段を下りる時、旅館の大番頭が上つて來る。『將棋を射ば先づ馬を射よ』といふ此方の軍略だから。行摺りに其番頭を呼止めて『オイ此りや少しだ』と贈揚にかまへて、ポケットから五圓金貨二つ摑んで與ると、頓首百拜といふ風に、非常に厚く禮を言つた。是れを手解きに、他の番頭に逢ふ度に、オイ少こしだ〳〵と言つちや、殘る金貨を、此度は一人へ五圓づゝ、二日の間に十人へ蒔いて仕舞つたのです、

▲鼻藥のきゝ目は目前

（揚句の果は夫婦喧嘩）

此蒔散らした六十圓が、番頭仲間に非常な勢力を持つて、三日目から下へも置かぬ待遇で、食堂へ行く時なぞは番頭が四五人も附添ふて、注意をして呉れる、足の下にムヅ〳〵する奴があるから、何をするのかと覗いて見ると、紙の紐が緩んだと言つて、一人の番頭が結んで遣つてる。萬事斯ういふ調子で、スッカリ番頭に持上げられて、いよ〳〵大きな顏をして居ると、向ふもスッカリ舘諸をされて、日本紳士は金を持つてると見たのか、一週間が來ても更に勘定を持つて來ない「モウしめたー我が計略いよ〳〵當れり、お貞如何だ」と自慢をすると、向は自分の金で意張られちや閊りに合はない、と殲に障つたやうな顏をして「明日は八日目だから屹度來ますよ」と今度はおどかしにかゝる『さうだ、今日で一週間だから、八日目にや來るかも知らんて、來るだらうか？』『來ますよ』『イヤ來ないだらう』の問題で、とう〳〵夫婦喧嘩まで始まるといふ騒ぎ。

▲今にも死刑の宣告

（ヤット枕を高うして寢られる）

いよ〳〵八日目が來た。今に死刑の宣告でも受けるかの如く、內心大戰慄で、樣子を見てゐると、番頭が來ても、頓首百拜で御用を勸める外、勘定の事なぞは、氣にも留めて居ない樣子。九日目は如何かと心配してゐると、此日も先づ無事。コウナレバいよ〳〵以てシメたものだ。今夜からヤット枕を高うして寢らるゝと、大安心をして、十五日目に芝居が初まつて、給料が手に入るまで、三週間許りの間、旅館で只飯を食つた。是れも六十弗の鼻藥の利目と、足元を見透かされ無かつた結果でもつたかと、我ながら計略の圖に當たつたのを誇つて居ました。

▲芝居の招待で馬車代の困難

（お貞、明日から病氣になつて呉れ）

此の苦しい中で、モ一ッ苦しかつたのは、旅館へ着いてから、興行人連から、毎晩芝居見物の招待を受けたとです。折角の招待へ行かない譯には行かぬ、行ッて芝居を見るのは有難いが、日本のやうに人力車といふお手輕な物がないから、矢張り二頭立位ゐの馬車に乘ッて、貴女紳士らしく出掛けなくちやならぬ、其馬車が無代では乘られぬ、一度の往復で、少くも七八圓位ゐは要かるから、好い氣になッて、毎晩行ッた日にや、馬車代ばかりでも、あがッて仕舞ふです。『斯う乘つちや迚も引合はない、オイお貞、明日からささま、病氣になッてくれ……迚も遣り切れない』と、四日目からお貞を病氣に拵へて、當分招待を斷ッて仕舞つた。

▲待ちに待つたる劇場

（漸く十五日目に開場）

旅館の勘定の前金に頭を痛めたり、健全なお貞を病氣に拵へて、芝居案内の馬車代を儉約したり、いろ〳〵苦肉の策を回らして待ちに待つた我々の芝居は、旅館へ着いてから、漸く十五日目に始ッた、劇場はコロチット座といふて、先づ倫敦の歌舞伎座です、此處で二週間續て興行をしたが、狂言は相變らず、我々が十八番の『醫者と武士』『兒島高德』『袈裟御前』抔を、盛に演りましたが、幸ひ亞米利加に劣らぬ好評を博して、二日目から大入を占めた。

▲狂言について亞米利加での經驗

（英吉利とは丸で違ふ）

トコロガ、此處に一ッ實際の經驗上お話をしたいのは、イッモ同じやうな事をして居て、觀客には餘り了解されない我々の芝居がです、矢ッ張り其の國々――其國柄に依ッて受け方が、大きに違ッて居るといふことを發見したとです。我々が此の英吉利に來る前は、桑港出立以來、紐育を出發するまで、都會でも演り、田舎でも演り、諸々方々を打ッて廻つたが、イッモ受ける狂言と、見物が喝采をする處は、販で摺ッたやうに極まッて居たから、外國人を相手にするのは大概コッが分ッて來たのです。英吉利へ行ッても此見當で行けば、大した外れもあるまいと思ッて演ッて見ると、亞米利加とは大きに相違して居る。亞米利加で最も受けた狂言は、案外受け無いで、餘り受け無かつた狂言が、大いに歡迎され、大いに喝采を博した、其國々に依ッて習慣、風俗、人情、嗜好の變はッて居るといふことは、元より承知をして居るが、實際に打つかッて初めて感じたやうな次第。

▲何故に天皇の爲めに忠義を盡すか

（「高德」について亞米利加での疑問）

其一例を擧ぐると、亞米利加で演つた時は『道成寺』や『左甚五郎』など、振事の多い狂言が最も喝采を受けて、京人形の幕切れなどには、七八回も開けたとがあつた、之れに引替へて、日本武士の忠君の精神を見せやうと思ッて、私が熱心に演じた『兒島高德』などは、見物の方で餘りドッとしない、甚しい奴は、高德は何が故に天皇を有難く思ふか、何が故に天皇一人の爲めに献身的の働きをするか、彼んな一人で以て馬鹿な眞似をしないで、充分兵を整へて、其上で戰鬪を仕たらよさ

ろうな者だ……なぜ人、色々の疑惑を抱き、色々の質問を起す。見物の過半には、ドウしても高德の精神、忠義の精神が分かり憎い。夫れだから一生懸命に演ッては居るものゝ、チッカラ奇が乘ッて來ない。此の中で、只喝采を博するのは、イッモ立廻り——柔術的の立廻りが僅かに機敏だと言ふ位ゐに止まつた。

▲サスガに英吉利は帝國なり

（高德の狂言が最も受けた）

之に反して、英吉利では、亞米利加で最も受け無かつた『兒島高德』が、最も歡迎されて、『左甚五郎』や『道成寺』は、受けたとは受けたが『高德』の狂言ほどに人氣が立たなかつた。忠君の事を仕組んだ狂言が、亞米利加で不評判で、英吉利で受けるといふのは、流石に國柄であると思ひます。我々日本臣民同樣、一天萬乘の皇帝陛下を奉戴いて、建國以來其聖澤に浴して居る英國臣民であるから、狂言の精神——高德の精神——忠君の精神が、チヤアンと分ッてゐる。分ッて居るのみならず、四圍敵の中に立ッて、天皇の爲に孤忠を盡して居る高德の一擧一動に熱心なる同情を以て見て居る。建國の精神はナルホド爭はれぬものだと、大いに感せざるを得なかつた。

▲一人の軍人ありて頻りに『高德』を喝采す

（衆曰く『ヤヤ、ニュース、アドヨヲル』だ〳〵）

或日例の如く『高德』の狂言を演じて居ると樓數で、一人で以て頻りに喝采をして居る者がある。見ると軍人です、然かも日本軍人です。周圍の西洋人は一齊に其軍人に觀線を注いで、甲騰ちと乙語ッて、日本海軍將官だ〳〵、と言ッて居るのが聞ゆる。誰かと思ッて居ると、幕になッてから、私を尋ねて來た人がある、即上村海軍少將で、先きから一人で喝采をして居た、日本海軍將官は此の人で有たのです。上村少將は下度我國から注文した朝日艦が出來上がつたので、ソレを受取りに、倫敦へ來て、少し仔細があッて、我々の芝居を見物に來られたのです。

▲他にまた一ッの譯あり

（上村少將の訪問については）

上村少將には此時が初對面ですが、外國のことではあり、態々逢ひにまで來て下すッたので、一見舊知の如く、御懇意になつた。其の御懇意になるに就いて、他にまた一ッの理由がある。其理由といふのは、抑日本出立の時、私とお貞とが短艇に乘込んで、横須賀の軍港に艇を乘入れた時です、取捕かまッて、新井少將の前に引摺り出されて遠洋航海の事について大氣焰を吐た時『此奴は狂人だと』まで言はれて、新井少將から懇々御說諭を喰つたとがある、其新井少將と上村少將とは非常に御懇意な仲です。夫故私を尋ねて下さつた、といふ譯では無いが、ツマリ新井少將から私の身の上について、上村少將まで御手紙が來たといふのです。

▲不思議の縁

（意外の消息）

不思議な御縁で、色々御厄介になッた人から、外國の果に居る私の身の上に就いて、態々手紙が來たとの、お話ですから、私も意外に思ッて、上村少將に其仔細を聞くと斯うです。私共が新井少將の說話を聞かないで、トウ〳〵亞米利加まで乘出して、倫敦まで遣つて來た處が、惡事千里を奔るの譬で、故鄕の日本で噂をされるのは、十に八九は失敗談ばかりであるから、新井少將も『ソレ見た事か、己れの言ふ事を聞かないで、行つたもんだから……今頃は倫敦で如何して居るか……定めし好結果ではあるまい……』と、御親切にも我々の事を忘れずに居て下すッたものと見ゐる。夫れだから、川上等が若し倫敦で困窮して居たら、見殺ろしに仕ないで、軍艦を受取ッて歸へる時、ボーイにでもして、日本へ連れて歸ッてくれ……と斯ういふやうな御手紙が上村少將まで來たので、上村少將も兎に角如何いふ芝居をして、如何いふ景氣であるか見物をした上のことにしやうと、言ッて態々見物に來て下すッたのです。スルト幸ひにして芝居の評判も好し、景氣も好し、狂言も日本の忠臣の事を仕組た『兒島高德』であるから、上村少將も、覺ゑず頻りに喝采をされたといふ譯である。

▲新井少將の厚意

（偶然の事で御目にかゝッて）

新井少將の御厚意には、實に私も感謝しました。只偶然の事で御目にかゝッて夫れ程まで心配をして下さるのかと思ッて、上村少將まで深く御禮を述べました。元より困窮をして居れば、一も二も無く軍艦の御厄介になる處でしたが、段々運が向いて來る矢先で、丁度ウエールス親王殿下（今の英國皇帝）から、我々の芝居を上覽の御沙汰もありましたから、其上覽の濟んだ後、萬一歸國するやうな事になれば、御厄介を願ひますと言ッて、上村少將とはお別かれをしたのです。

▲空前の紀念、絕後の名譽

（我々一座に取ッて）

此處に我々一座が歐米漫遊中、我々一座に取ッて、空前の一大紀念、恐くは又絕後の一大名譽として、充分御自慢をしたいのは、拙藝ながら我々の芝居が、ウエールス親王殿下（英國今上皇帝）の御上覽に預つた一事です。（亞米利加で、大統領や國務卿の前で芝居を演つたり、演說をしたりしたのも、紀念の一ッ、名譽の一つ、且自慢話しの一つとして居りましたが此の殿下の上覽は、夫れ處では無い、我々が凡ての紀念、凡ての名譽、凡ての自慢話の上に冠すべき一事かと思つて居るのです。）

▲ウエールス親王殿下上覽の御沙汰

（夢かと許り驚き且つ喜んだ）

元より親王殿下の御上覽に預からうなどゝは、夢にも期して居なかつた。處がロセッタ座を打揚げた最終の日に、宮中から御使者が立て、川上、貞奴一座のとは、今度ウエールス親王殿下の上聞に達して、辱くも上覽になるといふ御沙汰が下つたから、早速に御受けをしろ、と斯ういふ御內命

○私夫妻を始め座員一同は此意外にも歴い御内命に接して、殆んど夢かと許り驚き且喜んだ。ウエールス親王殿下と申せば、今ころ皇太子殿下であるけれども、女皇陛下萬歳の後は、皇帝の位に即いて、大不列顛國を統御し給ふべき一天萬乗の御君である、其御方から我々風情の演藝を、態々上覧になるといふ難有い思召しであるから、我々一座は窮き且喜ばざらんと欲するも得んやです。

▲バッキンハム王宮に日本の舞臺

（舞臺の雛形を出せとの御沙汰）

上覧になる一事さへ、既に此上も無き難有いとであるのに、場處は何處かといふと、バッキンハムの王宮、苟くも王宮とか離宮とかいへば、日本でなら、我々風情が、鰲鉢立をしても、拜むとさへ出來ない處である、其尊い王宮へ一座を御招待になるといふ次第。加之倘一層難有い思召は、上覧になるについて、一座の爲に宮中に舞臺を拵へて遣る……其舞臺も、一座の演藝に不都合を來さぬやうに、一座が踊り好いやうに、望み通りの舞臺、即日本流の舞臺を拵へて遣るから、受書を出すと同時に、舞臺の雛形を出せ、と斯ういふ御沙汰であつたのです。

▲日本流の花道附の雛形

（身に餘る恩命に甘へて）

何から何まで言語に盡し難い、身に餘る御恩命に甘へて、早速に受書も認め、舞臺も遠慮なく日本流の雛形花道附の雛形を拵へて出すと『よろしい、舞臺は雛形通り、宮中に於て早速建築に取りかからせる、殿下の上覧は今日より一週間乃至十日の中にあるから、其積りにて、萬端準備を整へ置け』といふとである。宮中と私との間に立つて一々通辯の勞を取つて、御沙汰を傳へて、專ら奔走をして呉れた人は、先きに御話をした、日本協會の副會長アーサー、デオシー氏で、宮中上覧の時、殿下の左右に侍つて、親しく御先導を申したのも此人で、中々の大役であつたのです。

▲芝居の中止を命ぜらる

（禁を破つて引受人の大狼狽）

御受けをした日から、上覧のあるまで——一週間乃至十日ばかりの間は、謹心申付けられたと同様に、我々が芝居の興行は、一切中止をされて仕舞つた。是れは何故かといふと、彼地では皇族方の御案内は、大低一週間か十日以内にあるので、其間に構はず興行をして居ては、親王殿下から御招待を受けた、他の貴族の中に、段々見る人も出來て、折角の御馳走が御馳走にならなくなる。處が其間に一夜日本協會で何か催しがあつて、一寸踊りだけでも演りに來てくれ、といふ依頼であるから、劇場でさい無ければ、一寸位ねは好いだらう、と出かけて行くと、上覧についての擔當者が、此事を開出して、若し新聞にでも書かれて、宮中に知れたら大變だと、八方の新聞社へ電話で以て、今夜の日本協會で演つた、川上等の演藝の模様は、明日の新聞に書かぬやうにしてくれと大狼狽をして頼み込んだ。

▲我々一座の醜珍隊

（フロックコートにシルクハット）

さういふ始末であるから、退屈な時は、市中の見物でもして、旅館へ燻ぶッて居るといよ〳〵上京の御日取が遣つて來た。（忘れもしない昨年六月二十七日の夜であッた。サテ我々一座がバッキンハム王宮に乘込むについて、差當り必要なのは、禮服です、其禮服も正式なら燕尾服で無ければならぬのですが、時日は無し、ソシテ一度しか入用の無い燕尾服を、態々莫大の金を出して拵へるのも迷惑な話であるから、已むを得ずフロックコートにシルクハットといふ打扮にした。亞米利加に居る時は、とう〳〵脊廣で押通したが、英國に來てから、漸と揃ひのフロックコートを拵へて居たから、是れには狼狽かなかッたのです。フロックコートを着たまでは好かッたが、シルク、ハットなる物を始めて冠つて、一座が旅館を押出す時の樣子と言ッたら、帽子の高サと脊の高サが同じ位な者計りだから、丸で圓珍のポンチ畫だと、大笑ひをしたとです。

▲王宮御庭先きの日本舞臺

（注文よりか幾百倍も見事！）

一座の圓珍隊は、二十七日午後五時といふに、いよ〳〵バッキンハム王宮に乘込んだ。一座の爲めに建てられた日本流の舞臺といふのは宮中の圓ある御庭先にある。表の屋根はテント張りになつて居るので、一寸見ると野戰病院の臨があるけれど、裡に這入つて見ると、其構造や裝飾の、贅沢し美麗して、我々が注文の無慾よりか、幾百倍も見事に出來て居るには、實に一驚を喫せざるを得なかつた。先づ大体の御話をいたすと、其舞臺の構造は、廻り舞臺ころないが、固より期んな面倒なとは、此方から注文もしなかつたが、大道具小道具から、浮瑠璃の床、囃子方の居る處や、何から何まで殆んど遺憾無く日本流に出來上つて、我々が注文の第一目的たる花道も附いて居る。舞臺の柱や天井やなどは、一面緋天鵞絨で張詰めてあつて、ソシテ無數の電氣燈が、花の咲いたやうに點いて、柱には、金鍍の釣燈しが、方々にキラ〳〵光つて、上には釣枝もある、松の釣枝もあれば、櫻の釣枝もある。

▲見物席の上に電燈入りの岐阜提灯

（態々巴里まで買ひに行く）

斯ういふ風に、舞臺には、萬事日本趣味が溢れて、海外萬里の異郷にある我々には、嬉しく懷かしく思はれた上に、見物席の上を見ると、無數の提灯、しかも日本から來た岐阜提灯が、丁度寶出しの店のやうに、金線に吊して、縱横に引張つてある、其提灯には、蠟燭の代はりに、小さい電氣燈が點つて居るのだから、夜の光景は、舞臺の裝飾と相待つて、親王殿下を始め綺羅を飾れる貴女貴紳と相待つて、只目も眩ひばかりの美麗で、我々は只呆氣に取られた、此の岐阜提灯は、場内の裝飾用として、態々巴里の世界博覽會へ行つて、日本の店から買集めて來たといふとですが、是れを見ても、掛りの人達が、如何に意匠を凝らしたかといふことが分かる。

▲劇場の入口に騎兵と憲兵の警護

（敵軍重圍の中にあるやうな）

我々が樂屋へ繰込んだ時は、儀式の服を着けて、盛裝して居る大勢の憲兵が、劇場の周圍を取卷いて、正面には近衛の騎兵が、一小隊ばかり、馬の手綱を控へて、銃を捧げて嚴かに警護をして居る。一同は其警護の中を通りて徐々と樂屋へ這入つた時は、敵軍重圍の中に在つて、演劇をするやうな心持がした。

▲樂屋の完備せると

（假りの劇場と思へぬ）

樂屋に行つて見ると、此處のまた奇麗な事完備して居る事、日本一の歌舞伎座の樂屋は、殆んど乞食小屋かと疑はれた位ね。宮中の御仕事とは言ひながら、僅か四五日の中に建てられた劇場、――しかもタッタ一夜二三時間許りの演藝に供される爲に建てられた、假の劇場に、化粧室がある、食堂がある、便所がある、出張して居る宮内省官吏の控處がある、飲食器物の類に至るまで、樂屋に入用の道具は、何一つ備つて居ないものは無い。其用意周到な事、ソシテ其待遇の鄭重な事、只贈を贈すの外は無かつた。

▲頭髪は漆喰細工か大理石の彫刻か

（食堂の給仕は白髪の青年）

兎角する中、最早夜になつて、是から晩餐の御饗應があるといふので、一同樂屋に設けてある食堂に行つた。夫れ〳〵設けの席に着いて、チンと長まつて居ると、ボーイが十四五人も附いて給仕をする。ボーイといつても、宮中の事であるから、只のボーイでは無い、皆宮内省お雇ひの役人達で、頭の髪は漆喰細工か大理石の彫刻かと疑はれるやうに皆ンナ眞白にして居る。其白いのは白髪でも無ければ、生れつきの白子でも無い、御承知でせうが、英吉利の宮廷に仕へて居る役人は、地髪を出すのは不敬であるといふ、昔からの儀式に從つて、白く塗つてるので、私も話には聞いて居りましたが、見たのは初めてゝあるから、頗る不思議に感じた。話にも聞いたとの無い座員の中には、宮内省の役員は、白髪頭の老翁に限ぎるのかと、怪しんだものもあつて、後で大笑ひをした。

▲正客の我々がフックコートで給仕の役人が燕尾服

（聊か汗顏に堪えなかつた）

頭の髪の白いのを不思議がつたまでは、夫れで好かつたが、其給仕先生達の服裝を見るに及んで、聊か汗顏に堪えなかつた。ソレは正客たる我々こそ、尋常一樣の場合でないから、堂々たる禮服を着けて居なければならぬのに、我々はフックコートで、給仕は盡く燕尾服を着けて居る。服裝の違ひから言ッたら、フックコートの我々は、燕尾服の彼等に向ッて、反對に給仕をせねばならぬ筈であッた。

▲名も知らぬ珍味の料理

（喰ひたいけれども手はつけますまい）

食卓の上には、美酒泉を堪ね、珍味山を築くといふ有様で、満腹には彼れも飲みたい之れも喰ひたいと思つたが、山家育ちの悲しさには、美酒珍味に馴れて居ないので、如何して飲んで好いか、如何して喰ッて好いか、頓と勝手が分からぬ。我々も一年近く亞米利加の土を踏んで、倫敦へも、早三週間以上滞在をして、三度〳〵フォークとナイフを握ッて命を繋いで居たから、料理や酒の好悪について、多少は通を通るやうになッて來たが、此の宮内省の御馳走には隨分まゐッたものが多かつた。中には料理の皿を目の前に控へて、頻りに思案をして居たが、私の顔を見て『喰いたいけれど手は付けますまい』と握ッて居たフォークとナイフを如何にも残念さうに下に置た。

▲來る程の珍味を盡く睨み遣り

（プーンと鼻に來るシャンペンに咽返る）

斯かる有様で、皆んな喰ッて見たいのは、山々であッたけれど、喰ひ方が分からぬのと、一口喰ッて吐出すやうな、不体裁があッてはと恐入ッて、食卓に向ッて、躊心の態度を取ッて、料理を睨んだまゝ差控へて居る者が多かつた。折角御馳走の珍味も、僅かに睨まれた許りで、情けなくも給仕等の手に引下げらるゝと、癪て又次なを珍味と差替はる、是れも大膳に手をつけて見るのは、私と三四人位ゐの者で、矢張り睨通ッて仕舞ふ連中が多かッたので、日本の紳士は大相御上品で居らッしやる、と思ッたのか如何だか分らぬが、兎に角給仕等は不思議な顔をして、時折我々を眺めて居た。珍味の料理にも隨分手古摺ッたが、酒も怪しいやッは、手を付けざるに如かず、といふ方針を取ッて、僅かに葡萄酒、ビール、三鞭位ゐに止めた。しかし三鞭でも、是迄平生飲んで居た三鞭ぢは雲泥の違いで、盃を口の處へ持ッて來ると、飲まぬ中から、プーンと鼻へ來て、皆んな咽返ッて仕舞つたやうな騒ぎ。

▲遙かに聞ゆる奏樂の音

（アレガ殿下のお出）

食堂は右のやうな滑稽の中に終つて、夫れから一同化粧部屋に引下がつた。幕明は十時といふのに、夫れ〳〵芝居の準備に取かゝつて居ると、癪て劉喚たる音楽の聲が、遙かに聞ゆて來た。其音楽は一秒一分毎に段々と近づいて、最早手に取るやうになつたかと思ふ頃、アーサー、デオシー氏があわたゞしく遣つて來て、彼の音楽が親王殿下の御入りである、御着席と同時に、直に幕を明けるやうにといふ催促だから、日本流を極込んで、開場時間に少しでも遲くれては、第一親王殿下に對し牽つて恐多いといふので、夫れまでスッカリ準備をして、時間通り幕を明けた。

▲親王殿下の御席頗る危險

（少も構はぬ遠慮無くやれ）

幕を明ける前に、御着席の模様を窺ふと、舞臺の正面に、最も接近して居る第一着が親王殿下で、其次が多〳〵の公子公女方、以下勳爵の等級に應じて、綺羅を飾れる大勢貴女貴紳が、スラリと席を正して、其上には例の電燈、赫灼たる岐阜灯提が、星かと紛ふばかりに吊してある。トコロが恐

多いのは親王殿下の御席で、餘り舞臺にくつ附き過ぎて居るから、「高德」の立廻りに萬一刀の先でも折れて、飛んだ時には、夫れこそ一大事であるのみならず、殿下の直ぐ御面前で、演ずるのは、我々一同恐縮に堪ないから、舞臺とはモ少し離れて御座を直すやうにと、デオシー氏に願ひと、氏は聽て殿下の御意を伺つて來て『少しも構はぬ、遠慮無く演れ』といふ上意である。殊に貴顯の御席は彼處より外に無いといふことであるから、致し方無しに、其儘幕を明けたのです。

▲二度と踏まれぬ晴れの舞臺

（藝の有りッたけ、力の有りッたけ）

我々は此の後、二度と再び、斯ういふ晴れの舞臺――名譽の舞臺を踏むとは無いと思ひ、且は親王殿下を始め奉り、貴女貴紳方にも、我々の拙藝が、聊にても御意に叶ふて、日本の演劇は面白いものであると、後で御話の種にもなるやうなら、一座の面目此の上も無いとで、何でも今夜が我々の一世一代で、眼途の土産になるとであるから、藝の有りッたけ、力の有りッたけ出して、蕪瀬の釜の破裂するまで、演ッて〳〵演りぬけといふ、一座の意氣込みは、實に盛んなものであッて、此の勢ひで以て、開幕第一に演じたのが十八番の『見島高德』。

▲何等の拍手、何等の喝采も起らず

（誠に心外千萬！）

前にもお話をいたした通り『高德』の狂言は、亞米利加では餘り受け無かつたのが、英國に來てから、我々の出し物の中で、最も喝采を博した忠君の狂言であるから、親王殿下の思召にも、定めし叶ふとであらうと、かう豫期して、内々得意で上覧に入れ奉ッた處が、幕が閉まるまで、場内唯然として、何等の拍手の音、何等の喝采の聲も起らぬ。昨日まではコロチット座で、滿場の見物に舞臺も揺がんばかり、歡迎されたのに、引替へて、場内水を打つたやうに靜かである！誠に心外千萬に思ッた。

▲殿下の御意に叶はざりしか？

（どうも心配で堪りません）

此の狂言ごろと思ッて、大車輪になッて演じた狂言に、拍手喝采の起らぬのは、殿下の御意に叶はなかッたのか知ら？。如何いふものかと、内々思召のほどを心配しつゝ、楽屋に引下がると、欣然として進ッて來たのが、例のアーサー、デオシー氏である。私は突然、デオシー氏に向ッて『殿下の思召は如何です？、拍手も喝采も無かッた處を見ると、餘り御意に叶は無かッたと見ますなゝ、ドウモ心配で堪りません』。

▲拍手は宮中の禁物

（扨はサウかと始めて安心）

デオシー氏は欣然たる顏に、益々喜びの微笑を湛へて、『イヤモウ御意に叶つた處では無い、非常の御滿悦である。ナニ拍手が起らぬ夫れは頗る考へ違ひで、拍手は宮中の禁物である。たとへアーヴ

ヰンケの芝居を御覽になっても、拍手といふとは一切無い其證據には、禮式の一ッでもあるが、上覽の御供をする人々は問違ッても拍手をしてはならぬやうに、堅く手袋を穿けるとになッて居る」、といふデオシー氏の辯解。扨はサウかと、其譯を聞いて、我々は初めて安心をした。

▲樂屋のテンテコ舞ひ

（直に次の狂言に取りかゝれ）

デオシー氏は、御我々に向ッて「一体殿下は大相御短氣の御性質にあらせられて、感國々々するのが大の御嫌であるから、直ぐにも次の狂言を出すやうに……餘り幕間が長いとか、狂言が面白くないとか思召して御機嫌に障はると、芝居を演ッてる最中でも、アイと席を起ッて、御歸りになるとがあるので、從來お供の人々屢々困ッた例もある。ナニサマ直に幕を明る準備を……」といふ催促であるから先づ一吹と思ッたが、ソレ處の騒では無い。然らばといふので衣裳を脱ぐ、直ぐ他のを着ける。鬘を取る、直ぐ他のを冠ふる。白粉を塗り直す、眉を作り直す、ソレ紅だ、ソレ青だ、ヤレ何んだ被んだと、樂屋は一同テンテコ舞ひ。丸で新參の兵隊共が、鍵込みに非常召集を喰ったやうな。

▲幕間僅かに二分間

（我れながら其敏速に驚いた）

煙草だ、茶だのと、悠長に構へて居れば、幕合に一時間以上を費やすとは、何でも無いが、デオシー氏の注意で、萬事兵式的に、非常召集的に遣ったので、「高德」の幕が開まってから、次の狂言の幕が明くまで、其間二分間で以て、スッカリ準備をして仕舞った、即幕合僅かに二分間で、次の狂言を出すとが出來たのは、我れながら其敏速に驚いた。爾來日本の芝居も、斯ういふ風に兵式的に行くと、見物も何れ程助かるか知れない。

▲稍歌化せる道成寺

（純日本流では迚も受けぬ）

二番目狂言は、例の「藝者と武士」で、上半に幇間をくっ附けたお眞の道成寺。此道成寺といふのは、團十郎や九女八の演る道成寺と思ふと、大きに違ふです。と言って同じ外題の新狂言を拵へた譯では無いが、幇間との聯絡を附ける上から、多少の改訂も施し、又外國人に見せるといふ點から、所々增補省略をした處もある。此れに就て私は考へたのです、如何に指す手、引く手が巧妙でも、外國人には、一擧一動について居る唄の文句や、言葉の意味が分らぬから、べんべんだらりと、何時迄でも悠長に踊ッて居た日にや、團十郎でも九女八でも外國ぢや迚も受ッては無い。何でも、べん〳〵だらりを、さし〳〵省略ッて、早く埒が明くやうに、目先が變はるやうに、飽きが來ぬやうに、迅速機敏な仕掛で演るに若かず、と斯ういふ方針を以て、增補省略を試みたのですから、日本で演ッたらテコ變なものでせう。トコロが幸ひにして、此方針が當ッて、亞米利加でも、倫敦でも、此テコ變な道成寺が、一般に受けて、私の「高德」などは、見物の品によッて往々顏色が無かッ

た。殊に巴里に行ッてからは、スッカリ『貞双』に天下を取られて仕舞つた譯です。

▲圖らざりき拍手の音!!

（コレは又ドウしたもの?）

サテ『高德』の次に此の『道成寺』を出すと、滿場は例の靜肅と沈默に葬られて、何等の音も何等の聲も起らぬ。我々は此の靜肅なる舞臺の上で、一齣又一齣、着々演じ去ッて、後半の道成寺まで行ッた、此處でいよ〳〵落入りを見せて、最終の幕を閉めると、其幕切れになッて、パチ〳〵〳〵と滿場拍手の音が起ッた。宮中の禁物と、たッた今デオシー氏が言ッた、拍手の音が起ッた。しかも驚んに起ッた。コレはまた如何したもの……。

▲デオシー先生に一杯喰はされしか?

（イヤ今のは破格の拍手）

「何の事だ!宮中だッて矢ッ張り拍手はあるぢやないか、デオシー先生、如才無くも一杯我々に喰はしたな」と思ッて樂屋へ引下がると、驚て腹を抱へて大急ぎで遣つて來たのがデオシー氏である「今の拍手は如何したものです?」と一本まゐると、デオシー氏は、可笑しさと嬉しさとが胸にこみ上げて居るといふ風に「マア聞いて下さい今のはアリヤ破格の拍手です。殿下から禁を破ッておれ拍ちなされたので、皆んながお相手をしたのです。彼んなことは滅多に無い、殆んど今日が始めてである、お喜びなさい」といふことである。サテは今の狂言が斯程まで、殿下の思召しに叶のたのであるかと、我々はデオシー氏の、一言を聞て天へも上る心持になッて、只感謝の涙に咽んだ。

▲川上夫妻殿下に拜謝を仰付けらる

（例の御短氣……大急ぎ〳〵）

デオシー氏は、態々拍手の辯解に來て、倉皇として後へ引返へしたが、又飛ぶが如くに遣ッて來て、今殿下から、私とお貞の二人に、拜謝を仰せ付けられるから、大急ぎ〳〵といふ注進。エ殿下へ拜謝を仰付けられるのですか?」と此方は夢かと許り、呆氣に取られて居ると「モウお歸りだからさうトボケて居る間は無い、例の御短氣……片時も早く、大急ぎ〳〵」とデオシー氏は、追立てるやうに傍から躁ッて居るけれど、私もお貞も、今舞臺から下がッたばかりで、顏も着物も其儘であるから、直ぐにといふ譯に行かぬ。「マア待ッて下さい、今着物を着替へますから……」と、ヤッと一分間許りの猶豫をして貰ッて、私はフロックコートに着替へ、お貞は裾模樣の着物に錦襴の帶を、立てやの字に締めて、デオシー氏の案内で、倉皇樂屋を出て行ッたのですが、實に此時はどトチレたとは無い、舞臺の汗はまだ顏一杯だら〳〵流れて居るのに、夫れを拭いてる、隙も無つたのです。

▲一歩々々死刑臺に近づく如し

（命の綱と頼ひデオシー氏）

是さ邊り、しかも外國の親王殿下から拜謝を仰せつけられるといふとは、我々下賤の身に取りては

、此世に生れて初めていあるのみならず、今が今まで夢にも豫期して居ないとで、不意を喰ッたのであるから、トチレるのも、狼狽てるのも、實に無理は無かつた。其上禮儀作法も分らず、通辨はあるにしても、貴顯に對する口の利きやうも知らないから、御前に出たら、二人の身体を如何處分して好いのか、有難いも辱いも只夢中で、一歩〳〵死刑臺にでも近くやうな氣持がして、戰々兢〳〵と、デオシー氏の尻へくッ附いて行くと、何時の間にか、吾々二人は、殿下を去る、一間許り前の處に引出されて、命の綱と頼むデオシー氏は、其傍に立ッて、殿下に何やら御紹介の言葉を述べた。

▲殿下川上夫妻の手を握り給ふ

（予も非常に面白く見物をした）

恐る〳〵殿下の御顏をお見上げ申すと、御年は、早や六十前後でもあらうか、御短氣、御性急の御方と話に聞いてゐるとは、大違ひで、其容貌は謹にやさしい御方で、滿面に微笑を含ませられて、ズット椅子をお立ちになッた。如何なさるかと、我々は只管恐入ッて居ると、癒てッカ〳〵と、我〳〵の方へお出でになッて私の手とお貞の手を、左右の御手でグットお握りになッて、グイとお引張りになッた。我々はハッと驚いたが、只其爲さるまゝにして居ると、トウトウ御座の傍まで御引寄せになッて、デオシー氏を經て、色々有難い御言葉を頂いた、其言葉の中に、

「兩人とも大相骨折で、予も非常に面白く見物をした……隨分疲勞をしたであらう……貞奴が踊つた時の髮の毛は、長く黑く美事なものであッたな、……オ、彼れは髮を短ッて居つたのか。是れから佛蘭西へ行くさうであるが、直ぐに又歸ッて來い、くたびれたらう早く休息をせい……。」

▲拜謁濟みての退出

（階子を後向きに劍の刀渡り）

一々心魂に徹する、有難い御上意に、恭しく御答辭を申上げて、御前を退いた、御前を退く時は矢張日本の禮式と同樣に、殿下の方を向きながら、一歩〳〵後へとじさッて、花道にかけてある階子を、是れも、後しざりに上ッて行くのです。トコロが私は洋服を着て居ッたから、好かッたが、お貞は、裾摸樣の長いヤッを引摺ッて居たから、後じさりが中々六ケ敷い、萬一裾を踏んで、仰向けに顚倒へりでもしちや、天下の醜体を演じて、名譽ある日本女優も夫れッ切りだから、注意に注意をして、後退を遣つて居ると、殿下はイッまでも、ヂイトと見て居らつしやるので、いよ〳〵極りが悪くて足取りが危くなる。階子を上がる時なぞは、モウ今にも轉びさうで、其の危險サ恐サ兜然劍の刀渡り！

▲樂屋は休息の寢室

（王宮の御門まで騎兵の護衛）

殿下の拜謁、マッ怪我過失も無く、首尾克く相濟んで樂屋へ引下がッて時計を見るとモウ彼是れ四時を過ぎた、夫れから一同休息をせよといふとで、例の白い頭の役人連が、ガタピシやッて大きな

道具を樂屋へ運ぶ。何かと見ると、澤山の寢臺である。何から何まで鄭重なお待遇ではあると、益々殿下の御仁德に感泣して、一同其上に暫時休息をして、旅館へ歸つたのは、丁度夜も白々明ける頃であつたが、我々が王宮を出る時は、前にお話をした、劇場の入口に居る大勢の騎兵が、我々の前後を警護して、嘯々と王宮の御門まで送くッて來て呉れた。

▲二千弗の銀行手形

（殿下よりの下され物）

此處に一ッ大事なことを申し落した。夫れは何かといふと、此夜親王殿下から、辱くも我々一同へお禮として下され物を頂戴した一事である。丁度拜謁が濟んで、樂屋へ歸ッて居ると、其處の御使者が來て「親王殿下には、當夜足下等の絶妙なる演藝が、非常に思召に叶ッて、十二分の御滿足にて還御遊ばされた次第であるが、就ては、甚だ僅少ではあるが、殿下の思召を以て、足下等一同へ、御謝禮として、御下賜相成る故有難く頂戴をいたせ」といふ口上で、水引や熨斗は無いが、鯉魚の切手見たやうな、紙に包んだ物を、役人が差出した。何か分らぬが、殿下の下され物であるから、勿論容易な物ではあるまいと、有難く御受けをして使者の歸へるを遲しと、其紙包を開いて見ると紙幣でも無ければ何でも無い只一枚の紙片れである！實は百圓紙幣が十枚位ゐも這入ッてるか、夫れにしては少し目方が輕いやうだが、何だらうと思ッて開いたのが、一枚の紙片れであるから、オヤッと先づ驚いた。シカシよく〳〵目を拭ふて見ると、何ア圖らん此れが日本の百圓紙幣四十枚程の價値を以ッてゐる、非常な紙片で、即ち二千弗の銀行手形であつたのです。

▲金が命の旅の空

（頂戴の手形を以て直に銀行へ賣付ける）

旅は一文の金でも命の種、其命の種になる金を頂戴したのが、日本では四千圓といふ大枚の銀行手形。しかも是れが、一夜僅か二三時間位ゐ働いた、言はゞ其報酬として親王殿下から頂いたのであるから、正直なお話が、嬉しいやら有難いやら、實に手の舞ひ足の踏む所を知らなかつた。出來る事なら、此手形を包紙のまゝ、日本まで持ッて歸ッて「法螺で無い證據にや、是れを見て呉れ」と知己親族の實檢に供した上、額にでもして、子々孫々まで、家の寶として殘して置きたい、とまで思ッたが、金が命の旅の空で、しかも世界一の大都會の中央に居て、有れば有るで、儲かるほどの金は、旅の目から水が漏るやうに、どん〳〵減ッて仕舞ふから、一日だッて、此貴重の手形を遊せて置く譯に行かんので、旅館へ歸ると、此手形を持ッて、其朝直ぐに銀行へ賣付けた……。

▲兩の頬ッぺたを牡丹餅で叩かれる

（物事は斯う行かなくちや嘘だ）

人の一生は七轉び八起きといふ譬への通りで、我々が亞米利加に居た最初の間は、七轉び處では無い、八轉びも十轉びも轉ぶだけ轉んで、とう〳〵どん底まで落ちて了ッて、モウ所詮起つ瀬はあるまいと、觀念をした程であつたが、一度起き直ッて、運の札のメクリが利いて以來、實は如何かと

心配をした英吉利に來てからも、劇場の興行で喝采を博した外に、方々から貴紳富豪の優遇を受けて、遂に思ひがけ無くも、親王殿下の上覽にまで入れ奉ッた次第。實に我々座員が一生の面目、一代の好運は、倫敦に來てから、殆んど其頂天に達して、天下でも取つたやうな氣になッて居る。此處に又倫敦を打揚げてから、出來なけりや乞食でもして行かうと、亞米利加に居る時から、目的地と睨んで居た佛蘭西巴里から、我々一座を買ひに、倫敦へ遣つて來た。コレハまだ我々がコロチット座へ興行中……其最終日を興行中、親王殿下から上覽の御沙汰があッて、謹んで其受書を差出した、翌日のことであるから、兩方の頬邊を、一時に牡丹餅で叩かれやうな氣がして「物事は斯う來なくちや嘘だ」と、スル事ナス事鴻の嘴と喰ひ違つた、逆運い時のことは、モウ忘れて居た！

▲土一升金一升の巴里の目抜

（其處へ人集せの計畫）

巴里から買いに來たのは好いが、場所は何處だと聞くと、勿論世界博覽會。シカモ巴里町の目抜ともいふべき第一區たる其處に建ッて居る博覽會の大門を這入ッた最上等の場所で、三尺四方の借地代が、日本の金で六七十圓もする、所謂土一升金一升といふ最高價の處である。此の大門を這入ッた最高價の場所が、博覽會の見物人が、最も多く出入りをする處であるから、最も人目を惹くべき演藝、見世物の類ゐを集めて、此處で以て、先づ巴里市に、大金を落させやうといふ考へで遣つたが、金持の出品人共が、役人に賄賂を使ッたゝめに、下らぬ物が好位置を占めて仕舞ッて、最も注意を引くべき場所に、最も注意を引かぬ店が、澤山出來たので、折角の計畫も殆んど水泡に歸して、見物人はズン〳〵通り抜けて仕舞ふやうな不景氣を來した。

▲其目抜の博覽會へ我々一座の招待

（女優ロイ、フーラー嬢と一座の相談）

コレでは行かぬ、何か人集せになるものはあるまいかと、其筋でも種々熟議の末、ロイ、フーラーの電氣踊りを演ちせたら、此不景氣を挽回するとが出來るだらうと、斯ういふ相談になッて、商務大臣から、直接にフーラーを說いた。其結果愈々電氣踊りを演るとになッたけれど、サテ肝腎な劇場が無いのみならず、劇場を建つる地面さへも無いので、仕方無しに、折角建ッて居た博覽會の事務所を取潰して、此處に劇場を新築するとになッた。但し地面だけは、政府から特別の詮議を以て、土一升金一升の處を、無代で借して遣るもの、劇場建築費と電氣機械其他の道具は、フーラーの方で一切持つ、といふことに話が極まッて、昨今建築中である。即ち我々一座は、フーラーの新築劇場に乘込んで、フーラーと共に此の目抜きの場所に於て、世界博覽會の繞點となるやうに、大いに奮發をして見れるといふ頼みである。

▲女優ロイ、フーラー嬢

（電氣踊りの元祖）

此のロイ、フーラーといふのは、現今佛蘭西に第一等の勢力を持ッて居る女俳優で、巴里の中央に

ロイ、フーラー座といふ廣大な劇場を、自分一人で持ッて居る。年はモウ六十に近いお婆アさんですが、其の若いと、美しいと、また四十餘りとしか見ないスバラシイ美人であるが、いまだに亭主を持ッてゐない。十八番の藝もいろ〳〵ある中に、電氣踊り、即ち電氣の光を借りて、種々不可思議の踊りを演る、取分得意として居る、希臘古代の神々の歩き方など其變幻巧名なことは、類を世界に眞似手の無い藝で、フーラーの電氣踊りといへば、大陸到る處、三尺の子供も知らぬものは無い有名な女優であるから、演藝技術家を尊敬する神の如しといふべき、佛蘭西の政府にも、非常の勢力があつて、梨園界の事はフーラーの拳手投足で、如何でもなる。殊に今の大統領ルーベー氏とは最も親交の間柄であるのです。

▲ロイ、フーラー嬢と元興行人スチーブンス

（二人で倫敦へ這ッて來る）

我々が巴里行きの相談には、此のロイ、フーラー嬢自身と元フーラー座の興行人をして居たスチーブンスの二人が、態々倫敦まで這ッて來て呉れた。如何して我々の事を聞出したかといふと、散て新聞の好評を見て、輕卒にも乘ッて來た譯でも無ければ、コロチット座から紹介した譯でも無い。其因緣は遠く亞米利加に在りて、我々が經育のビジョー座で盛んに演ッてる時分に、スチーブンスも丁度亞米利加に來て居ッて、二三回親しく我々の演劇を見物し、其盛況も目擊した事があるのである、此スチーブンスといふのは、李鴻章とロイ、フーラーとの關係――コレハ後でお話そします

が、――其關係から、先年李鴻章の英語掛に雇はれて、今は非常の出世をして、支那に居るのですが、亞米利加へ立寄つたのは、故郷の巴里へ、暫時歸を貰ッて歸へる途中であつたさうです。

▲スチーブンスの献策

（川上一座を呼んではドウカ）

元興行人をした、スチーブンスだけあッて亞米利加で、我々一座を見た時「コリヤ好い代物だ」とにらんで、巴里へ歸ッて見ると、折しも舊主人のロイ、フーラーへ、政府から相談が掛かつたのを聞いて、然らばコレ〳〵の珍らしい演劇で、自分が現に亞米利加で見て來たのが、今倫敦に來て居るから、是非之れを招んでは如何かと、フーラーへ献策をしたので、フーラーも大いに乘地になッて兩人打連れて、倫敦へ來たのです。

▲政府へ對して氣の毒千萬

（ドウか一座して呉れまいか）

ロイ、フーラーのいふには、折角自分も政府の依頼を引受けて、一番演ッて見やうと意氣込んでは見たが、何を言ッても、最早老年に及んで、若い時のやうに身体も自由に働けないし、其上電氣踊りと云ッても、今更始まッた譯でも無いから、是れ許りでは、所詮政府の望み通り、人集せの中心となるとは覺束ない、萬一失敗をした時には事務所も取潰し、地面も無代で借して貰つた政府へ對しても、氣の毒千萬の次第であるから、何か自分と一座して呉れる珍らしい演藝はあるまいかと、

氣を揉み拔いて居る矢先に、スチーブンスが歸ッて來て、圖らずも貴下一座の話を聞くことを得たから、渡りに船と思ひ、早速御相談にまゐッた譯であるから如何か是非とも承諾をして貰ひたい、と斯ういふ相談である。

▲一週間の給料三千弗

（違約した時は一萬弗の罰金）

コリヤ面白い、其相手が通り一遍の興行人で無いから面白い、我々が目的地として居る巴里に、大勢力を持ッて居る名優であるから面白い、ソシテ其名優が自身に進ッて來たから益々面白い、シカモ劇場は顧ッたり叶ッたりの博覽會目拔きの場所で、政府自身が興行人といふやうな譯であるから更にまた面白い、ソシテ又其依頼が、コレと人の注目も惹くものが無いもへ、人集せの爲めに來て呉れといふ條件であるから、いよ〳〵益々面白い、是非行かずんばあるべからずです、實は此方から頭を下げて願ッても行きたい處であるのですが、向ふも商賣人、此方も商賣人で、其間のカケヒキが大事であるから、輕卒に承諾はしない、殊に親王殿下の上覽について受書を差出した翌日で、ズッと氣位ゐが高くなッて居る矢先であるから、チットやソットやの給料ぢや動かないといふ顏をして「一週間三千弗お出しなさい、夫れなら行きませう……」と思ひ切ッて大きく出た、有繋の口イ、フーラーも之には、荒膽も挫がれて、暫時は開いた口も塞がらなかつたが、プーデルも結局我々の決心を見て取ッたのか「よろしい、お望み通り三千弗上げませう」と小氣味の好い挨拶をしたから、直に興行の契約を取り結んだ、萬一興行が出來ぬ場合には違約した方から、一萬弗の罰金を出すといふことにした。

▲巴里の皮切り

（日本公使館の夜會）

ロイ、フーラーとの契約も整ひ、親王殿下の上覽も濟んで、コロチット座とは、巴里打揚げ後、再度の興行を約して、いよ〳〵英國倫敦を出立したのは、昨年の六月二十八日で、翌拂曉無事巴里に着した。其翌三十日の夜、栗野公使から特別の厚意を以て我々の爲めに日本公使館で夜會を催された此の夜『藝者と武士』を演じたのが、先づ巴里での皮切りで、評判は如何かと思ッて居ると、フヒガローといふ佛蘭西第一の新聞が最ども激賞をして呉れた。此の新聞は平生見識を高く持ッて、容易に褒めない新聞であるのに、斯うソッケから褒めてかゝつたのは、餘程珍らしい事であると、栗野公使も大に喜ばれて、翌日私を呼んで、其新聞の劇評を讀んで下さつた。

▲波濤の上にフーラーの踊り

（新築劇場の壯觀）

諸新聞の好評はロイ、フーラー座（新築劇場）の廣告にもなり、前景氣も附いて、七月四日から開演することになつた。此の劇場は、前にもお話をした通り、博覽會の爲めに、態々建築したもので、巴里の有名なる美術家連が、寄ッてかゝッて拵へたのであるから、其規模、構造、裝飾など、我々は

唯美事なもの、立派なものと驚く外は無かつたが、就中苦心經營の結果を見らるゝのは劇場の外觀の壯麗なることで、其意匠は、屋根とも言はず、壁とも言はず、只一面大濤が打つて、其大濤の頂上に、フーラーが飄々として踊つて居る。是は皆ナ大理石の彫刻で、夜になると電氣の仕掛で以て、其大理石の彫刻が、マルデ大濤の打てるやうに、虛空に浮上つて見える。實に壯觀な建築である。

▲フーラーの寢室と居間

（李鴻章の紀念物）

飜つてフーラーの家に行つて見ると、宛然貴族の邸宅で、自用の馬車が四輛あつて馬車用、乘用の馬ばかりが五十四飼てあるのを見ても、如何に贅澤な暮をして居るかといふことが分かる、此處に可笑い話は、先年支那の李鴻章が、佛蘭西に遊びに來た時此のお婆さんに、スッカリ打込んで仕舞つた。お婆アさんといッても、今でさへ中々若くて、愛嬌澤山の美人である處を見ると李鴻章が逢ッた時分は、ズッと昔の事であるから、スバラシイ尤物に相違無かつたと思はれる。李鴻章は其の色香に迷ふて、何も彼も殆んどフーラーに入れ揚げて仕舞つた　其證據には、フーラーの居間、寢室の裝飾品から、夜具、蒲團、枕、寢臺の類から、日用の家財に至るまで、李鴻章の紀念として遺つて居ないものは無い。是等は悉く支那の物で、日本の道具に類したものが多かつたので是幸ひと枕や蒲團其他の道具を借出して、盛遠の芝居に使つたのです。

▲フーラーの泣言

（給料の減額を申し出た）

新藏のロイ、フーラー座に、先づ初日を出して、夫れから二日目を打つて、三日目を出さうといふ時になッて、フーラーのお婆アさん、困ッに事を言ひ出して來た『どうも今日になッて斯ういふ事を申すのは、誠にお氣の毒な譯ですが、實は此處の劇場を建築する時は、少くも見物八百人を容る、汐文をしたのです。處が出來上ッて見ると僅かに五百人にしきや這入れぬ上に、演劇を開場して見ると、電氣料其他の雜用が、思の外超過して、到底收支相償ふ見込みが無い、夫れですから、お願ひですから給料を少し負けて下さる譯には行きませんか……負けぬと仰しやれば、御緣も夫れまで、三日目から御斷り申す外はありません』と、斯ういふ事を言ひ出して來た。彼れほど固く契約をしたのに、今更不埒な事をいふ婆アではある、と私は大に憤慨して『今日となッて三千弗が一文でも、負ける事は出來ぬ』と一旦は踏張ッて見たが、初日、二日目の景氣が、豫期したほどに思はしく無かッたのと、フーラーの言ふ處は、察すべき點が無いでも無いから、此方も少し我を折ッて『くやしいけれど、負けて遣れ、如何だ』と聞くと、『千五百弗にして下さい』といふ、『何んだ千五百弗！約束の半分ぢや無いか、貴めて二千弗にせい……』『イヤ迚も夫れでは割に合ひません…………』『仕方が無い、負けて遣れ〳〵』

▲栗野公使の立腹

（憮然ヨシて仕舞へ）

三千弗の給料を千五百弗にした、フーラーの腕前を見ると、此奴中々喰へない婆アで男も及ばぬ政界家であると思ッて、直々に栗野公使の許へ行ッて、此の話をすると、公使は大に立腹されて「ソナ不埒な事を言ふなら、斷然止して仕舞へ〳〵、ナニ日本へは、己れが郵船會社へ托して、船賃も無代で歸へして遣る」とまで、フーラーと喧嘩腰になられたのを『マア旅のことですから、乘りかゝつた船で仕方がありません、千五百弗で當分演ッて見ませう』と言ッて三日目を出し、四日目を出すと、如何いふ調子か、夫れから非常の景氣になッたのでフーラーも大喜びであつた。

▲遠藤武者立腹を切る

（日本の腹切りを見せてくれ）

此時の出し物は、『遠藤武者』と『藝者と武士』で、晝夜二回づゝ興行をしたが、後には夫れでもマダルイといふので、どう〳〵三回づゝになッた。此處に一つをかしい話は、フーラーから、是非日本の腹切りを見せて呉れといふ注文である。亞米利加でも日本公使館會の夜會の時、同樣の注文が出て、曾我兄弟に切腹をさせたことがあつたが今度は盛遠の狂言で腹を切ッて見せいといふことである。頗る無理な注文ではあるが、日本の歴史も碌に知らぬ、外國人を相手の演劇だから、盛遠一人殺した處が、別段歴史の罪人にもなるまい、夫れのみならず、見物が人物に對する同情を減ずるといふやうな八釜しいとは無いから、其邊は安心なもの、元より此方は好んで演りたくは無いが、注文となれば、商買だ、お望み通り腹を切ッて見せやう、といふと『夫れでは血の澤山流れ出るやうに、出來るだけ凄く演ッて貰らひたい』『よろしい』といふので、トウ〳〵盛遠先生に、立腹を切らせることと相成ッた。

▲腹切りの注文偶然ならず

（佛國に傳はる腹切りの逸事）

座主フーラーが腹切りを注文をしたのは、決して偶然ならずで、一体『腹切』といふことは、日本特有の名物として、世界に知れ渡ッて居る、ウェーブスターの辭書を繰ると、『ハラキリ』が『ハリカリ』なぞゝ訛ッて、英語の中に入れてある、英吉利人や亞米利加人は、腹切りといふ字が、自分の國語になッて居る位なだから、誰れも知ッては居るが、佛蘭西人はどには知らぬものが多い、佛蘭西人はどに腹切りといふことに趣味を持ッて居るものが少い、其因緣は、維新の時分に浪士等が佛蘭西人を斬殺して、泉州堺の妙國寺で、孰れも切腹を命せられた事があつた、此の話が佛蘭西に傳はッて以來、日本には腹切りといつて、自分で自分の腹を切ッて死ぬるといふ、不思議な珍らしい事があるさうで、夫故是非腹切りを演ッてくれ、といふフーラーの注文であつたのです。

▲虫も殺さぬ顔をせる貴女紳士

（腹切りの狂言を見て狂寧する）

も一ッは、佛蘭西國民の性質として、非常に悲慘なこと、殘酷なことを好む處から斯ういふ注文が出たらうと思はるゝ。論より私の實驗した證據でお話しをすると、此遠藤武者の立腹を見せることになつ

七、フーヲーが大々的廣告を遣ると、「日本の腹切りだ」といふので、虫も殺さぬ顔をして居る貴女紳士丁稚子守りまでも、殆んど狂人のやうになつて見物に來る。劇場の入口は、初日、二日目などよりは、三四倍の景氣が付いて、見物は日々潮の如く打寄せる、「今日の切符は賣切れた」といふと、「失れでは明日のを買ふ」「イヤ明日のも無い」「失れでは明後日のを買へ」と斯ういふ有樣であつたので、遂に一日の興行回數が、二回から三回、三回から四回とまでなつて、後とは毎日の收入が平均三千弗ーフーヲーのお婆アさん腰を抜かして喜んで居た!!

▲花笑ひ鳥唄ふ樂園の巴里

（ソレニ都人士は戰國殺伐の風がある）

亞米利加の日本公使館で、曾我兄弟の切腹を見せた時は、日本では不思議な事を遣るものだ位ねに止まつた。言替へれば演藝としてよりは、寧ろ風俗研究として見られたに過ぎなかつたから、興行人からも、格別切腹を見せて呉れといふ注文も受け無かつた。又喝采を博した「藝者と武士」なども所作の方に重きを置て、寫實の死に方が凄いとか何とか云ふ、悲劇の方面から見て興味を感ずるものは殆んど無かつた。是れは例の喜劇專門の國柄であるから、さもあるべきことと思はれる。失れから英吉利では喜劇專門ともつかず、又悲劇專門ともつかぬ、所謂其間の悲喜劇を喜ぶ處であるから「高德」が受ける同時に「藝者と武士」も受けて、孰れの方面にも相當の興味を以て見られた。トコロが佛蘭西に遣ッて來ると名にし負ふ巴里は、花笑ひ鳥唄ふ世界の樂園たるにも拘らずです、丸で戰國殺伐の世の中に飛込んだやうだ。

▲腹切りの狂言は英米以上の喝采

（始めて帽子を揮られる）

例へば我々の芝居を見るにしても、彼等の多くは、笑ふよりは泣くことが好き、喜ぶよりは奴悲ひとが好きである、否泣くと、悲ひとを打越にて斬ッたり殺したり殺されたり、身の毛も竦立つやうな殘忍殺伐な事が好きで、飽くまでも血を見ずんば已まずといふ風がある。失れですから盛遼の狂言の如きは、フーヲーが注文の腹切り、シカモ立腹で、刀を腹に突立てる、一文字に引回はす、血がサッと迸しる、咽喉を掻く、目を白黑くしてバッタリ斃れるまでの數分間が　佛蘭西人の最も喜ぶ狂言の山で、其拍手喝采は英米以上であつた。後には拍手喝采位ねでは滿足が出來ずに滿場の見物が、盡く帽子を取つて振るに至つた。亞米利加や英吉利では、いくら喝采をされても、帽子を振られたことは、一度も無かつたが、斯んなとは、佛蘭西に來てから始めています。國々の嗜好は斯うも違ふものですか!。

▲兩優二樣の死に方を見せる

（貴婦人達が見物の金曜日を見當てに）

彼地の芝居で、金曜日といふと、貴婦人達が見物の定日になつて居るから、此日に限つて、入場券の價が三倍になる、即下等は普通二十五錢のが七十五錢、上等は一椅子六圓（十五フランノ）のが十八

圓に臨がる。フーラーのお婆さん、儲けるとに拔目は無いから、我々を使ふのが中々巧妙い。『此の金曜日には、男と女の死に方を同時に見せてくれぬか』といふ注文。愈出でゝ愈不思議なことになつた。『ナンデモ盛遊が腹を切る始末だから、毒を喰はゝ皿までだ、撰ふもんか、何でも演つちまへ』といふことになつたので、フーラーは大々的廣告をして『此の金曜日には川上と貞奴の両優が、絶技を振つて、競つて死に方を見せる、是れが巴里に於ける最後の腹切りである』といふ意味の廣告をした。コノ同時に死に方を見せるといふのが、又々非常な人氣になつて、入場料は、平日の三倍なるに拘らず、立錐の餘地無きまで、大入りを占たのです。

▲國王を斷頭臺に上したる佛蘭西人

（其殺伐の氣風が今も殘ッてゐる）

之を以て是を觀ればです、巴里は世界流行の魁を爲し、又其中心となるといふやうな華奢風流の地で、其國民は如何にも優美しく温雅しく、ソシテ談話が旨まくつて交際が上手で、文明の民は斯くもありたきものと、我々さへも羨望に堪ねばでであるけれど、飜ッて人心の裏面を見ると、矢張佛蘭西革命の暗流が、何處までも滾々として流れて居るかと思れる。即佛蘭西國民は、何處までも國王路易十六世を斷頭臺に上した國民たるとは爭はれぬと思ひます。別段深く研究をした譯では無いが、我々が芝居の上の、淺果敢な經驗から、米、英、佛と、此の三ケ國を渡つて來て、チョイ〳〵感した所から見ると、前に申した通り、佛蘭西人が悲劇を好むと、悲劇といふよりは慘劇を好むと、殺伐、殘忍、悲哀、勇壯な芝居で無ければ、見に行くことを喜ばぬなどは、ドウしても斷頭臺の國民としきや思はれない。斯ういふ處だから、巴里で早く出世をしやうといふには喜劇俳優では、到底駄目！若し他に非常拔群の技量あるに非らずんばです、悲劇俳優で打ッて出るのが、一番出世の早道だらうと思はれる。其中にも、絶命の技量即死に方の旨いやッとなると、巴里人は狂喜して之れを迎へるです。我々が巴里に來て、お貞が世界の大女優かの如く持囃されて、非常の成功を遂げたのも、『藝者と武士』に於ける葛城の死に方が、過半は預かッて力がある。巴里の學士會員カロリーヌコラン氏といふ老儒から、同地のフヰガロー新聞へ『千八百八十九年の博覽會にては、エッフルル塔が一番目の目拔にて有之候、扨今年の博覽會にては、先づ例の絶妙なる貞奴かと存候』と、通信をされたのも、絶命の演り方なぞが、エッフル塔に比較された中の、過半を占めて居るかと思ふのです。

▲絶命の技量を以て鳴る女優サラベルナー

（其の競爭者は女優レヤヤン）

絶命の技量といへば、巴里で今最も歡迎をされて、大出世をして居るのは、サラベルナーといふ伊太利出身の女優です。年はモウ六十餘りでださうですが、我々が見ちや、四十五六としきや見ねない、此れも矢ッ張死に方で名を揚げたのです。此のサラベルナーの競爭者に、同じ伊太利から來て居るレヤヤンといふ女優がありますが、ナニ三十五六の美人で、此の演り方は。飽くまで、寫實的

で、我々壯士芝居の一流です」、シカシ到底サヲベルナーほどの勢力は無い。

▲女優サヲベルナー日本店を驚かす

（一寸の間に二千弗の買物）

博覽會で、或日日本の陳列場を見物に來た一人のお婆さんがあつて、百圓二百圓の品物は物の數とも思はず、其處から二品、此處から三品と、都合二千弗の買物をして行つた、見世番の先生達は、何處の田舍のお婆アさんかと思ッて、普通の待遇をして居ると、二千弗といふ金を一時に蒔いて行ッたので、後で膽を潰して、扨ては高貴の人でもあるかと、聞合せて見ると、何不圖らん、是れが佛蘭西第一の女優サヲベルナーならんとはです。ソンナヲ茶でも出て、叩頭の三ッもすれば好かッたと、店の者等が後での大悔み。

▲ロイ、フーラー座日延べの申込み

（今度は三千弗にしてやる）

ロイ、フーラー座の興行は、前のやうな次第で、好結果を得たから『モ一週間打つて貰ひたい、今度は最初から三千弗の給料を遣るから』といふ、フーラーの申込みであつたのです。シカシ倫敦を立つ時、巴里は一週間打つて、直ぐ此方へ引上げて、またコロチット座で一週間打たうといふ契約があるのですから、オイソレと承知をする譯に行ん。トウ〳〵フーラーはコロチット座に談判をして、來年六月モ一度川上と貞奴を呼で、自分も一座して、一週間三千弗の給料で、眞先にコロチット座で、興行をするからといふとで、双方辯護士立合の上交渉が纏つて、夫れから再度の興行をやつたが、是れも首尾好き結果の中に打揚げた。

▲大統領の園遊會

（我々夫妻も招待の數に漏れ無かつた）

再度の興行を終つた後翌日、即八月十九日は大統領ルーベー氏が、博覽會褒賞授與式の慰勞をするといふので、エルサー宮で、一大園遊會があつた。此園遊會には、博覽會で最も評判を取つた、各國の俳優藝人が大勢招かれて、庭先の舞臺で、交る〳〵藝を演じたのですが、我々夫妻も其招待狀の數に漏れなかつた。シカシ此の園遊會に行くことに就ては、フーラーとの間に一場の紛議が起つたのです。

▲川上ロイ、フーラーを槍込める

（何處までも意地悪く出た）

其の紛議といふのは、園遊會に俳優藝人を呼ぶとについて、我々夫妻のとは、大統領からフーラーまで御沙汰があつた。トコロがフーラーは、私に一應の相談もせず、有難く御受けを致しますと、一人で承知をして、後で私に其話をしたから、私は大いに憤激をしたのです。一体是れまでが、フーラーの婆アめ、何かにつけ剛情を張つて、兎角蔑視つた事をするので、殆に障つて堪らん、斯ういふ時こそ、咽喉首を取つて、思ふ樣苛めて遣らう、と斯う思つたから、何處までも意地悪く出た。

「大統領の園遊會に行くのは好いが、全体誰れが御受けをしました？、御沙汰が有つたやうにナゼ其時我々に向ッて、一應の相談をしないです？招待をされた當人の意思も確めないで、餘り失敬ぢやありませんか。假令行くにした處が幾何給料を貰れるのです？我々が此地へ來たのは、無給料で働くためでは無い。ソンナ手續きを誤つた無法な御相談は、眞平御免を蒙りませう……」と頭から放ねつけて仕舞つた。

▲何故に大統領の園遊會に行かざる？

（金を貰はなければ行かぬといふのか）

有繋のフーラーも、是れには大いに手甲摺ッて、引退がると、今度は、グランドオペラの座主が遣ッて來た。是れは年々政府から、七十萬圓の保護金を貰ッて居る、官立第一の劇場です。其座主が談判に來て「お前はドウしても金を取らなければ、大統領の園遊會には行かぬといふのか？ソシテ幾金取る了簡で居る？」と聞くから「二萬や三萬の金ぢや行かぬ、大統領ともあるべき人が、後で金を聞くなんて、ソンナ客嗇な遣り方があるもんか、第一癪に障はるのは、フーラーの婆アだ、我々に挨拶をしないで、一人で取極めて仕舞ふから、斯んな苦情が持上がるのだ、シカシ我々は日本臣民だから、若し日本の天皇陛下から、斯ういふ仰せがあるなら、感泣して之れに赴くけれど、此地ではサウは行かん、イヤ大統領の招待に預かつて、我々の拙藝を御覽に入れるのは、一生の面晴れであるから、敢て御受けをいたすに躊躇しないが、其間に商賣人が這入つて、手續きを間違へて

るから、此方も夫相當の挨拶をして居るのだ」と是れも美事に放付けた。

▲我々は正客としての招待

（他の俳優等は只御沙汰に止まつた）

此の問着の結果、トウ〳〵政府の役人が、栗野公使の許に遣ッて來て、私と立合の上公使が仲裁に這入ッて、正式の手續きに及んだから、ヤットの事話が纏ッて、今度は大統領から表向きに、我々夫妻へ園遊會の招待狀——他の正客と同樣の招待狀が來た。然るに此招待を受けた、他の俳優藝人の多くは、只御沙汰に止まつた許りで、招待狀は行かないのです。即表向きの客待遇では無いから皆んな裏門から這入ッたが、我々は意地惡く出た甲斐があッて、招待狀を貰つたから、堂々と馬車を驅ッて、各國の貴女紳士達と同樣に、表門から這入る事が出來のは、子供のやうたが、内々嬉しかつた。

▲大統領夫人貴奴の手を握ッて散歩す

（通辯の間違空腹をかゝへて歸へる）

我々の演ずる舞臺は、エルサー宮の庭の眞中に、立てられた。元よりウェールス親王殿下の御招待を受けた時のやうに、完全には行かなかッたが、出來得る限りは日本流に建てられたのです。演藝の時間も、僅か一時間か其處らしきや無かつたので、「藝者と武士」の後半、即ち道成寺の處だけを演りました。我々の演藝が濟むと、大統領夫婦から、いろ〳〵賞讃の言葉があッたのみならず、大

統領夫人は、親しくお貞の手を握ッて、數分時園内を散歩された。公けの挨拶が濟んで、我々は樂屋へ引退がつて居ると、宮中の役人が遣ッて來て、「是れから晩餐を呈しますから、食堂へ御出下さい」といふ、御馳走の御案内である。我々は最初から佛蘭西語を知ッて居る或る日本人を通辯に遣れて居た處が、此の先生、通辯を間違へて、折角の御案内に對して「イヤ己れには及びませぬ」と日本流に辭退をして仕舞つた。此れが日本なら「折角準備がしてありますから、何卒彼方へ」と、無理往生にも引張らるゝ處であるけれど、彼地ではサウはしない、斷わるのを引留めるは、却ッて迷惑であらうと、人の言ふことを正面から正直に受けるのであるから、通辯通りろれには及ばず無くなッて、我門へ送り出されて仕舞つた。サンザ苦情を唱へて、特別の招待狀を受けて、行ッて、腹も減ッて居たから、シコタマ御馳走を喰ッて遣らうと、内々咽喉を鳴らして居たのに、頓た通辯の間違ひから、飯も喰はずに追出されて、仕舞つたのは、實に口惜しかつたやら殘念であつたやら。

▲大統領より特別贈物……美麗なる花束

（ナンダ馬鹿々々しい、斯んなものを！）

園遊會が濟ひと、大統領の許から、公使館へ使が立て、我々夫妻へ宛て、大きな花束を贈ッて來た此れが園遊會で、演藝のお禮である。實は金の千弗位ゐも、くるかと思ッて居た處に、珍らしくもない、薔薇の花束が來たので、大いに意外に思ッて、サンザ馬鹿々々しい、といふやうな顏をして栗野公使に尋ねると、「イヤ是れは決して馬鹿にしたものでは無い、金より何より貴い特別第一等の贈物で、大統領から花束を貰ふといふことは、非常の名譽である、金に替へられぬ名譽である、大いに喜べ」と言はれて始めて有難く思ッた。此の花束は、七分は薔薇、三分は種々の珍花を集めた、非常に美麗なもので、下は銀紙で包んで、其處へ、大きいリボン見たやうな長い絹の切が卷きつけてある。其切れには大統領の名前を署してある。夫れは此れです……紀念の爲めに大事に存保して置きました。尙此の外に大統領の姓名の頭字を彫刻した飾りのあるビヤを、夫妻とも貰ひましたが此れも得難き紀念の一ッとして、珍重して居ります。

▲公使館から再度の使者

（政府から記章が來た）

其明くる日旅館に歸ッて居ると、公使館から、再び使者が來て、直に出て來いと云ふことである。何事かと思ッて、倉皇として行ッて見ると、栗野公使は私に向ッて「ドウモ大變なことになッた」と言はれた。餘り出拔けであつたから、私は驚愕して「ドウ大變です、何が間違ひでもございましたか？」と尋ねると「イヤ間違ひ處の騒ぎでは無い政府から勳章が來た」「誰れにまわりました？」「お前達夫妻に……まだ勳章は來ないが之れを遣つてもよいか、又之れを維持するだけの資格があるか、回答をして呉れ、と政府から問合せて來た。之れが文學者とか美術家とか、日本で地位、身分のある人なら、直ちに回答も出來るが……お前は泥棒したとは無いか？」「嚴言仰ッしやッちやいけません」「牢に這入ッたとは無いか、頓でも無い事を仰ッしやいます！」「イヤ萬一間違つたとを回答して、

後で發覺するやうな事でもあると、お前達斗りの迷惑ぢや無い、日本を代表して來て居る、己れの迷惑になるとだから、充分取調べして置かなければならぬ」

▲川上は一介の書生なり

（地位も無く身分も無い）

「私は道德の罪人となッたとは、或は有かも知れませんが、未だ曾て法律の罪人となッたとはございません、惡いとした覺は決ッしてございませんから、何卒其勳章の渡るやうに御願ひ申しますといふと、公使も安心をされて、直に回答をされた。其意味は「川上は日本で地位も無く身分も無い一介の書生である、シカシ彼れは非常に演劇に熱心で、數年前演劇研究の爲、一トたび此の佛蘭西に來たとがあつたが、今度は日本演劇の興行と、再び西洋演劇研究の目的を抱いて、門下を引連れて遊ッて來たのであるから、若し貴國政府に於て、勳章を下賜されるといふ、有難い思召しがあるなら、弊國日本俳優に取ッて、大いに技藝の奬勵となると考へる」と、斯ういふ意味の回答をされた。

▲待ちに待つたる勳章

（二ヶ月經ッても昔沙汰無し）

是なら大丈夫だと、我々はモウ鬼の首でも取ッたやうな氣になッて、今日來るか、明日渡るかと、待つて居ると、幾何待つてもなか〳〵來さうも無い。ヨリヤ一介の書生だなどゝ、回答に書いてあッたので、急に風向きが變ッて、沙汰止みになつたのか、知ら？遣る物なら遣るやうに、サウ焦らさずとも、よさゝうなものだ。文明國に似合はぬ悠長な仕方ぢやないか。モウ今日で二月になるが忘れて仕舞つたのぢやないか？夫れとも今まで沙汰が無ければ、いよいよ駄目かな！ナンダ馬鹿々〳〵しいと、毎日國卿の百萬遍を並べて居ると、十一月一日——問合せがあッてから、二ヶ月と十一日目に公使館から急使が來て「勳章を渡たッた」との知らせである。「サウですか、いよ〳〵參りましたか」、出掛けて見ると、待ちに待つた勳章——技術家などに遣る一種の勳章——即ちオフヒシエー、ド、アカデミーといふ、三等勳章を下賜された。

▲川上昔二郎夫妻の記章

川上昔二郎夫妻が法朗西政府より贈與されたる記章佩用の免許書は今回同國政府より送り來りしかば日本政府よりは同人夫妻が右記章佩用につき左の如き免許證を與へたり、但し貞奴のも同文なり

大日本帝國外國記章佩用免許證

川上昔二郎

法朗西共和國政府より贈與したるオフヒシエー、ダカデミー記章を受領し及び佩用するを允許す

明治三十四年二月二十日

奉勅（大日本帝國賞勳局之印）

賞勳局總裁正三位勳三等子爵　大給恒

第七百六十四號を以て外國記章佩用免許簿冊に記入す

賞勳局書記官從四位勳三等　横田香苗

賞勳局書記官從六位勳六等　藤井善言

▲巴里新流行やつこ服

日本女優として巴里交際社會に持囃され、彼處の夜會此處の婦人倶樂部より毎夜の如く招待されし貞奴は、夫川上の意見に依り我國の美術的なる婦人服裝をば出來得るだけ紹介せんとにつとめ常に裾模樣の紋付、白襟に錦襴の丸帯を結ぶなど、最も派手なる服裝をなして趣きしかば、彼女が道成寺の藝に驚嘆せし貴婦人達は、其華麗にして優美なる打扮に一層渇仰の念を増しける結果、巴里婦人會にては今回貞奴の服裝を本とし和洋折衷の夜會服を製り、「やつこ」服と稱へて之を纒ひ、巴里新流行の魁けをなすといふ。服の地は勉めて日本の織物重に西陣或ひは縮緬の類を用ゐ成るべく華麗なる裾模樣を付くる筈なりと。右につき曩に貞奴等と同船にて歸朝せる栗野佛蘭西公使夫人、本野ベルギー公使夫人は、「奴服」の流行を盛ならしめんため、京都西陣織の本場なる川島甚兵衛に托し、日本固有の美術を失はざる「奴服」を新調し、再び渡佛の上は、之を纒ひ貞奴と共に巴里市中を逍遥して、一層婦人社會の注意を呼起こす筈なりと。「奴服」の圖案は巴里婦人會より出でしものゆゑ、勢力ある同會の貴婦人達が、卒先して之を纒ふに至らば、一般の流行はさはど難事に非ざるべく、さすれば「奴服」の調製方も、佛蘭西より日本の川島に一切受負はしひるやう盡力すべし、是國益の一つなりと、就中本野公使の如きは大いに意氣込み居らるゝよしなり。「奴服」の圖案は昨冬佛國佛人雜誌に掲げられしが、同雜誌の主筆は萬國婦人會の書記長某氏なり

▲巴里人が日本芝居の假色

（なか〳〵巧い）

演劇といふものは、其國の言葉の媒介をするに、一種の勢力を持ッて居るもので、我々が巴里興行中は、興行人や役者仲間に、非常に日本語を流行させた。一体佛蘭西人は、好く日本人に似て居るといふですが、實にさうですナ、其性質や習慣など、日本人マルヌケと思ふ處が、我々の目にも著しく見える。就中言葉の點に於ては日本語を眞似するのは一番巧いです——第一調子が巧い、ソヲヂ覺えるのが頗る敏捷です。「鞘當」の狂言で、お貞の葛城が、伴左に袂を引かれて一緒に行けとゝ勸めらるゝを、斷る臺詞に「有難うはございますが、今宵は外に約束もあれば、マお斷り申しませう」といふのがある。ロイ、フーラー座の興行人になは、何時の間に、此の臺詞を覺えて、其意味を悟ッたのか、此の興行人の女房が、或日の幕合に亭主に向ッて、一寸あなたビーヤを呑みに行きませんか、と勸めると、興行人先生、澄し返ッて、有難うはございますが、今宵は約束もあれば、マお斷り申しませう」とやらかしたので、女房噴飯して仕舞つた。其調子が、舞臺で聞き覺えた通り、お貞の假色を遣ッてやるから尙をかしい。シカシ其假色がなか〳〵巧いから、恐入るのです。夫れから、此臺詞が俳優仲間に非常に流行して、何でも物を斷はる時には「有難はございますが……」を

ユゲ〳〵流に悠長に遣ッてる。

▲葛城さん斯う行かしやんせいなァ

（楽屋中の大笑ひ）

モ一ッは葛城を取巻いて居る女郎が、一同聲を揃へて『葛城さん斯う行かしやんせいなァ』といふ聲詞を、楽屋の者が覺えて、お眞が扮裝て、是れから舞臺に出やうといふ時になると、女役者などが一齊に『葛城さん、斯う行かしやんせいなァ』と、毎日お極りのやうに、假聲を遣かふので、楽屋中腹を抱へて笑ッて居た。

▲ひやうきんなる巴里人川上を驚かす

（洋杖を捕へて『見當』さッせい）

夫れからモ一ッは『武士の鞘當見當さッせいと』いふのも大分流行つた。元の聲詞は『挨拶さッせい』ですけれども、外國人には響きが悪いと思ッて『見當』と直したのです。私が或日ステッキを小脇に挾んで、町をサッサと行きかゝると、後から來て、グッと其ステッキを握ッた奴がある。驚いて振向く途端に『見當さッせい』と嗾ッて、アハ……アハと無邪氣に一笑して立去ッたのが、軽薄な一人の佛蘭西人、鞘當を遣ッた積りなんですナ。

▲フーラーのお婆アさんに癇癪玉を踏潰す

（壯士風に喧嘩を吹かける）

フーラーのお婆アさんは、我々一座の興行に、少からぬ儲金をして、味を覺えたので、本年六月から來年六月まで、一年間、二十二萬圓の給料で、英吉利から佛蘭西、獨逸、伊太利、露西亞など歐洲大陸を經て、浦塩斯德迄の興行を約するやうになッた。此の契約書は粟野公使に御願み申したですが、お婆さんなか〳〵八釜しい。此箇條が不服だとか、彼の文句を削ッて呉れとかいふので、其通り直してやると、また後から苦情を持出して來る、此方は癇に障ッて堪らんです。後には粟野公使の佛文の書き方が拙い、など言ひ出して來たから、トウ〳〵癇癪玉を踏潰して喰ッてかゝつた佛蘭西語は此方や分らぬから、日本語に英語を交せて、持前の壯士風を出して、盛んに喧嘩を吹かけた。

▲川上大にハイ、フーラーをいぢめる

（ロイ、フーラー遂にへうを掻く）

有繋のフーラーも、私の喋べるとは分からぬけれど、今にも打ッて掛りさうな權幕に辟易したのか、遂に我を折ッて『オーライト〳〵』と慰めにかゝつた。『オーライトも糞もあるもんか、パッド、レヤー、糞たれ婆アめー狸婆アめー愚圖々々いふと、ハリ倒して仕舞ふぞ』と肩肱を張らして、悪口を吐く〳〵と、お眞が傍から心配をして『モウお止しなさいよ、紳士の品格に係はるぢやないか』と澁面めてゐる。フーラーのお婆アさんは、後では、オーライトも出ないで、トウ〳〵べろを掻き始めたから、私も大抵にして止めましたが、お婆さんと喧嘩をしたのは此時ばかりではない、何遍遣ッた

か知れぬのです。園遊會の招待狀一件の時も餘ンまり强情を張つたから、トウ〳〵泣かせて仕舞つた。シカシ女役者で、獨身者で堂々たる劇場の座主で、梨園界に勢力を持て居るふ婆さんだけに、なか〳〵喰へないです。ウッカリ掛るとひどいめに逢ッて仕舞ふから、どし〳〵背めて遣りました が、矢ッ張腐れ縁と見ねて、此のお婆アさんの爲めに、歐羅巴三界へ二度の勸めをする事になッた

▲サーベルを拔いて大喝一聲

（ヤレッと號令を下した）

ロイ、フーラー座を打揚た翌日は、本野ベルギー公使からの招待で、ベルギー公使館へ赴く約束があるので、道具幕や其他の道具を、彼地へ持ッて行ッて使用へるやうに準備をして呉れと、フーラーへ呉々も頼んで置いた處が、出立の前曉になッても皆ンナ知ん顏をして、一向荷造りをする模樣が無い。凡ての小道具は、繩で括ッて、高い天井へ吊した切り、道具幕も引張ッたまゝで、荷拵へ處の騒ぎぢやない。明日立つといふのに、此儘で持て行けるもんか、實に悠長な奴輩ではあると、平日の癇癪玉がまた〳〵飛出して「荷拵へはドウしたんだ……アレ程頼んで置いたのに、此の婆婆ア」とフーラーを罵ッた。元より半分は日本語たから、仕合せと侮辱の意味は明白に分らぬけれども額に青筋が立ッて、血相を替へて怒鳴ッて居るから、フーラーは大び〳〵でゐる。其上來年興行の契約が結んでゐるから、此の際何かにつけて私の御機嫌を取り損ねてはと、大いに心配をして「マア〳〵」と、頻りに私を慰めては居るもの丶、荷拵への事は矢張愚圖々々してる、コレは如何いふ譯かと探くッて見ると其前私にフーラーが日延べの相談をしたのを、ベルギー行きの一件で、放ね付けて仕舞た其祟りが一ッと、モー一ッはフーラーが劇場の道具方やボーイ等に、心付けを澤山仕なかッたのと、又モ一ッは、フーラーの命で一日荷拵へにかゝつた處が、人足の一人が天井から道具を下す機會に、墜落ッて死んで仕舞ッた、其れや此れやの苦情や恐怖から斯ういふ始末になッて居るといふことである。けれども、彼等の遣るのを待ッて居ては、明日が明後日になッても出立は覺束かないから、私は例の激怒一番、舞臺用のサーベルを引ッこ拔いて、大喝一聲「道れッ」と號令を下した。

▲或は猿の如く或は飛鳥の如く

（天井に上つて道具を切落す）

一座の者も、右の始末を見て、殫に障はつて居た矢先であるから、私の號令を聞くや否、皆洋刀を準備して、吊してある道具幕に縋ッつて、猿の如く上る奴もあれば柱を傳ふて飛鳥の如く駈上る奴もある。皆ンな天井の道具を狙つて、準備の洋刀で手當り次第に切つて落す。ドタンガタンと落ちる度びに「萬歲！」と叫び、縋つた道具幕は、マダ天井まで逃せぬ中に、ビリ〳〵と引き割けて、其切れると共に、ドタンと下に落ちる。此の大混雜と大紛亂と、一同の目覺しい働きを見て、フーラーを始め道具方は、如何なる事かと、色を青くして見て居た。

▲本野ベルギー公使と市長の招待

（日本古代錦繪の裝飾）

此の敏捷な我々の大決斷を以て、幕から道具から、瞬く間に切落して、サッサと自分に荷拵へをして、其晩の中にスッカリ準備をして、翌日いよ〳〵同座を打揚げて、ベルギー公使館へ赴いた、同館では、本野公使から手厚い待遇を受けて、一夕の演藝を爲し、又ベルギー市長の招待をも受けて、美術倶樂部副會長の家で演りました。此副會長といふのは、ベルギー市屈指の金持で、非常に日本の古代錦繪を珍重して、幾萬圓といふ金を拋つて、數年前から買込んだ錦繪を、室内一杯張廻はして、樂しんで居る。此人一人の手でも、我が錦繪の買占められたのは、莫大なものでせう。

▲目出度く歸朝

（航海日數五十餘日）

本野ベルギー公使の夜會と、ベルギー市長の招待を濟ましてから、再び倫敦に引返へして、以前のチユードル旅館に投じたのが十一月七日の午後五時で、越れて九日の正午、愈々日本郵船會社の神奈川丸に乘じ、テームス河畔を出帆して歸國の途につきました。其途中は、ポートサイド、コロンボ、新嘉坡、香港、長崎等に寄港して、航海日數五十四日間、年立返へる新玉の初春――三十四年一月一日の曉、目出度く神戸に着しました。

▲越し方を思へば茫として夢の如し

（また多少の感無きを得ない）

今日になつて、我々の越方を思ふと、實に茫として夢の如しであるが、其夢の如き中に、また多少の感無きを得ない、顧みれば今より四年前即ち三十一年九月十日の曉、失敗と絶望の中から生れた一種の野心、殆んど目的無き野心と持前の痩我慢に驅られて、彼の十三尺の快艇に乘込んで、相模、紀の三大危險を犯して、翌年の一月神戸に着くと、亞米利加行きといふ話になつて、桑港へ着いての初舞臺から、歐羅巴へ渡つて、巴里最後の興行をなすまで、其間歐米に在ること、殆んど二年である、此の二年の間には、是迄お話を致した通り、其初めは困難と戰ひ、苦痛と戰ひ、絶望と戰ひ飢渇と戰ひ、屢々萬死に瀕して僅かに活路を開きしをや、幾度か失敗の暗黑に拋げ入れられて、辛うして成功の微光を認めしとや、あらゆる憂き目のつらい目を見盡し、嘗め盡して、其末にヤット我々の目的を達して、我々が豫期して居つた成功の上に、成功の花を咲かして、嘘にも親戚、知己、朋友、同業者等から、歡迎を受くる身の上となつて歸朝をしたのは、敢て之れを誇る譯ではありませんが、聊か以て一座が昔日の苦心を慰ひるに足るかと思ひます。

▲二年の日月必ずしも短しとなさず

（ナニカ研究し發明した事があるだらう？）

ソシテ又二年の日月、必ずしも短かしと爲さずであるが、此の二年の間、少くも米、英、佛の三ケ國を漫遊して、彼地の名ある俳優や興行人と交際をして、彼地の芝居も見て來たといふからには、失れについて、少からず見聞智識を廣めて、日本將來の演劇を、如何したらよいかといふやうな問

愚に就いて、幾分か發明研究をしたとがあるだらう？願くは頂り聞くことを得たいものだ……と斯ういふ質問をなさるお方がある、私は喜んで此の如き質問に應へて見たい私が彼地に在つて、見聞し研究し發明した事について、堂々と意見を吐露して見たいのは山々である、ケレドモお耻かしい話が、私にはまだ意見として申上げるやうなものは出來て居ない。元より櫻癡先生だとか、道遙先生だとか、學問もあり見識も有る斯道の大家が、二年は愚か、半年でも御漫遊になれば、啞、聾、盲同樣の我々が十年二十年行つたよりも、幾層深い觀察、幾倍廣い研究をなされたかも知らぬが、其萬一をも豫期するとの出來ない、淺學無識の我々であるから、何にも意見はムいませんと引退ッて居た處が、耻にはならぬ、寧ろ意見があるとか、發明をしたとか吹聽をするほど、世間から冷笑を買ふやうな今日の身分であるから慙なとは言はざるに如かずと、口を緘んで居る。其方が穩穩が出なくてよいです、と言ッて、私は世の非難攻擊を恐るゝ譯では無いが、實際の處日本演劇を如何に改良すべきかなどといふエライ問題については、一定の意見は出來て居ない、ロシ出來て居ても今日はマダ申上げる譯には行かんのです。私は此の四月モ一度彼地へ行ッて、再度の研究をした上で無ては、是が私の意見でございますと、高慢らしく御吹聽を致す譯には行かぬ。

▲萬事亞米利加流

（外觀の美に驚かされたも無理は無い）

打明けた御話が、最初我々が亞米利加へ行つた時は、舞臺の構造の廣大なとや、大道具小道具の完備して居るとや、盛かんに電氣を使つて、光線の取方を巧妙自在にするとや、演劇其物よりは、演劇の附屬物の、善盡し美盡して居るに、只管耳目を驚かして、日本の歌舞伎座は、あれでも劇場であるか？、技藝の巧拙、區帳の善惡を喋々するよりは、先づ劇場の規摸、構造について善美を計るが、演劇改良の第一着ではあるまいかと、斯ういふやうな感じが眞先に浮んで來たです。外觀の美に打たれて、直ぐに夫れを模倣したいといふ考への起るのは、コレハ人情の自然で、今の大臣や學者連が、洋行の初發は、私が劇場を見たのと同じ考へを抱いて歸へられた人が多いのみならず、荒木の儀の考へを、無理遠りに實行して失敗をした人が澤山ある位ねだから、我々がソンナ考へを抱いたのも無理は無い。）夫れからです、段々我々の芝居を興行したり、亞米利加の芝居を見物をしたりした經驗の結果、芝居といふものは、日本のやうに、切ッたりハッたり、血を出したりするのは野蠻の極だ。悲んだり泣いたりするやうなもの許りでは、陰氣でいかぬ。ナンデモ喜劇の方面をコレカラ開拓して、ソシテ舞臺には盛かんに電氣を利用して、音樂手は五六十人、俳優は百人二百人も使ひ、スバラシク大きい仕掛で以て行くべしだと、萬事亞米利加流に心醉をしたです。

▲歐米漫遊は走馬燈を見るが如し

（今日の信仰は明日になッて破れる）

亞米利加風の芝居に心醉して、夫れから英吉利西へ行ッて見ると、舞臺の規模、構造道具立などは、亞米利加に比すると、萬事質素で、狂言の筋も、例の忠孝節義で堅めた保守的の者であるから、

亞米利加風のケバケバしい事が、少し馬鹿々々しくなッて、佛蘭西へ渡ると、腹切狂言が歓迎されるやうな殆末になり、其國々に依て國民の性格が異はる如く、狂言の受け方が違ふので、何處を標準に覘ッてよいのか、我々の頭では、一寸走馬燈を見るやうな氣がして、聊か見當に迷はざるを得なかッた。若し私が亞米利加なり佛蘭西なり、何處か一ケ國を興行して、其處に二年の日月を費やしたなら、偏狹ながらも、ドウニカ一定の意見が出來たかも知らぬが、昨日の信仰は、今日になッて破れ、今日の信仰は、明日になッて破るゝといふやうな工合であるから、只今の處、世界的の興行をする狂言には、如何なる者を選擇すべきか、さういふ點についても、まだ確たる自信は無いですが、要するに、日本固有の狂言、所作事を普く歐米人の目に紹介して、世界の日本として、未だ知られざる日本の藝術を益々發揚して行くことは、目下の急務と信じて居ます。世間では一度ならず二度までも、私が歐羅巴へ行ッて、日本演劇を代表して、拙藝を演じ散らすのは、寧ろ悲むべき事と、非難冷笑する人があるですが、さらばといッて誰一人歐米の舞臺に打ッて出やうといふ、勇氣のある俳優が無いぢやありませんか、夫故己む無く我々をして男を皷さしむるに至ッたのです。若し我々の拙藝を歐米人の目に見せた結果、彼等をして日本演藝は斯くの如き下だらぬものかと、思はしむるやうなことになッたら、夫れは寧ろ今の社會の薄志弱行から來した罪で、私の罪では無いと言ッてもよい。

▲差詰め歐羅巴した日本芝居

（彼地で見聞の結果）

シカシ私が今度見聞をして來た結果、日本演劇歐羅巴の第一着として、彼の長を取り、我の短を補ふために、差詰め輸入をしたいと思ひ付いたのは、第一時間を節約する事……コレには色々觀ッて居ますが、重なる箇條を擧げると興行日數を一週間、一日の開場時間は五六時間、幕合は長くて十二三分間、といふ風に、萬事時間の節約を厲行する事は、歐羅巴の最急務と思ふです。第二は舞臺の道具建を繁用せぬやう、又夫れが爲めに時間を費さぬやう、道具幕を多く用ゐる事、ソシテ今日の處では、花道を全廢する譯には行かぬが、追々其手段を取ッて行くやうに、西洋流に、內部から見る仕組の舞臺を、成る可く用ゐる事、コレは、從來の日本舞臺より、萬事非常に輕便になるです、第三亞米利加流の電氣を利用して、光景の變化を自然的に現はす事、第四今の興行人を掃蕩して、之れに代もるに、今少く文明的進歩的の頭腦あるものを以てする事、第五俳優の不勉强と不信用を來す媒介となり易い、前給金なるものを全廢して、給金は凡て働いた後で取るやうにする事、第六一般に俳優の學識と品格を高むる事、

▲最後の目的

（歸する處は矢張俳優學校）

最後の學識と品格を高むると云箇條は、私の口から或は言れた柄では無いかも知れぬが、今度彼地へ行ッてしみ〴〵感じて來た事です。實に今迄のやうに、亂倫敗德な事を遊るのを俳優の名譽のや